

巧に組織された構造と共に又より巧妙な血液の循環、生活の汁液の種々の混淆、かくて又彼のより熱烈でより一定した生命ある體温の温度を與へたので、之に依つて人間のみが西伯利の又阿弗利加の一住民となり得るのである。唯直立せる精巧に組織された構造によつてのみ人間は如何なる他の地球上の生物も出来ぬ程に寒暑に堪へられ且つ而も最小の程度に於てのみ變化するやうになり得るのである。

扱この華奢な構造と之に依つて生ずるすべてのことと共に又勿論幾多の病氣に門戸が開かれた、之は動物の何等知らなかつたことでモースカーチは能辯に算へ立てて居る。眞直な機關に於て循環を爲し遂ぐる血液斜な地位に壓逼されて居る心臓、直立した容器に於て仕事を爲す臟腑、これらの部分は實に動物の體軀に於けるよりも吾人に於て混亂のより多くの危険に暴されて居る。殊に女性は又吾人よりもより不廉により大いな華奢を購はねばならぬやうに思はれる、而してこの點に於て又自然の好意は様々に補充し緩和して居るのである。蓋し吾人の健康、吾人の幸福すべての吾人の實體の感覺と刺戟とは精神的で精巧であるのである。如何なる動物も一瞬間なりとも人間の健康と歡喜とを樂しむものはない、人間が飲む神酒の泉は一滴も之を味はない。實に又單に體格上から觀察しても動物の病氣は確かに數が少い、何となればその身體の構造は粗野では

あるが併しその代り益々活動的で鞏固であるからである。その細胞の組織、神經の包皮、動脈、骨格更に腦は吾人よりも丈夫である。故に又人間に近いすべての陸上動物は、多分その壽命の吾人に近い若干の象を除いては、人間よりは生命が短い。而して人間よりも遙に早く自然の死を遂げる、換言すれば硬化した老若となつて逝く。故に自然は人間に地球上の組織が捕へ得る最も長い隨つて最も健全で最も歡喜に充ちた生活を與へたのである。多方面の人間の性質よりも多方面に且つ容易に自ら助くるものは外にない。狂態罪惡のすべての邪曲は勿論何れの動物も之を能くせぬことであるが、吾人の機關を自然が多くの状態に於て弱められ損はれる程度に於て弱め且つ損ふ爲に存して居るのである。自然は好意を以て何れの風土にも藥草を與へ之を以て病氣を醫するのである。而してすべての氣候の混亂によりてのみ初めて歐羅巴が自然に従つて生息せる何れの民族にも發見されぬ罪惡の溜池と爲され得るのである、而も亦この自ら努力して得た惡に對して自然は又吾人に自ら努力して得る善を授けた、是は吾人に授けらるべき價值ある唯一のもので即ち醫師である、醫師は自然に従ふ時は自然を助け、而して自然に敢へて従はず又従ふことの出来ぬ時は少くも科學的に病人を葬るのである。

而して吾人人類の年齢と永續とを定める神の家計は如何に慈母的に注意と賢明とを示したること

である。すべての生命ある地球上の生物の迅速に完成されねばならぬものは又迅速に生長する、早く成熟して速かに生活の目的に達する。人間は眞直に植ゑ附けられた昇天の木のように徐々に成長する。人間は象と同じく最も永く母體に止まつて居る、青年の時代は長く繼續し何れの動物よりも比較し切れぬ程長いのである。故に勉強し成長し人生を歡喜し無邪氣に享樂する幸福な時代を自然は之に許し得る丈け長く許したのである。多くの動物は數年にして數日にして實に殆ど誕生の瞬間に於て完成される、併し又之が爲に益々不完全であつて益々早く死亡するのである。人間が最も多く學修せねばならぬのは最も多く學ばねばならぬからで、蓋し人間に於ては萬事は自己の到達した熟練と理性と藝術とに關係するのである。後になつて又名狀し難い澤山の災難と危険とに依つて生命を短縮されることはあるが、併し心配のない長い青年の時代を樂しむるのである。蓋し身體・精神と共に又世界も左右に於て發達するのである、蓋し徐々に向上し常に擴大する視界と共に又希望の限界も擴張され而して青年的に高尚な心臓は敏活な好奇心を以て性急な熱狂性を以てすべての大、善美に對して常に激しく鼓動することを覺えるのである。性慾の精華も健全な誘惑を受けぬ人間に於ては何れの動物よりも晩く發達するのである。蓋し人間は長く生きねばならぬので精神力・體力の最も高尚な汁液を餘りに早く消耗してはならぬのである。早く戀

愛に身を焦す昆蟲は又早く死ぬのである、貞節を守つて一對を爲せるすべての動物は結婚せずに生活するものよりも長く生きるのである。多淫な牡鶏は早く死ぬが貞節な山鳩は五十年も生きることが出来る。故に地球上に於ける自然の寵兒に對しては又結婚も規律が立てられて居る。而して人生の最も清新な初年は包まれた無邪氣の蕾として過さねばならぬ。次に成年の最も快活な力が多年繼續するのである。其の間に於て理性は成熟し人間に於ては而も生殖力と共に動物に知られぬ高齢まで綠色を保つのである。かくて最後は靜かに寂滅し、土に返つた死灰も包まれて居た精神も本來關係のない結合から脱却するのである。故に自然は人間の身體の脆弱な小屋に地球上の一組織の捕へ得べきすべての藝術を用ゐたのである、而して生命を縮め且つ弱くするものにして自然は少くも短い享樂は敏感なものにして之を償ひ又擦り減らす力は深刻に感ずるやうにして之を償つたのである。

六 人間は人道と宗教とに教化された

私は人道と云ふ言葉に於て私がこれまで理性と自由、精巧な官能と本能、最も華奢で最も強壯な健康、地球の充實と支配へと人間を高尚に教化することに就いて述べて來たすべでのものを包

容したいと望むのである。蓋し人間には我が地球の造物主の像を茲に見ることの出来るやうに模擬して生活して居ると云ふよりはその本分に就いて更に高尚な言葉はないのである。人間の最も高尚な義務を敷衍する爲には單にその形狀を記述することが出来ればよいのである。

(一)生物のすべての本能は自己の保存と他の生物への同情又は交渉に歸著するのである。人間の組織的構造はより高等な指導が之に添へられるならばこの好悪に最も選擇した秩序を與へるのである。直線が最も強い線であるやうに人間は又自分を保護する爲に外に對しては最も小さい容積を占め内に於ては最も區々の速力を具へて居るのである。人間は最も狭い土臺の上に立つて居る故に最も容易に肢體を掩護することが出来る。その重心點は地球上の生物の有して居る最も丈夫な腰の間に存して居つて如何なる動物も人間の敏捷な強さを示すものはない。壓縮された堅固な胸と雙腕の利器は實にこの位地に於て上から人間に心臟を擁護し頭から膝までの最も高尚な生活の機關を保護する防禦の最も廣い限界を與へて居るのである。人間が獅子と闘つて之に打ち勝つたと云ふのは何等小説ではない、阿弗利加人は用心と謀計と威力とを該ね備へるならば一匹以上とも敢へて闘ふことを辭せぬのである。而も人間の構造が専ら防禦に適するやうに出來攻撃に適して居らぬことは眞實である。攻撃に於ては技術の援助を借らねばならぬが併し防禦に於ては

人間は自然に於て地球上の最も有力な生物である。その形狀も亦人間に平和を教へるので掠奪的な虐殺荒廢を教へはしない、是れ即ち人道の第一の特徴である。

(二)他に關係する本能のうちでは性慾が最も有力である、是も亦人間に於ては人道の組織に從屬せしめられて居る。四足の動物に於ける更に最も羞恥の念ある象に於ける交尾は即ち人間に於てはその構造上接吻と抱擁とに當るのである、如何なる動物も人間の唇を具へて居るものはない。その精巧な上の溝は母體の結實に際し顔面に於て最も遅れて形成されるのである。この唇が美しく且つ理智に富んで結ばれねばならぬのは云はば戀愛の力の最後の記號である。故に何れの動物に就いても女を知ると云ふ昔の言葉の羞恥を示した言ひ現し方は當て嵌らぬのである。昔の小説の語るところに據れば兩性は會ては花のやうに男女兩性を備へて居つたが併し別たれることになつたとのことである。かかる寓意的な物語は小説として人間の戀愛の動物に優れて居ることを隱微に語らんとしたのである。人間の性慾が動物に於けるが如く直ちに四季に左右されて居らぬと云ふことは、假令この點に關する人體に於ける變革に就いて何等信用ある觀察が未だ爲されて居らぬとしても明かに人間は必要に支配されて居るのでなくて、戀愛によつて左右され依然として理性に從へられ而して人間に關係し交渉あるすべてのものの如く自發的な節制に任されねばなら

ぬのである。戀愛も亦人間に於ては人道的であらねばならぬのである。之が爲に自然は又人間の形状の外に兩性に於ける性慾の發達の晩成、その永續・關係を定めるのである。實に自然は之を全生涯を通じて一體に結合せんと感ずる二つの實體の協同的な任意の聯合並びに友愛的な交渉の法則に従はしめるのである。

(三)戀愛の交渉の外にすべての他の柔しい情緒は、同情を以て満足するのであるから、自然は人間をすべての生物のうちで最も同情的なものに造つたので、蓋し云はばすべてのものから人間を造り各々の生物界に對し同じやうな關係に組織したので即ち人間は之に同情せねばならぬのである。人間の纖維組織は精巧に且つ微妙に弾力性を具へ又神經組織は顫動する身體のすべての部分と組み合されて居るので、すべてに感通する神の相似體として殆ど各々の生物が之を要し而して人間の全體が自己が破滅なく實に自己の危険を冒しても堪へ得る程度に於て之に同情し得るのである。一木に對しも亦吾人の機關は生長して居る緑の木であるので之に同情する、而して新緑の若木の倒壊又は傷害に身體の上に於て堪へ切れぬ人間もある。木の頂の凋衰するのは吾人の悲しむところで、可愛らしい花の凋落するのは吾人の哀れを催すことである。蛆蟲が壓し潰されて彎曲したのも亦優しい人間には冷淡になり得ない。而して動物が完全になればなる程、その組織

に於て吾人に近づけば近づく程其の苦痛に際してより多くの同情を起すのである。生物を生きながら解剖してその瘞癰を目撃するには冷酷な神經が必要である、名譽と科學とに對する飽くなき渴望のみが次第にこの有機的同情を鈍らすのである。優しい女子は死者の解剖にさへ堪へることが出来ぬのである、その目前に切開される各々の肢體に於て疼痛を感ずるので殊に肢體が柔軟で高尚なものであればある程甚しいのである。引き出された臟腑は戰慄と壓惡とを起すのである。切り離された心臓、切り割かれた肺臓、切り壊された腦は解剖刀を以て吾人自身の肢體を且つ切り且つ刺すのである。愛して居つた死人の屍に對してはその墓に於てもなほ同情するので、吾人は死人の最早感ぜぬ墓穴の冷たさを感じ、その骸骨に觸れたのみで全身に身振ひするのである。萬物を自ら取り出し之に對して最も切實な同情を感ずる世界の慈母は人體をかく同情的に組織したのである。人間の顫動する纖維組織、同情する神經組織は理性の命令を必要とせず、之に先ち實に數々有力に且つ反抗して之に對抗するのである。吾人が狂者に同情して之と交際する時は自身も氣狂となるので、而して早く曉れば曉る程人間はそれを恐れるのである。

聽覺が視覺よりも遙かにより多くこの同情の念を覺醒し且つ強めることに貢獻して居るのは驚くべきことである。或る動物の呻吟その苦惱する體軀から吐き出した叫聲は之に似たすべての

ものを引き寄せて、數々目撃さるるやうに愁然として哀號するものの周りに立ち之を救助せんことを思はしめるのである。人間に於ても亦苦痛の繪畫は優しい同情よりは寧ろ恐怖と苦悶とを起さしめるのである。併し苦惱するものの唯一聲が吾人を呼ぶや吾人は狼狽して之に急ぐのである、精神が鋭く刺されるからである。音聲は目前の繪畫を生きた實體に爲すのであるから、かくて内外の感情のすべての記憶を回想して一點に湊合するのであるか。又は私の信ずるが如くになほ深い組織上の原因があるか。經驗が眞實であるから十分である、而して經驗は人間に於ては音聲と言語とによつてその大きな同情の基礎を示して居る。呻吟することの出來ぬものには吾人は同情が少い、是は肺臟がなく不完全な生物で吾人に餘り似ずに組織されて居るからである。生れつきの聾者啞者には人間や動物に對する同感同情の念の缺如せる恐るべき實例が若干ある、而して吾人は更に野蠻の民族に就いてその實證を十分に認めるのである。而もなほこれらに於ても亦天則がなほ明白である。窮乏と飢餓とに迫られて兒女を殺すことを辭せざる父もその眼を見ざる前にその聲を聞かざる前に母體に於て之を敢へてするのである。而して多くの嬰兒殺しも嬰兒の初聲ほど訴へるが如き泣聲ほど忍び難いものながく記憶に残るものはないと云ふことを認めて居る。

(四) 萬事を感じる慈母がその兒女の同情の念を擁護し次第に之を向上發達せしめる鎖は美しい。生物がなほ魯鈍で粗野である場合には子供に對するの世話も又託されて居らぬので自分自身の爲に心配することも出來ない。鳥は母の愛を以て雛を孵化し且つ教育する、之に反して愚昧な駝鳥は卵を砂の中に産むのである、彼の古書に「駝鳥は蹄が之を踏み碎き野獸が之を破壊することを忘れた、それは神が智慧を奪ひて之に何等の理解をも與へぬが爲である」と記されてある。生物がより多くの腦を授けられると同一の組織上の原因によつて又より多くの體温を授けられ生けるものを分娩し又之を孵化し之を哺乳しかくて母の愛情を起すのである。生きて産れた生物は云はば母の實體の神經の髓である、自ら乳を吸ふ小兒は母の植物の芽でその一部として滋養を攝るのである。この最も深刻な同情の念の上に動物の家庭に於てすべての優しい本能が建設されるので自然はその種屬をかく向上せしめ得るのである。

人類に於ては母の慈愛は更に高尚なもので人道の眞直な地位に出來た芽である。母の目前に於て乳兒はその膝に倚り最も甘く又最も滋味の飲料を吸ふのである。若し民族が必要に驅られて小兒に背に於て授乳するならば、是は動物流の而して身體を醜からしめる方法である。父の而して家庭の愛は最大の怪物をも馴らすのである、蓋し雌獅子も又その子獅子に對して親切である。父

の家庭に於て血縁・信任・愛情の紐に依つて聯結された最初の社會が成立するのである。故に又人間の野蠻狀態を打破し之を家庭的交際に慣らすには人類の小兒時代は永い年の間繼續せねばならぬのである。自然は之を強制して微妙な紐を以て之を糾合しかくて忽ちにして完成される動物の如くに散り散りに別れて忘れらるが如きことなからしめるのである。扱母が小兒の授乳者であつたが如くに父は其の教育者となるのである。而してかくして新團員は人道に結び付られるのである。茲に即ち必要な人間社會の基礎が置かれるのでなくんば如何なる人間も生長することが出来ず、人間の多數も存在することが出来ぬのである。故に人間は社會に適するやうに生れたのである、是は父母長者の同情によつて示され又小兒時代の多年に互れることに由つて示されて居るのである。

●(五)併し人間の單純な同情はすべてのものに普及されず且つ人間に於ては局限された組織の複雑な實體として自分から隔在して居るすべてのものに對しては隱微な數、無力な指導者となり得るのみであるから、正しく指導せんとする慈母はその複雑に優美に編み上げた枝を確かな準繩の下に従はしめるので、是は即ち正義と眞理との規則である。人間は眞直に造られて居る、而してその身體に於てすべてが頭の用を勤めて居る如くに、兩眼が唯一事物をのみ見る如くに、兩耳は

唯一音響を聞くのである。自然が外部の衣裳全體に互つて到る處に均齊と統一とを聯絡し而して統一を中心に置いて離反せるものをして各所より之に向はしめる如くに、又内面に於て正義と均衡との大法則は人間の準繩となるので、即ち他人が爾に爲さざることを望むものは又他人に對して爲すな、他人が爾に爲さねばならぬことは汝も亦他人に爲せと云ふのである。此の抵抗を許さぬ規則は怪物の胸に於ても亦記され居るので、蓋しその他を食ふや又他に食はれることを期待して居るのである。是は眞僞の規則、同一と同一との規則で、すべての人間の官能の組織に、實に私をして云はしめれば人間の眞直な形狀その物に基いて居るのである。若し吾人が斜に見るか、又は光線が斜に照すならば吾人は直線の概念を得ぬであらう。若し吾人の組織に統一がなく吾人の思想に細心を缺いて居つたならば吾人は又吾人の行爲に於て不規則な曲折を爲して彷徨しかくて人間の生活には理性もなくなるであらう。正義と眞理との法則は忠實な伍伴と同胞とを生ずるのである。實にその行はれるに於ては仇敵も亦友人となるのである。私の胸に抱擁して遣れば又私をその胸に抱擁して呉れ、私はその爲に生命を犠牲にすれば私の爲に又犠牲になつて呉れるのである。故に種々の人間に於て思想の同一様なこと目的の統一されて居ること一の同盟に對して同様に忠誠なことはすべて人間法、國際法、動物法を成立せしめた。蓋し社會を爲して生活して

居る動物も亦正義の法則を遵奉するので、而して詐謀や暴力に訴へて之に背く人間は假令現世の國王又は君主であつても最も人非人の生物である。嚴正な正義と眞理とがなければ如何なる理性も如何なる人道も考へられない。

(六)人間の眞直で立派な形状は人間に儀容の教化を授けるのである。蓋し儀容は眞理と正義との美しい下婢である女友である。身體の儀容とは神が人間を造つたやうに眞直に立つことである。眞の美は内部の完成と健全との快適な形状に外ならないのである。試みに不注意と間違つた藝術とによつて傷つけられた人間の神像を考へて見よ。美しい毛髪は引き撈られ又は縮れて塊を爲し、鼻と耳とは穿通され又壓し下げられ顎と身體の爾他の部分とは自ら又は衣裝を以て形を損ねて居る。試みに是を考へて見よ最も風變りな流行を好むものであつても誰か茲に端正優美な人體の儀容を認めるものがあらうぞ。風俗・態度に就いて相違はない、習慣・藝術・言語に就いても相違はない。故にすべてこれらの點に於て同一の人道が行はれて居るので、地球上の少數の民族のみが之に達し、而して多數のものは野蠻と間違つた藝術とによつて之を傷つけて居るのである。この人道を探究するのが眞の人間の哲學では各々の賢人に天から告げ且つ政治に於けるが如く社交に於てすべての藝術に於けるが如く科學に於て示されるのである。

(七)最後に宗教は人間の最高の人道である、而して私が之を人道に數へても何人も之を怪しまぬであらう。人間の最も優秀な天稟は理智であるが、理智の任務は原因と結果との關係を探知し之を探り得ぬ場合には之を推測するのである。人間の理智はすべての事物・事業・藝術に就いて之を爲すのである。蓋し出來上つた技巧をその儘に採用した場合には又之より以前に理智が原因と結果との關係を確定してかくてこの藝術を輸入せねばならぬ筈である。扱吾人は自然の事物に於て本來何等内面に存する原因を理解せぬのである、吾人は吾人の心裏に何が働いて居るかを自ら認めず又解せぬのである。故に吾人以外の總べての事物に於ては、又唯夢想があるのみである、唯想像と名稱とがあるのみである。而も吾人が數々又斷えず一様の原因と一様の結果とが關聯して居るのを見るのを見るならばそれは眞實の夢である。是が哲學の經路である、而して最初で又最終の哲學は常に宗教であつた。最も野蠻な民族も亦宗教を奉じて居る、蓋し地球上の何れの民族も全然宗教のないものはないのは恰も人間の道理と形状とを具へず言語と結婚とを具へず若干の人間の風俗と習慣とを具へぬもののないのと同じである。それらの民族も目に見える造物主を見ない場合には目に見えぬ造物主を信じ而して又常に極めて隱微ではあつたが事物の原因を探求したのである。勿論自然の本體よりは寧ろ事象に、歡喜すべき且つ永久的な方面よりは寧ろ

恐怖すべき且つ一時的な方面に拘泥したので、又すべての原因を一原因の下に整頓する程進歩したものは稀であつた。而もこの最初の試は即ち宗教であつた。而して多數の民族に於て恐怖がその神々を發見したと云うても何の説明にもならぬ。恐怖のみでは何物をも發見せぬのである。恐怖は單に理智を覺醒して揣摩を試み眞偽何れにせよ推測せしめるのである。故に人間が最も軽い刺戟に於て理智を働かすことを知るや否や、即ち動物と異なつて世界を目撃するや否や、目に見えぬ威力ある實體があつて助けても呉れ又損害を來すこともあると想像せねばならぬのである。そこで之を友達と爲し又は友達としてゆかうと試みるので、かくて宗教は眞偽・正邪何れに導くにせよ、隱微であつて危険と迷路との多い人生に於て人間の教訓者となり、慰安を與へる忠告者となるのである。

否すべての生命すべての實體形體の永久の淵源たる造物主はその生物に證明を與へずに置いたのではないのである。匍匐する動物もその組織に従つて氣力と好惡とを行使しつつ陰約の間に造物主の威力と慈仁とを感ずるので、人間を以て地球の上の目に見える神と爲すのである。而も人間を更に高上せしめるので人間は之を解せず又欲せずして自ら事物の原因を探索し其の關係を揣摩しかくて總べての事物の關係を示せる實體の實體なる造物主を發見するのである。人間はその

性質の内面に就いては之を解して居らぬ、何となれば事物の力を内面から洞察せぬからである。實に造物主の姿を現はさんと欲しても間違つたので又間違はねばならぬ、蓋し造物主はすべての形體の最初の唯一の原因ではあるが形體を具へて居らぬからである。而も造物主に就いての間違つた閃光も亦實に光線であつて、人間がその爲に建築した虚偽の祭壇もその存在に就いては勿論のことなほ又之を知つて之に祈願せんとする人間の力の偽らざる記念物である。故に宗教は又既に理智の練習として觀察しても最高の人道であり、人間精神の最も氣高い精華である。

併し宗教は更により以上のもので、人間の心情の練習であり又人間の能力・氣力の最も純潔な指針である。若し人間が自由に適するやうに造られて地球上には人間自ら己に課したものの外には法則がないとしたならば、人間にして應て神の規則を自然に就いて認め且つ子として父の完全圓滿に向つて努力せざらしめば、人間は最も蒙昧な生物とならねばならぬ。動物は現世の家計の大家庭に於て生れながらの奴隷である。法律と刑罰とに對する奴隸的恐怖が又動物のやうな人間の最も確かな特徴である。眞の人間は自由であつて善心と愛情とによつて服従するのである。蓋しすべての天則は之を理解して見れば善いものであつて而して理解せぬ場合には小供らしい質朴さを以て之を遵奉することを學ぶのである。賢人の語つた通り、君は進んで行かずとも行かねば

ならぬのである、自然の規則は君の爲に更まりはせぬ。併し君が天則の完全で且つ善美該備れることを知れば知る程、此の生活に於ける神の模型たらしめることとなるであらう。故に眞の宗教は小供らしい神の禮拜である、人間の組織に於ける至高至善の模倣である、更に最も深刻な満足である、最も有力な善心と博愛とである。

而して茲に於てか又何故に地球上のすべての宗教に於て神が多少人間に類似するやうにならねばならぬかを見るのである、或は人間を向上して神に近からしめ或は世界の父を人間の形體に引き下げるのである。人間よりも高尚な生物は吾人は知らぬのである、而して人間を感動せしめ人間らしく爲さねばならぬものは人間的に且つ考へ且つ感ぜられねばならぬ。故に形而下的民族は人間の姿を高尚にして神の美に近づかしめるのである。形而上的に考へた他の民族は目に見えぬものの完全圓滿を象徴して人間の眼に示したのである。神が吾人に現はれんとした場合に於てもその時代に應じて人間らしく吾人の間に於て且つ説き且つ行つたのである。宗教ほど吾人の形と性質を極めて高上したものは外にはない、單に是のみがかくなくし得たのは宗教が吾人をして最も純潔な本分に立ち歸らしめたからである。

故に不死の希望と信仰とが又宗教と關聯され而して宗教によつて人間の間に確立されたことは又事件の性質で神と人性との概念から殆ど分離されぬのである。吾人は永生の小供であつて吾人は茲に之を模倣して知り且つ愛することを學ばねばならず、之を知るが爲にはすべてによつて覺醒され、之を模倣するが爲には愛情と苦難とによつて強ひられて居る。而して吾人はなほ茫漠と之を知つて居るのである、小供らしい弱さを以て之を模倣して居るのである、實に吾人は何故にこの組織に於ては別に之を知り別に之を模倣することが出来ないかの理由を認めて居る。而して吾人に取りては他のことは可能でないので、吾人の最も確實な最上の素質を以てするも何等の進歩も實際あり得ない。蓋しこの吾人の最も高尚な力は實に此の世界に取つては微力なものである、茲に於てはすべて窮乏の爲に盡して居るので彼岸に向つて努力して居るのである。而して吾人は實に吾人の高尚な機關が不斷にこの窮乏と戦つて居るのを感じる、實に人間に於ける組織の目的と思はれるものは地球上に於てその生誕の場所を見出すが而も之と同じくその完成の場所を見出すのである。然らば神は絲を切斷して而して人間の組織に就いてすべての準備を爲せるにも拘らず結局その全體の本分に就いて欺かれた未熟な生物を残したのであるか。地球上に於ける萬物は補綴細工である、而して人類が依然として空想に驅られて居る純然たる亡靈の群である限り永久に不完全な補綴細工に止まるであらうか。茲に宗教は吾人人類の信仰に對するすべての缺陷と希

望とを聯結し而して人道に不死の冠を纏はしめるのである。

二〇二

七 人間は不死の希望を懐くやうに組織された

靈魂の不滅に就いては其の簡單な性質からその唯神論等から茲に何等純正哲學上の證據を豫期しては居らぬ。物理學は靈魂の簡單な性質を知つて居らぬ。而して寧ろ之に對して疑惑を起し得るであらう。蓋し吾人は多種の刺激と感覺とから出芽する如くに見える作用によつて唯一の糾合された有機體としてのみ吾人の靈魂を知るのである。最も一般の思想は單に無數の個々の視察の結果である、而して吾人の身體の支配者は無數の從屬して居る力に對して恰もこれらすべてのものにその場所に於て又現れて居る如くに作用を及ぼすのである。

ボンネの所謂細胞哲學も亦茲に吾人の案内者になることは出来ない、蓋しこの哲學は新しい生存に移り行く點に就いて一部分證明されず一部分之に關係がないのである。何人も吾人の腦に於て精神的な腦を新生命の細胞を發見したものは無い、之に些かたりとも似たものも亦腦の構造のうち認められぬ。死者の腦は依然として存して居る、而して吾人の不死性の芽が他の力を具へて居なかつたならば乾燥して塵芥に歸するであらう。實にこの哲學又は茲には全然關係のないも

のであると私には思はれる。蓋し吾人は茲には一生がその種類の若い生物として出芽することを説くのではなくて、死んだ生物が新生命となつて發芽することを云ふのである。假令現世の一代に於てのみは又絶對的に真理であつてすべての希望を之を繋ぐことが出来ても、寧ろこの希望に對して打破し難い疑惑を懐かしめるのである。若し花は何時までも花、動物は何時までも動物であらねばならぬと云ふことが永久に一定され、當初から生物は豫定の細胞に於てすべて機械的に存在して居つたとしたならば、至高の存在に對する誘惑的な希望は空しくなるのである。私は永久に今日の生命を保ち他の高尚なものにならぬやうに細胞に於て豫定されて居るのである。私から出芽すべきものは私の小兒の豫定の細胞である。而して若し木が枯死すれば細胞のすべての哲學は之と共に亡びるのである。

故に若し吾人にしてこの重大な問題に就いて甘言を以て欺かれることを好まずば且つ深く且つ廣く著手して而して全體の自然の類似に就いて注意せねばならぬ。その力の内面の領域は吾人の見難いものである、故にその内面が又如何なる状態に於てあるかと眞の説明を望むのは徒勞でもあり又無用のことである。併し自然の力の作用と形狀は吾人の前に存して居る、故に吾人は之を比較し而して例へばこの地球上に於ける自然の徑路からその全體に行はれて居る類似の點から希

二〇三

望を集めることが出来るのである。

第五卷

一 我が地球上の生物に於ては形式と氣力 とが向上的に序列を爲して居る

(一)石から水晶へ、水晶から金屬へ、これから草木へ植物から動物へ、これから人間へと吾人は組織の形式の向上するのを見た、之と共に又生物の氣力と本能とは複雑になり而して結局すべては人間の形狀に於て包括され得る限り統一されるのである。人間に於て向上は停止した、吾人は人間以上により複雑に且つより技巧的に組織された生物を知らぬ、人間は地球の組織の構成され得る最高のものと思はれるのである。

(二)この實體の序列に於て吾人は生物の個々の本分に於て許される限り主要な形式に類似の存して居ることを認めるので、この主要な形式は數へ切れぬ程變化するが常に益々人間の形狀に近づくのである。粗野な低級のものに於ては植物や植蟲類の世界に於ては之はなほ認められない。より完全な實體の組織に於て明かになつて來る、種屬の數は少くなり結局人間に没却され統合さ

れるのである。

(三)吾人は形状の如くに又氣力と本能とが人間に近づくのを見た。本能は植物の營養と生殖とから向上して昆蟲の藝術作業となり、鳥や獸類の家庭並びに慈母の注意となり、遂に人間に似た思想となり自ら修得した技巧となり、最後にすべてを人間の理智と自由と人道とに統合するのである。

(四)何れの生物に於てをその進捗せねばならぬ自然の目的に従つて又生命の長短が定められる。草は早く凋落するが木は徐ろに生長せねばならぬ。昆蟲は美術品を世界に齎らし風に澤山に生殖するが麤て世界を去るのである。獸類は徐々に生長し一度に澤山生まず又全然合理的な生活の方法を取らねばならぬので、より長い而して人間に比較して最も長い生命を有するのである。併し自然はこの點に於て又個々の生物に就いてのみならず又全種屬と更にその上に位せる種屬との維持に就いて考へて居るのである。下の世界はかくて澤山の生物が住んで居るのみならずなほ又生物の目的にして許さばその生命を永く續かしめるのである。盡きざる生命の源泉たる海は頑強な生命の力を有せるその生物を最も永く擁護するのである。而して半ば水中動物である水陸兩棲動物は生命の長さがそれに近い。空中の生物は陸上の獸類を次第に硬化する地上の食物に

よつて煩はされることが少いので大體に於て之よりは長命である。故に空中と水中とは後に速かに變化して地球に消磨し且つ消盡される生物の大きな倉庫である。

(五)生物の組織が整へば整ふほどその構造は益々低級の世界から湊合される。この種々相は地下に始まり植物・動物を経て向上しかくて最も複雑な生物、人間に至るのである。人間の血液とその種々の名稱の要素とは世界の提要である、石灰と土塊、鹽と酸、油と水、生長・刺戟・感覺の力は人間に於て有機的に統一され互に織り込まれて居るのである。

吾人はこれらの事物を或は自然の戲と看做さねばならぬであらうが理智に富んだ自然は決して無意味に戯れる筈はない、然らば吾人は又外界の組織に於て認めると同一の正確な關係、周密な變化を示す目に見えぬ力の世界を認めねばならぬ。吾人が自然を知れば知る程吾人は益々最下等の生物即ち苔蘚・海綿等に於ても亦この内在的な力を認めるのである。殆ど無盡藏に生殖される動物に於て自己の刺戟によつて種々に活潑に動く筋肉に於てその存在は否定し難いのである。かくてすべてのものは有機的に働く全能力を具へて居る。吾人は其の何處に始まるかを知らないなほその何處に終るかも知らない、蓋し生物に於て作用の存する處は力であり、生命の表現される處は内部の生命である。實に生物の目に見えぬ世界に於ては力の關係が存するのみかその向上的

序列が存して居るのである、蓋し吾人は目撃される世界、組織された形式に於て吾人の目前にその働くのを見るのである。

實にこの目に見えぬ關係は外部の形式の世界が吾人の愚鈍な官能に示すよりも無限に深刻に確乎として且つ恒久のものであらねばならぬ。蓋し壓縮された無限に澤山の力の集團たる組織は何であるか、その力の大部分は實に關係あるが爲に他の力によつて制限され壓逼され若しくは少くも吾人の眼に隠されて居るので、吾人は個々の水滴を唯雲の暗澹たる形状のうちに認めるのである、即ち個々の實體その物ではなく唯組織をのみ見るのである。是は全體の必要に従ひかく組織されねばならぬので異なつて組織されることは出来ない。生物の眞の段階は全知の神の眼には人間の口にするものとは別な如何に異なつた世界にあらねばならぬことぞ。吾人は吾人の洞察せぬ形式を整頓するのである、而して小兒の如く個々の四肢に基き又は他の特徴に基いて分類するのである。至高の戸主は相互に角逐せるすべての力の鎖を見て之を保存して居るのである。

是は靈魂の不滅に取つて何を爲すか。すべてを爲すのである。而して惟り吾人の靈魂の不滅に取りてのみならず世界創造のすべての效力あり活動する力の持續に取つて之を爲すのである。如何なる力も亡びることは出来ない、蓋し力が亡びるとは何のことであるか。自然には何その實例

がない、實に吾人の精神には曾てその概念がない。或る物が無である、又は無となると云ふことが、矛盾であるとしたならば、造物主が自ら之に現在し神力が内在的に現れて居る生命あり活動する或る物が無に歸ると云ふことはなほ更に矛盾である、道具は外界の事情で破損され得るのである、併し道具に於ても亦唯原子のみは滅却され又は喪失されない。この原子に於て又働いて居る目に見えぬ力は更に消滅しない。扱吾人はすべての組織に於てその働いて居る力は正確にその協同の時期と主力の發達とを考へて賢明に選擇され巧妙に整理されて居るのを認めるのであるから、自然に就いて力の一の聯絡が斷えた即ち外部の事情が中止した瞬間に於て、之のみを神性と云ふべき賢明と注意とを突然放棄するのみか、更に自己に反抗して微温的なことはその本分でないので全力を擧げてその永久に活動して生命を保つ活動的關係の唯一部分のみをも亡ぼさんとするものであると信ずるのは荒唐無稽のことであらう。萬物を活動せしめる神の生命を與へたものは生活して居る、働いて居るものはその永久の關係に於て永久に働いて居る。

此の原理に就いて更に詳論するのは本書の目的でないから茲には單に實例を以て之を證明して置かう。満開を過ぎた花は凋落する、即ちこの機關は最早生長力を之に於て働かせるのに適して居らぬのである。果實を十分に結んだ木は枯死する、この機關は老衰して聯絡が困難となつたの

である。併しこの事實から毫もこれらの機關を活躍させ生長してかくまで有力に繁殖することの出来た力がこの分解作用と共に消滅したと云ふ結論は生じない、この力は引き寄せた數千の力の上にこの組織に於て支配して居つたのである。解剖された機關の何れの原子にも實にその内部の力は存して居る、この組成に於てすべてを一の目的に向つて支配しその狭い範圍内に於て全能の自然の偉力を以て働いた力は更に有力に永く存せねばならぬである。此の生物は今やその肢體の何れに於ても吾人の目前に示されるやうに自ら補充される有力な刺戟され易い自動性を有せねばならず、而もその瞬間に於て内在せる有機的な全能力の生ける證據たるすべてこれらの力を會て内在して居らなかつたやうに實體の關係から實在の世界から排斥せねばならぬのは、自然のことであると考へるならば思想の絲が切斷されたのである。

而して吾人が地球上に於て知れる最も純潔で最も活動する力に就いてこの思想の矛盾が人間の精神に起らねばならぬか。人間の精神は下等な組織のすべての能力の上に遙かに高く標置して居るので、一種の遍在と全能とを以て私の身體の數千の有機力を女王として支配するのみならずなほ又すべての奇跡のうちの奇跡であるが、自身を洞察し且つ支配することが出来るのである。地球上に於ては何物も人間思想の微妙・敏活・效力の上に出るものはない、何物も人間意志の精力

純潔・温情の上に出るものはない。人間は如何に勝手に非合理に考へ得るとも、人間はその思想のすべてを擧げて秩序を立てる神を模倣し、その意志・行爲のすべてを以て創造に當る神を模倣するのである。類似は事柄そのものに存し精神の本質に基いて居る。神を知り神を愛し且つ模倣することが出来る力は、實に理性の本質に従つて云はば意志に反しても、神を知り且つ模倣せねばならぬ力で、誤謬・過失に於ては又は迷誤と弱點とによつて失敗をも見るが、要するに地球の最も有力な支配者である、統合の外部の事情が變化し若干の下層の配下が背いたからとて、亡びねばならぬことはあるまい。道具がその手から落ちたりとて、最早藝術家でないことはあるまい。茲に思想のすべての關係は焉くに存して居るか。

二 自然の如何なる力も機關の無いものはない併

し機關は決して之に由つて働く力ではない

ブライストリーやその他の學者は唯神論者に一步を進めて、全體の自然に於ては何等純粹の精神を認めぬと云ひ、又物質の内部の状態を未だ十分に長く洞察して居らぬから之に思想又は爾他の精神力がないとは斷ぜられぬと云つて居る。二つとも正しい説であると私には思はれる。すべ

ての物質なくしてその以外に働く所の精神は吾人の知らぬところである。而して物質に於て吾人の多くの精神に類似した力を認めるので、私には勿論極めて相違しては居るが精神と物質とのこの二つの實體の完全な衝突は自ら矛盾して居らぬ場合實に少くも全然證明されて居らぬものと思はれるのである。完全に同様でなく本来互に相反抗して居る二つの實體が如何にして協同に深く相調和して働くことが出来よう。而して精神に就いても將た又物質に就いてもその内面を知らざる吾人が如何にして矛盾を主張することが出来よう。

吾人が一つの力の働くのを見る場合之は實に機關に調和して働くのである。機關なくんば力は少くも吾人の官能に認められぬのである。併し機關と共に同時に存在するので、吾人が自然に於ける徹底した類似を信じ得るならば自然は自ら之を形成したのである。創世の時以來既に存して居つた豫定の芽胞は何れの眼も之を見ない、吾人が一生物の成長の最初の瞬間から注目するのは働いて居る有機力である。個々の實體がこの力を自ら具へて居るならば自ら生長するのである。兩性に別れて居るならば兩性何れも小兒の組織に貢獻せねばならず、而して實に構造の相違に従つて異つた方法で寄與するのである。植物性の生物はその力がなほ一樣ではあるが而も益々深刻に働くので、唯軽い呼吸を以て觸接すれば以てその自己生産を盛ならしめることが出来る、獸類

に於ても亦活動的な刺戟と頑強な生命がすべての肢體を支配しかくて殆どすべてが生産力と複製力とである場合には數々子宮の外に於てのみ胎兒は刺戟を要するのである。生物が組織上複雑となればなる程、其の細胞と稱するものは益々認め難くなるのである。生命ある力が初めて將來の生物の形狀を形成せしめる爲に近づかねばならぬのは有機的な物質である。胎兒が形狀を得且つ完成されるに先つて鳥の卵に於て如何なる變化が行はれるか。有機力は混亂しつつ整頓されねばならぬ、有機力は各部を糾合し又各部を分離せしめる。實に多くの力は恰も角逐を試みるが如く最初には半産に終るのではないかと思はれるが結局均衡が保たれて生物はその種屬として形成されねばならぬものになるのである。若し鳥の卵に於ける又生兒を生む獸類の母體に於けるこの變化をこの活動せる作用を目撃するならば、芽胞が唯發展するのであると云ひ又は添加生長で肢體が外から増殖するのであると云ふのは間違つて居ると私には思はれる。生長は内部の力の作用で自然はその形成さるべく目撃されるやうになるべき楽團を準備したのである。是は自然の經驗である、是は生活力の多少有機的に複雑で充實した種々の種屬に於ける生長の時期である。唯是によつてのみ病氣・災害によれる又は異なる種屬の混淆によれる不具畸形が説明されるのである。而してこの途が氣力と生命とに富んだ自然が繼續せる類似によりすべてその事業に於て云は

ば吾人を強制する唯一の途である。

若し若干の人々の述べたやうに吾人の合理的な精神は母體に於てその身體を而も實に理性によつて組み立てたと云ふのは私の意見であると解するならば誤解である。吾人は如何に遅く理性の天稟が吾人に於て開發されるか、而して吾人は實に之に適するやうに世界に出現したがしかし自力では之を占領することも又力取することも出来ないことを見た。而してかかる組織が亦如何にして人間の最も純粹な理性に取つて可能であらうか。蓋し吾人は之を何れの部分に於ても内外共に會得せず、而して吾人の生活上の活動の大部分さへも精神の意識と意志となくして進行するのである。身體を構成するのは吾人の理性ではなくて神の指とも云ふべき有機力である。永遠の神は自然の大きな歩武の上に廣く之を傳へたので今や有機力は神の手によりて拘束されて神が區別して若き生物の形成の爲に自ら保護を加へて居る有機的物質の小世界にその創造の場所を見出したのである。有機力はその組織と調和して合同し又組織の繼續する限り之と調和して働き、而してその使ひ盡されるや造物主は有機力の勤務を解除し之に他の活動の天地を造るのである。

扱吾人若し自然の歩武を辿らんと欲するならば次のことは明白になるのである。

(一) 力と機關とは實に密接に聯絡しては居るが併し同一ではない。吾人の身體の物質は存在して居つた併し有機力が之を構成し且つ活躍せしめる以前には形狀もなく又生命もなかつた。

(二) 各々の力はその機關に調和して働く、蓋しその實體を表示する爲に唯之を形成したのである。全能の神が之に授けその覆面の下に云はば自身を紹介したと云うてもよい各部を同化するのである。

(三) 覆面が取り除かれるならば力が残るので、この力は假令低級な状態ではあつたが同じく有機的で而もこの覆面の以前に夙に存在して居つたのである。以前の狀態から此の狀態に變遷し得たことが可能であつたならばこの暴露に於て又新たな變遷が可能である。媒介としては之を而して實に多く不完全なものを齎した神が盡すことであらう。

而して常に同一の自然は創造の總べての力が働く所の媒介に就いて夙に吾人に暗示を與へず居らねばならなかつたであらうか。吾人が生活の萌芽を認める生成の最も低い深淵に於て吾人は研究されない而も效力ある要素を認めるであらう、此の要素を吾人は光線とかエーテルとか體温とか云ふ不完全な名稱で呼ぶので、而して是は多分之に依つて總べてのものを活動せしめ總べてのものを温める造物主の知覺機關であらう。此の天の火の流は幾千の幾百萬の機關に注がれて常

に益々精巧に淨化されるのである。思ふに其の媒介に由つて地球上のすべての力は働くのであらう。而して地上の創造の奇蹟は生殖は之と分離し難いのである。思ふに吾人の身體の構造が眞直になつて居るのは吾人自身が吾人の粗野な機關に於てこの電流を多く吾人に取り入れ多く吾人に於て利用し得るが爲であらう。而してより精巧な力に於ては實に粗野の電氣の物質ではなくて吾人の組織そのものによつて加工され無限に精巧ではあるが而もなほ之に類似したものが身體並びに精神の感覺の器官である。或は私の心靈の作用は地球上に何等の類似せるものがないのである、果して然らば如何に心靈が身體に働くかをも將た又如何に他の事物が心靈に働き得るかを了解されないのである。或はすべての生物に貫流して居つて自然のすべての力を統合するものはこの目に見えぬ天來の火と光との精神である。人間の組織に於てこの精神は地球上の組織の許し得る精巧を贏ち得たのである。之を媒介として精神はその機關に於て殆ど全能力を以て働きその内面に於て活躍せる意識を以て自ら反射したのである、之を媒介として心靈は高尚な體温を以て充たされ而して自由な自決によつて云はば身體から實に世界から獨立して自己を導くことを解するのである。故に精神は身體の上に權力を得たのである。而してその末期となるならば、その外部の機關が解體するならば、永久に働いて止まぬ深淵な天則に従つて、その種類の生長し之と密

接に關聯して居るものを引き寄せることよりも自然的のことが何があるか。精神はその媒介に移り行き之は又精神を引き寄せるのである。或は寧ろすべての生物の精神にして慈母たる遍在の創造的神力が吾人を引き寄せて指導するのである。吾人を吾人の新たな本分へと靜かに指導し教化するのである。

而してかくの如くにして道德學者が吾人の不滅を排斥し得たと考へて居る結論の無價値は明白となつたと私には思はれる。吾人は吾人の心靈を純粹の精神として知らぬとも差支へない、吾人は又之をかけるものとして知らんことを望んでは居らぬ。心靈は單に有機力としてのみ働いても差支へない、又他の方法では働くことは出来ないのである、實に私はなほ附言するがこの状態に於て始めて人間の腦を以て考へ人間の神經を以て感覺することを知り且つ自己の理性と人道とを訓練したのである。最後に心靈は本來物質・刺激・運動・生活のすべての力と一つであつて唯高等な段階に於てのみ發達した精巧な組織に於て働くのでも差支へない、然らば又運動と刺激との唯一の力のみが亡びるのを見たのであるか。而してこれらの低級な力はその機關と同一であるか。扱その無数の量は私の身體に於て機關を具へ何れもその組織を示して居る、私の精神はその上に在つてその藝術品の工作場を示し神經にはその紐を示しかつてすべての力を指導する。然ら

ば自然の大關係に於て之を實行する媒介が缺如するであらうか。而して精神は又この有機的家屋に於て又驚くべくも明白に高尚な教化に達せしめるが爲にかくなしてはならぬのか。

三 力と形式とのすべての關係は退歩でも

停滯でもなくして進歩である

事柄は當然明白に見える、自然の生活力が優勢な對抗力の之を制限し撃退することのないのに如何して停滯し又は退歩し得るかは了解されぬことである。生活力は神の偉力の機關として永續すべき創造計劃の活動して居る思想として働くのである、而してかくの如くにして働きつつその力は増加されねばならぬのである。又すべての錯誤は之を復び正しい途に向はしめねばならぬであらう、蓋し至善の神は跳ね反つた彈丸をもその落下する前に新たな刺激により新たな発見によつて再次的に向はしむべき十分な手段を具へて居るのである。併し純正哲學は之を不問に附して吾人は自然界の類似を観察しようと思ふ。

自然に於ては何物も停滯して居るものはない、すべて死するか進歩するのである。吾人が創造の初期を如何に一の自然界の上に建設されたかを洞察することが出来たならば各々の發展に於て

如何に進歩し行く力の級數が示されることであらう。何故に吾人とすべての動物とは吾人の骨に石灰を含んで居るのか。是は石灰が粗末な地球の組織の最後の變化であつたからその内部の構造上既に生命ある組織の爲に骨格の用に供せられ得たのである。吾人の身體の爾他のすべての要素も亦かくの如くである。

創造の門戸が閉された時に一度選まれたる組織は既定の往來並びに門戸として存在して居つたので、低級な力は將來自然の限界内に於てその上に傳播され且つ更に教化されねばならぬのである。新しい形體は最早創造せられなくなつた、併し同一低級の力によつて且つ變化したので、所謂組織なるものは本來單に高等な教化へと之を指導するものに外ならぬのである。

現れ出でて太陽の光線の下に地下の世界の女王として振舞つた最初の生物は植物である。その要素は何であるか。鹽、油、鐵、硫黃その他精巧な力を以て地下の世界が之に淨化して供給し得るものである。如何にしてこれらのものが植物の各部に達したか。内部の有機力に由つたので之に依つて植物は原素の助を借りて之を自己のものにせんと努力したのである。植物は之を引き寄せてその實體のうちに消化し而して更に之を淨化したのである。故に毒草も藥草も粗野な機關を精巧なものに指導するものに外ならぬので、植物の全體の藝術作業は低級なものを高級なものへ

のと向上して形成することである。

植物の上に動物があつてその液汁を吸飲して居る。一疋の象は百萬の雜草の墳墓である。併し象は生命あり働いて居る墳墓で之を動物化して自分の機關と爲すのである。低級な力は生命の精巧な形式に變化するのである。すべて肉食獸類に於てもかくの如くである。自然は恰も殊に緩慢な死亡を恐れて居るかの如くに變化を迅速にしたのである。故に自然は高等な生物に於ては變形の道程を短縮して速進したのである。すべての動物のうちで最も精巧な機關を具へた生物即ち人間は最大な虐殺者である。人間は生命ある組織の自分よりは餘りに低級でない殆どすべてのものを自分の體質に變化することが出来るのである。

何故に造物主はその生物の世界に於て外觀上この破壊的の制度を選んだのか。敵對せる力があつて相別れて働き一の種属の餌食と爲したのであるか。或は又造物主が無力であつてその小供を他の方法で維持するの途を知らなかつたのであるか。外部の被覆を取り除くなれば宇宙には死滅はない。各々の破壊はより高い生命への變化である。而して聰明な父はこの變化を種属の維持とその被覆を喜んで出来得る限り之を完成せんとする生物の享樂とが唯許す程度に於て早く速に種々に變化を行ふのである。澤山の暴死によつて緩慢な死滅に先んじ、開花力の芽胞を促進して、よ

り高等な機關となすのである。一生物の生長とは多くの有機力を其の體質に結合せんとする生物の不斷の努力に外ならないではないか。その生命の長さはかくして定められるので、この仕事が最早出来なくなれば衰微して死亡せねばならぬ。自然は健全な同化、活潑な加工の目的にもはや堪能でない機關を解雇するのである。

自然の下婢となつて倉皇として吾人の組織の種々の勞働力に援助を與へる醫師の術は焉くに存するか。失はれた力を補充し、疲れた力を強壯にし、過大な力を且つ弱め且つ拘束するのである。何によつてするのか低い世界にある斯かる力又は反抗せる力を採用し同化することによつて行ふのである。

すべての生物の生殖も亦吾人に別事を語らぬのである。蓋しその秘密は如何に深くとも生物に於ける有機力が最大の活動を開始して今や新組織の爲に努力することは明白である。各々の有機體は低級な力を同化する能力を具へて居るから、即ち又之に依つて強壯にされて生命の精華を開き内に働くすべての力を以て自分の模寫を自分の代りに世間に送る能力を具へて居るのである。

發達の段階は斯くの如く低級な自然界を通じて行はれて居るのである。然るに之が最も高尚な最も有力なものに於て停滯し若しくは退歩せねばならぬのであらうか。動物が其の食物として要

する所のものは唯植物性の力のみで之を以て其の植物性の機關に元氣を添へるのである。筋肉と神経との液汁は最早何等地上の生物の食料とはならぬ。血液と雖も單に肉食獸に興奮劑となるのみである。而して熱情により又は窮乏によつて肉食をせざる民族に於ては又残酷にも肉食を取ることに決した動物の好惡を認めるのである。故に思想と刺戟と得ざるには世界は其の體質が又之を要求するが如く茲に目に見える進歩も變化もない、而して民族の教化もない、而し民族の政化はなほ其の血液に於て生活する動物を食物として欲望せぬことを人情の第一の法則と定めたのである。すべてこれらの力は明かに精神的種類に屬するのである。故に多分神経の液汁を感覺の觸れ得べき媒介と爲す多くの臆説が説かれ得たのであらう。神経の液汁なるものが若し存在せりとせば神経と腦とを健全に保つので随つて之なくば唯役に立たぬ細引と容器とであつたであらう。故にその效用は肉體的である、而して精神の作用はその感覺と力とに従ひ如何なる機關を又用ひ得るとも到る處に於て精神的である。

而して人間の總べての官能から逸し去つたこの精神力は今や焉くに歸るのか。自然は賢明にも茲に幕を垂れて之に對し何等の官能を有せぬ吾人をして變化推移の精神界を洞察せしめぬのである。多分之が視察は又吾人の地球上に於ける存在と吾人がなほ從へられて居るすべての官能の感

覺と相容れざるものがあるのであらう。故に自然は唯低級の世界から變化と而して高級の世界に於ては唯高上した形式とのみを吾人に示すのである。無數の目に見えぬ變化の方法は自然は之を留保して居る。而して人間の眼の達せぬ未生のものの世界、大森林又は地獄もさうである。勿論この衰亡に對立して一定の形式が存して居るやうで各々生物は忠實にこの形式を守り最微の骨に至るまでも變化せぬのである。併し是に就いても又理由は明瞭である、蓋し何れの生物も唯その種屬の生物によつてのみ組織されることが出来又される筈である。故に秩序を保つて居る確とした慈母は一の有機力が支配して居るもので服役して居るものでも目撃される效力を示すべき方法を正確に定めたので、その一度定めた形式から何物も逸し去ることは出来ぬ。例へば人間世界に於ては好惡と才能の最大の複雑多様を認めるので吾人は數々不思議で且つ自然に反したることとして驚くのであるが而も了解することは出来ぬ。扱是も亦有機的理由なくしてはあり得ないことであるから、若し吾人に創造の場所のこの幽冥に就いて若干の臆説が許されるならば、人類を低級な有機力の大湊合點と認め之に於て人道が教化さるべきものとして置かう。

併し將來は如何であるか。人間は茲に神の姿を示し地球が之に與へ得べき最も精巧な組織を具へて居る人間は退歩して再び木となり草となり象とならねばならぬか。若しくは人間の側には宇

宙の車が儼存して居つて之によるべき他の車はないのか。至善至理の世界に於てはすべてのものが關聯して居り而して力は力に永久の關係に於て働くのであるから之は考へられぬのである。扱吾人若し過去を顧みて如何に吾人の後方に於てすべてが成熟して人間の組織になつたやうであり、且つ人間に於ては又人間のかくあらねばならぬもの之が爲に故ら組成されたものから唯最初の萌芽と設計とが認められることを見るならば、自然のすべての關係すべての目的は空想であらねばならぬ。然らずんば又如何なる方法・道程を取り得るにもせよ、更に進み行くのである。人性の全體能力が之に就いて何を示すかを見よう。

四 人間組織の世界は精神力の體系である

有機力の不滅に對して常に懷抱し來つた、最も主要な疑惑は、有機力が之を媒介として働く器官に由來して居るのである。而して實にこの疑惑の説明が吾人に永久の進歩の希望のみならず保證の最大の光明を點ずることを私は敢へて主張し得るのである。如何なる花もその構造の外部の塵埃では粗野な要素では咲かない、常に新たに生長する動物も之に由つて複製されない。而して吾人の心靈のやうに多くの之と關聯した力を具へてゐる深刻な力は腦が之に分析されるやうな要

素によつて考へることは出來ない。生理學でも之を吾人に證明するのである。眼中に畫かれる外部の畫像が吾人の腦に入るのではない。吾人の耳を劈く音響が機械的にその儘に吾人の精神に入るのではない。如何なる神経も結合の一點まで顫動するやうに造られては居らない、若干の動物に於ては兩眼の神経は一度に働かない、而して如何なる生物に於てもすべての官能の神経は見得べき一點が之と結合するやうに湊合しない。更に全身の神経に就いても之が行はれないのであるが、而もその最微の肢體に於ても精神は存在するが如くに感じ且つ之に於て働くのである。故に腦を自ら考へるもの神経の液汁を自ら感ずるものとして考へるやうな非生理的な弱い思想が起るのである。寧ろすべての經驗に従へば固有な心理上の法則があつて之に従つて心靈はその仕事を企てその概念を聯絡するのである。この法則は常に機關に順應し之と調和して行はれること、器官が何の役にも立たぬ時は藝術家も亦何事をも爲し得ぬこと等に就いては毫も疑惑の餘地はない、併しこの事柄の概念に於ては何物をも變化せぬのである。心靈が働くその方法その概念の性質が茲に考察されるのである。而して之に就いては

(一) 思想は實に心靈が之を以て外物を考へる最初の認識は、官能が心靈に齎すものとは、全然異なつた物であることは否定し難いことである。吾人は之を畫像と呼ぶのであるが併しそれは眼

の上に畫かれて腦に全然達しない、心靈の畫像は官能に刺戟されて自ら造られた精神的な實體である。心靈は圍繞して居る混沌たる事物のうちから一の形體を呼び起して之に注意を加へかくして内部の力によつて多數のうちから心靈にのみ屬する一物を創造するのである。心靈はもはやその存在せざる後に於ても之を再現することが出来る、夢想と創作とは全然異なる法則に従つて恰もこれが官能に示されるやうに之を聯絡することが出来、而して實際かく爲すのである。病人の狂亂は數々、心靈の物質性の證據として擧げられるが實にその非物質性の證據である。試みに狂人の動作を窺つてその心靈の取れる進行を注意せよ、狂人は自分を深く感動せしめた随つて器管を傷害した而して他の感覺との關係を擾亂した思想から出發するのである。扱て狂人はすべてをこの思想に關係しめるが、是は最も支配力ある思想で是を脱却することが出来ぬからである。狂人は是を基礎として自己の世界を思想の自己の關係を創造するので、而して思想聯絡上のその迷路は何れも最高の程度に於て精神的である。腦の區分の實際の儘でなく狂人は曾て自分に感覺が起つたその事は忘れて、他の思想が自分の思想と關聯して居る如く又彼と是とを飛離れて直ちに聯絡せしめ得るが如く聯絡するのである。吾人の思想のすべての聯想は同一の方法で行はれる。即ち思想の歸屬して居る實體は自己の精力から又は數々驚くべき個人的好惡から經驗を喚び

起して外部の機械に依らず内部の愛情好惡に従つて觀念を聯絡するのである。私はこの點に於て正しい人物がその心情の覺悟を、而して鋭敏な觀察者殊に醫師がその病人に就いて注意した特性を公にされんことを希望するのである、而して私はそれが實に有機的ではあるが而も固有の力を具へ、精神聯絡の法則に従つて働く實體の働きの著名な實例であらうと確信して居るのである。

(二)小兒時代から吾人の思想の技巧的に教化されたことも心靈が緩慢に發達して後れて自己を意識せるのみか努力して官能を用ゐることを學んだことも同じく之を證明するのである。幾多の心理學者は小兒が色彩や形狀や大小や遠近の概念を得て之に由つて見ることを學ぶその技巧を觀察した。肉體的官能は何物をも學ばない、蓋し畫像は生活の最後の日に眼に畫かれるやうに最初の日にも畫かれるのであるが、併し心靈は官能によつて測定し比較し精神的に感覺することを學ぶのである。之には耳が心靈を助けるので而して言語は實に確かに思想構成の精神的手段であつて肉體的手段ではない。唯無神經者流のみが音響と言語とを一様に考へ得るのである。而してこの二者が異なるやうに身體と精神と又機關と力とは異なつて居るのである。言語は觀念を回想せしめ而して之を他の精神から吾人へと傳へるのである。併し言語が觀念その物ではない而して又

有形的機關が思想ではない。身體が食物によつて増大するやうに吾人の精神は觀念によつて増大する、實に吾人は精神に於て又同化生長並びに生産の法則を認めるのであるが唯肉體的方法ではなく、精神に固有な方法によるのである。精神も亦之を消化して自分のものとし變化せしめ得ぬ程食物を詰め込むことが出来る。又精神にもその力の均齊の状態があつてそれが保てなくなると病氣になる、虚弱になるものもあり又狂氣になるものもある。最後に精神は又内面的生活のこの仕事を天才の力を以て營むので、愛情も異なるものに對する反感も性質の同じものへの同情もその力に於て現世の生活に於けるが如く現れるのである。要するに吾人に於ては有頂天になつて云ふのではないが内面的な精神的な人間が形成されるので、是はその固有の本性で身體を單に道具として用ゐ、實にその固有の本性に従ひ機關の最も不良な紊亂に際しても働くのである。心靈が病氣により又は熱情の烈しい状態によつて身體から分離され云はば強制されて固有の思想界に彷徨すればする程、吾人は思想創造又は思想聯絡に於て心靈固有の威力並びに精力に就き益々驚くべき現象を認めるのである。心靈は今や失望からその以前の生活の舞臺に戻つて徘徊し而してその本性と思想形成のその仕事を止めることが出来ないの今や新たな粗末な創造に耽るのである。

(三)より明晰な意識、人間心靈のこの大きな長所は精神上の賢人に於ては同一である、而して

實に人道に依つて徐々に初めて形成されるのである。小兒はなほ意識がないが併しその心靈は實に絶えず意識に達し且つすべての官能に由つて自ら確めようと努めて居るのである。概念を得んとそのすべての努力は神の世界に於ては云はば回想し而して人間の精力を以てその存在に就いて歡喜せんことを目的として居るのである。動物はなほ暗黒な夢想に於て彷徨して居る。その意識は身體の澤山の刺戟に普及され之に依つて有力に覆はれて居るので、その組織の繼續的思想練習へと判然と覺醒するのは可能でなかつた。人間も亦その官能の状態は唯官能に由つてのみ知るのである。故に官能が傷けられるや人間の有力な觀念が又固有の承認から奪ひ去られ得べくかくて自ら或は悲惨な或は喜樂な芝居を演ずることは全然不思議でない。併し活潑な思想の領域に於てかく奪ひ去ることは又内部の精力を示すので之に於て意識の力自己決定の力が數々最も間違つた途に於て表されるのである。人間に於ては何物も認識ほど存在の自己の感情を保證するものはない。眞理の認識は吾人が自ら獲得したもので吾人の最も内面的な本性で而してすべて目撃されたものは數々之に没却するのである。人間は若し高尚な思想に喚起されて之に追隨するならば自己を忘れ時代と官能の力の尺度とを失ふのである。身體の最も恐しい苦惱もその當時心靈に於て勢力を振へる若干の活動的思想によつて壓抑することが出来たのである。人間も或る熱情によつ

て殊にすべてのうちで最も活潑で最も純潔な熱情即ち神に對する愛情に因つて動かされた時は生死を眼中に置かずすべての思想のこの地獄に於て天に在るが如く感ずるのである。最も平凡な仕事も若し身體のみで之に當るならば難事業となるであらう。併し愛情は至難の事業を容易ならしめるのである、最も退屈な最も縁遠い努力にも羽翼を與へるのである。空想と時雨とは愛情に對して消滅し愛情は常にその點に於てその固有の理想國に於て在るのである。精神のこの本性は最も野蠻な民族に於ても亦現れて居る。何の爲に戦ふにせよそれだけ思想に驅られて戦ふのである。復讐と膽勇とを渴望せる食人者も亦恐しい遣り方ではあるが精神の享樂に向つて努力して居るのである。

(四)故に機關のすべての状態・疾病並びに特性は働く力を單純に感ずることに於ては決して吾人を迷はすことは出来ぬであらう。例へば記憶は人間の異なる組織に従つて異なつて居る。甲に於ては畫像によつて形成され且つ保存される。乙に於ては抽象的な記號により言葉により又は全く數字によるのである。青年の時代には腦が柔いので活潑である。老年には腦が硬化するので記憶が緩慢になり舊思想を固執するのである。爾他の精神の力も亦かくの如くである。力が有機的に働くや否やすべて之と異なることは出来ぬのである。而も亦茲に思想の保存革新の法則を注

意して見よう、何れも皆肉體上の法則ではなく精神上の法則である、或る年の記憶を實に談話の或る部分の記憶を名稱を名詞を而も或る文字を目印を忘れた人があつた。前年の記憶・談話の他の部分の回想に並びに談話の自由の使用には故障はない、機關に損傷が出来て心靈に唯一部分に於て束縛を受けたのであつた。その精神上的の思想の關係が物質的であつたならばこの現象の場合に於ては或るは思想は腦に移つて或る年に對し名詞・名稱に對して自己の記録を存して居らねばならぬ、然らずして思想が腦と共に硬化したならばすべてが硬化されねばならぬ、而も老年に於ても實に青年時代の記憶はなほかくの如く活潑である。思想がその機關に應じて最早敏活に聯絡出来ず又急速に熟考出来なくなつた時代に於ては美はしかつた時代に得たものを益々、確守するので之に對しては自分の財産のやうに處分することが出来るのである。臨終に際して、又は思想が身體の拘束を感ずることの少いすべての状態に於てはこの青年の歡樂の記憶は、あらゆる活氣を以て増進するのである。而して老人の幸福、瀕死のもの喜びは大部分之に存するのである。吾人の心靈は生活の初から唯一事業に従事したやうに思はれる、即ち人道の内面の形狀形式を獲得して身體がその形狀形式に於けるやうに之に於て健全に歎喜して感ずることである。心靈は絶えず且つすべての力の同情を以てこの事業に於て働いたので、身體は常にその健全の爲に盡すことが出

來若し一部が傷つけられれば直ちに全體に感じ爲し得る限り裂傷を補綴し負傷を醫治する爲に分泌液を用ゐるのである。之と同じく心靈も或は善き手段により或は如何はしき手段により常に衰弱し數々病態となる健康に對し自ら平靜を保ち且つその働を續けるのである。之に用ゐる技巧には驚異すべきものがあつて其の能く調達し得る應急手段、救濟手段の貯藏は無盡藏である。他年一日心靈の症狀學が身體の症狀學のやうに研究されたならば精神のすべての病氣に於て固有の精神的性質が認められ唯物論者の結論は太陽の前の霧の如く消滅するであらう。實に此の自己の内面生活に就いて確信を有するものには身體がすべての物質の如く絶えず變化して行くすべての外部の状態は歲月と共にその本質に關係のない單なる變化となるであらう。夜から晝に進み幼年から青年に進み行くやうに知らず識らずの間にこの世界からその世界に進むのである。

毎日造物主は吾人の機關に於けるすべては吾人から又相互から分別し難いものでないと云ふ特殊の經驗を與へて居る。是は死の幼弟である慰安的な眠である。眠は優しい指を觸れて吾人の生活の最も重大な作業を別つたのである。神經と筋肉とは休息し官能の感覺は停止する、而も心靈は固有の領域に於て考を續けて居るのである。心靈は覺醒して居つた時には身體から分別されて居らぬ、夢裡に於ても數々混同された感覺が之を證明するのである。而も心靈は熟睡する時なほ

自己の法則に従つて働きを續けるので其の夢に就いては突然の覺醒によつて之を知るに非ざれば何等の記憶もないのである。多くの人は其の心靈が安らかな夢に於て覺醒して居る時の状態と區別された同一の思想の序列を飽くまで辿り行き而して常に多くは青年時代の一の活潑で美しい世界を彷徨して居ることを氣附いたのである。夢中の感覺は旺盛なるもので其の情緒は赤熱し思想と機會との聯絡は容易となり吾人の視界は晴朗となり吾人を照す光線は美しいのである。吾人が健全に眠るならば吾人の歩行は數々飛行となり吾人の形體は雄大となり吾人の決心は斷乎となり吾人の活動は自由となるのである。而して精神の力の身體と親密に合體して働く限り、吾人の精神の極めて些細な状態も必ずや之と調和してあらねばならぬので以上のことも總べて身體に依つて左右されるのであるが、而も眠と夢との確かな驚くべき全體の經驗は、吾人が之に慣れて居らねば吾人に多大の驚愕を起さしめる程のもので、吾人の身體の各部は同一様に吾人に屬して居らぬことを示すのである、實に吾人の機械の或機關は疲れ果てて仕舞ふと云ふことがあり得ること、又至高の力は理想的な活潑な自由な力の單純の回想から働くことを示すのである。扱吾人を眠らしめるすべての身體の上の徴候とは單に譬喩に於てのみならず生理上又實際上死の類似であるとしたならば、何故にそれが又精神上の特徴とすることが出来ぬのであらうか。而して病氣又

は疲勞から昏睡に入つた時、之も亦眠のやうに唯生活の熱を冷し、餘りに一樣に永く繼續された運動を靜かに變更し、この生活に取つて治し難い多くの負傷を癒し而して心靈を歡喜すべき生長に新たな青年の晨の享樂に準備するやうにとの希望が吾人に存するのである。夢に於て私の思想が青年時代に歸るやうに、私が夢に於て若干の機關から唯半ば解放されて併し私自身に推し戻されて自由に且つ活潑に感ずるやうに、元氣恢復する程の昏睡の夢は私の青年時代を私の存在の最も美しく最も力ある瞬間を私に媚びて回想せしめるので、遂に私はその畫像に於て若しくは寧ろ天來の青年の美しい畫像に於て覺醒するのである。

五 吾人の人道は單に豫習である、將來の

花の蕾である

是に由つて之を觀るに吾人の今日の存在の目的は人道の教化に向つて居るので、地球上のすべての低級な需要は唯之が爲に盡すので之に歸著せねばならぬのである。吾人の理性能力は理性に、吾人の精巧な官能は藝術に、吾人の本能は眞の自由と美とに、吾人の運動力は博愛心に教化されねばならぬのである。或は吾人はその本分に就いて何物をも解して居らぬならば而して神は

内外に於けるすべての計劃を以て吾人を欺いて居り之が誹謗も曾て又意味のないことであらう。然らずんば吾人の存在とに對するが如くこの目的に就いて確實であるであらう。

而してこの永久のこの無限の目的が茲に如何に稀に達せられることぞ。全民族に於て理性は獸性の下に拘束され、眞理は最も間違つた途に於て搜索され、而して神が吾人を之が爲に造つた美と正とは懈怠と惡意とに依つて傷はれたのである。言葉の純潔な廣汎な範圍に於て神の如き人道が生活の本來の段階となつたのは少數の人に於てのみである。多數の人は辛く晩年に至つて之に就いて考へ始めたので而して優良な場合に於ても亦低級な本能が高尙な人を獸類に引き下げたのである。無常な人間のうちに於て誰が能く自分に存して居る人性の眞の畫像に達して居り又は達したと云ふことが出来よう。

故に或は造物主は吾人に與へた目的と之を達せしめるが爲に巧妙に糾合した組織とに就いて間違つたであらう。然らずばこの目的は吾人の存在を超越したもので而して地球は單に練習場であり豫習地である。地球の上には勿論なほ多くの低級なものが至高のものの下に置かれねばならぬので、而して人類は大體に於て動物の上に唯小さな一段階のみ高められたのである。實に人間自身の間にも亦最大の相違が存して居らねばならぬ。蓋し地球上の萬物は多様であつて而して

多くの地方に於て状態に於て吾人人類は深く風土と窮乏との桎梏の下に置かれてゐるのである。故に造物主たる神の計劃はすべてのこの段階とを一瞥の下に包容することが出来ねばならず、而して低級な力を徐々に意識に上せずして高上せしめた如くに人間を是等すべてに於て更に進めて行くことを知らねばならぬのである。すべて地球上の生物のうちで人類がその本分の目標から最も遠ざかつて居ると云ふことは不思議な言分であるが併し否定し難いことである。何れの動物もその組織に於て達せらるべきものに達して居る、惟り人間が之に達せぬのは實に其の目標がかくまで高く遠く無限であつて而して地球上に於てかくまで低く晩く内外共に多くの妨礙を以て始めだからである。動物には自然の慈母的賜物たる本能が安全な指導者である、動物はなほ奴隸として至高の父の家にあるので服従して居らねばならぬ。人間は既に小兒として父の家にあるので若干の焦眉の本能を除いては理性と人道とに屬するすべてのものを先づ學ばねばならぬ。然るに之を學ぶに方つて不完全であるが之は理智と道徳との萌芽と共に又僻見と惡習とを遺傳し而して真理と精神の自由へと進み行くに方り、人類の當初から存して居る鎖に依つて苦しめられて居るからである。神の如き人間が自分の前に左右に印する足跡は多くの他の足跡を以て混亂され蹂躪されるが、之は即ち動物や盜賊の彷徨した足跡で而して遺憾なことにはその少數の選抜された偉人

善人よりは數々有力であつたのである。故に多くの人の父爲せるが如く神に向つて人間を動物にかくまで近く接近せしめ而も動物となつてはならぬので人間に光明と鞏固と安定とに於て本能の爲にせずして理性の爲に盡し得る程のものを拒んだことを訴へねばならぬであらう。然らずんばこの貧弱な發端は實にその無限の進歩の證據である。人間は即ち自己の練習に由つてこの光明と安定との程度を獲得せねばならぬので、かくて父の指導の下に自己の努力によつて高尚な自由人となるのである、而して人間はかく發達するであらう。人間に似たものも亦人間になるであらう。寒冷によつて麻痺し太陽の灼熱によつて乾燥した人道の蕾も開いて亦その眞の形狀を示し本來の完全な美花となるであらう。

而して吾人は容易に又吾人人類から惟り如何なる世界に移り行くことが出来るかを想像し得るのである。是は實にこの神に似た人道である、眞の人類の形態の鎖された蕾である。この地球の總べての缺乏は唯是が爲に生ずるのである。吾人は骨格の石灰を岩石に遺し各原素にその所屬のものを戻すのである。吾人が動物の如く現世の生活に用ゐるすべての官能的衝動はその仕事を完成したのである。人間に於ては高尚な思想、努力、促進の機會とならねばならなかつたのでかくて其の事業は完了したのである。食物の缺乏は人間を勞働へと社會へと法律制度に對する服従へと

覺醒せねばならぬ、而して地球に缺くべからざる健康に有益な羈絆の下に人間を束縛せねばならぬ。性慾は怪物の苛烈な胸に於ても亦社交とか父の夫婦の子供の愛を移植し、而して一族の爲の困難な退屈するやうな努力も面白くせねばならぬ、蓋し是は實に一家の爲に血肉の爲に引受けられるのである。自然は地球のすべての缺乏に於てかかる目的を懷抱して居るのである。その何れもは人道の芽の吹き出だす慈母の總苞であらねばならぬ。人道にして出芽せば幸福である。美しい太陽の光線の下に花咲くであらう。眞美愛の三者は人間がその各々の努力に於て、又自身も意識せず數々間違つた途に由つて之に向はんとして居る目標であつた。迷路は正されるであらう、邪路に導いて居る怪物は消滅するであらう、而して各自は遠かれ近かれその途の達せんとする中心點を見るのみならず、なほ又慈母の如き神は又天才又は必要な友人の姿に於て寛大な優しい手を以て之へと案内するであらう。

故に又親切な造物主は吾人にその世界の狀態を秘密にしたので爲に吾人の軟弱な腦は眩暈を起し又間違つた偏愛を懐かしめることもないのである。而も吾人にして若し吾人の間に於て種屬に就いて自然の經路を觀察し而して如何に造物主が一步づつ高尚ならぬものを排斥して缺乏を緩和するか、又之に反して如何に精神的のものを作り精巧のものを更に精巧に導き美なるものを更に

美しく生氣あらしめるかを注意するならば、吾人は確かに其の目に見えぬ藝術家の手に信頼してその存在に於ける吾人の人道の蕾の開花は、又確かに本來眞の神の如き人面の形狀であつて如何なる地球上の思想もその莊麗と優美とを想像出來ぬ形狀に於て行はるべきことを考へ得るのである。故に又吾人の想像するのも無益である。而して創造のすべての事情は最も正確に相關聯して居るのであるから吾人の精神の有機力も亦その最も精神的な練習その物に於て將來の現象の基礎を置いて居り、然らざるも少くも自らは知らずして美しい太陽の光線がその最も深いその自ら茲に潜んで居る力を覺醒するまで永く精神の被服に用ゐられる織物を織つて居ることを私が實に確信するにせよ、世界創造の法則の作用のなほ僅か計り吾人に知られて居るに過ぎぬのに、造物主に就いて之を豫定するは實に大膽であらう。吾人が低級な自然界に於て注意するすべての變化が完成であつて而して吾人がより高等な原因の爲に何處に對して見ることが出來ないかに就いて少くも暗示を得た丈で十分である。花は吾人の眼には種子の小さな萌芽として次に芽胞として見えるのである。芽胞が蕾となり而して今や初めて花の生長が起るので、地球のこの經濟に於てその年齢が之を始めるのである。多くの生物に於て相類似した作業と變化とが行はれるがそのうちで胡蝶が有名な象徴となつたのである。見よ厭ふべき粗野な食慾に驅られて居る螟蛉が這つて居る、

その寿命は終りて死の倦怠に襲はれる。足を押し著け體を巻き込み、死出の裝束として又一部分は新生活の機關として身の廻りに織り物を織り出すのである。今や關節は働くのである、今や内部の有機力は努力するのである。徐々に先づ變化が行はれ破壊が現れるのである。十本の足は擺脱された皮に止まり而して新生物はなほ肢體の形が整はぬのである。徐々にこれが形成されて秩序が整つて来るが併し生物はそこに完全になる前には目が覺めぬのである。今や光線に浴せんとして進み出でかくて忽ちにして最後の完成となるのである。數分にして軟弱な羽翼は實になほ死の裝束の下にあつた時よりは五倍も大きくなり、彈力を具へこの太陽の下に初めて現れる光線のすべての壯觀を授けられ、數多くして大きく、微風の戦くが如くに生物を運ぶのである。その全體の構造は變化された、曩には粗末な葉を以て養はれたのであるが、今や花の黄金の如き夢の神酒を吸ふのである。その本分も變化された、粗野な食欲の代りにより微妙の本能即ち愛の爲に奉仕するのである。誰か能く螟蛉の形狀に於て將來の胡蝶を想像するものぞ、若し經驗の之を吾人に示さなくば誰か能く二者に於て同一の生物を認めるものぞ。而も二つの生活は單に同一地球上に於ける同一生物の年齢の差に過ぎぬので、組織上の環は同じやうに又開始されるのである。組織上の環が更に遠きに及び其の發達の年齢が一つの世界以上に互る場合に於て、如何に美しい發

達か自然の膝に息はねばならぬことであらうぞ。故に人類に希望を懐け而して豫言する勿れ。代價は提供されて居る、之が爲に奮闘せよ。人間らしからぬことを排斥せよ、眞と善と而して神に似たる美とに向つて努力せよ。かくせば目標を逸することはあり得ぬのである。

而して自然は又發達する即ち變化する生物のこの類推に於て、何故に生物界に死に等しき昏睡を織り込んだかを吾人に示すのである。是即ち一生物を保護するところの親切な昏睡であつてその間に於て今や有機力は新發達に向つて努力するのである。生物自身はその多少の意識を具へて居つてはこの奮闘を看過し又は統御するほどに十分強くないのである。故に假睡して、發達し盡した時に於て初めて覺醒するのである。故に昏睡は又父の親切な慈悲である。是は健康に益ある鴉片でその作用の下に自然は全力を擧げて昏睡して居る病人を全治するのである。

六 人間の今の状態は多分兩世界の連鎖であらう

自然に於ては萬物皆相關聯して居る。一の状態は他の状態へと努力して而し之を準備するのである。故に地球組織の鎖の最高で最後の鎖となつて之を結んで居るが、又實に之に依つて生物の、

より高尚な種属の鎖の最低の環となつて之を始めて居るのかも知れない、而して人間は多分相交渉して居る生物の兩體系の間に介在せる真中の環であらう。地球上に於ては人間は最早如何なる組織にも變化することは出来ない、然らば退歩して而して圓周を彷徨して居らねばならぬ。如何なる生活力も最も活動的な至善の世界に於ては休息するものがないから人間は停止して居ることとは出来ない。故に人間の前面には一の段階が存在して居らねばならぬ、之は人間に接近しては居るが而も人間の上に高められて居るので恰も人間が最も高尚な特權に飾られて動物に接近して居るが如くである。すべての天則に基いて居るこの意見は惟り人間の驚異すべき現象の輪たると共に唯一の人間の歴史の哲學たるのである。蓋し茲に於て初めて

(一)人間の示して居る驚くべき矛盾が説明されるのである。動物としては人間は地球に盡し住地として之に執著して居る。人間としては他の苗圃を求める不死の種子を具へて居る。動物としては需要を満足することが出来る、而して之を以て満足された人間は地球上に於て極めて幸福に暮して居る。併し何等か高尚な素質に従つて努力するや到る處に不完全と間に合せ仕事とを見出すのである。最も高尚なものは地球上に於ては決して成就されぬ、最も純潔なものは成立し且つ永續したことが稀である。吾人の精神と心情との力に取つてはこの舞臺は常に唯練習場試験場に

過ぎない。人類の歴史は計劃あり興亡あり企圖あり革命あつて之を十分に證明して居る折々賢人仁者が現れて時代の潮流に思想・忠告並びに事功を與へ、若干の波浪が旋回したが併し潮流は之を運び去つてその痕跡を剩さない。その高尚な意見の珍寶は水底に歿したのである。愚者が賢人の忠告を顧みずして支配し而して浪費者が老人の蒐集した精神の寶藏を相續するのである。地球上に於ける人間の生活は永久を期待したものでないが常に動いて止まぬ圓い地球も不朽の藝術品の工場、永久の植物の庭園、永久居住の別荘ではない。吾人は去來して居る各瞬間に數千人は地球に現れ而して數千人は去つて行く。地球は巡禮の逆旅である。候鳥の近づき來つて而して急いで去る彗星である。動物は一生を送つて居る、而してより高い目的に順應して年數から云へば生活を送らしたのでなくとも、而もその内面の目的は達されたのである、その技巧は完成したのである、ならねばならぬものになつたのである。惟り人間のみは自己に對し而して地球に對して杆格する所がある。蓋しこのすべての地球上の組織のうちで最も發達した生物は生活に満足してこの世界から彷徨し去つても、同時にその固有の新たな素質に於ては最も發達せぬものである。原因は明かに人間の状態はこの地球に取つては最終であるが同時に他の存在に取りては最初のもので之に對して小兒として最初の練習に於て茲に現れたのである。故に人間は同時に二つの世界を

表現して居るので人間の性質に二重性に見えるのは之が爲である。

(二) 多数のものに就いて地球上に於て何れの部分が主要なものとなるかは直ちに明瞭となる。人間の最大の部分は動物である。人道へは唯世界に於て能力を磨いたのみで、努力と勤勉とを俟つて初めて人間に於て人道が訓練されねばならぬのである。扱て正しい途に於て訓練されること如何に乏しいことぞ。併し最も好都合の場合に於ても人間に植ゑ附けられた神聖な花が如何に繊細に且つ軟弱であることぞ。一生を通じて動物性が人間を支配せんと欲する、而して多数のものは好んで之が支配を受けて居る。故に精神は高上せんと欲し心情は自由なる天地を望んで居るが動物性は不斷に引き下さんとして居る。而して官能的な生物に取つては現在が常に遠距離よりも活氣を示し、目撃される物が目に見えぬものよりも有力に働くので、二つの重みの何れの方に権衡が傾くかは容易に之を判断することが出来る。人間には純潔な認識と美德とに對する能力の如何に乏しいことぞ。而してその能力があつたとしても之に慣れることが如何に乏しいことぞ。この世に於ける最も高尚な聯絡は低級な衝動によつて人生の航路が逆風に遭つたやうに攪亂される、而して慈仁にして厳格な造物主は兩者相互の紛糾を整理し以て他によつて一を制し御而して媚態の西風よりは寧ろ暴風によりて不朽の芽を吾人に於て養成するのである。多く計劃した人は

多く學んで居る、懶惰で無精な人は何が自分に存して居るかを知らない、更に自ら求めて歡喜を以て何が自分に出来るか何の能力があるかを知ることもないのである。故に人生は戦争である、而して純潔に不朽な人道の花は奮闘して得られる冠である。走るものには目標が終極の點に置かれてある。道德の爲に戦ふものは死に於て花環が得られるのである。

(三) 故により高尚な生物が吾人を眺めるならば、恰も吾人が自然界に於て一の種類から他の種類へと變化する中間種屬に對するやうに吾人を觀察することであらう。駝鳥は飛ぶ爲でなく唯走る爲にのみ力なくその羽翼を動かすのである。重い體軀は之を地に引き附けて居る。組織を支配して居る慈母はかくの如く駝鳥その他の中間種屬に對して配慮して居るので、それらはそれ自身に於ては完全であるが唯吾人の眼にのみ不恰好に見えるのである。地球上に於ける人間の性質に就いても亦かくの如くである。その不恰好であることは人間の精神には著しく目立ぬ、併し内面を洞察し且つ相互に關聯して造られた鎖の深山の鑛を既に見た、より高尚な精神は實に吾人を憐み得るのである、併し輕蔑はしまし。此の精神は何故に人間が老若・賢愚さまざまの状態で此の世界を去らねばならぬか、二度小兒になつた白頭翁もあれば又全然胎兒となるもののあるを見るのである。全能慈仁の神は狂者と畸形とを、文化のすべての段階を、人類のすべての失敗を包容

し、而して唯死のみがよくその痛を緩和し得る程の傷をも亦癒す程十分の膏藥を貯藏して居るのである。多分吾人の状態が低級な組織の状態から出来たやうに將來の状態は今日の状態から出芽するであらうから、疑もなくその作用は吾人が考へて居るよりも吾人の現在の存在と密接に關聯して居るのである。より高尚な庭園も唯茲に萌芽し粗末な總苞の下に最初の小さな芽を出した植物によつてのみ花咲くのである。扱上述せるが如くに幸福と友愛と有力な同情とが人類の全體の歴史に互つて人道の向はんとして居る殆ど主要な目的であるとしたならば、人間生活のこの最も美しい花は彼處に於て必ずや地球のすべての聯絡に於て吾人の心情が空しく之に向つて憧憬した清新な形状に俯瞰的な高さに達せねばならぬ。故により高い段階に於ける吾人の同胞は確かに吾人が之を求め之を愛するよりも多く且つより純潔に吾人を愛するのである。蓋し吾人の状態を明確に展望するからである。時代の刹那は過ぎて跡なくすべての不調和は取り除かれかく多分目に見えぬやうに吾人を教化してその幸福の仲間としてその仕事の同僚となすであらう。唯一歩を進めれば壓逼されて居つた精神は自由に呼吸することが出来、傷つけられて居つた心臓は癒されるのである。その歩武の近づけるのを認めて徐に之に向はんとするものを有力に助けて居るのである。

(四)故に又私は吾人が兩階級の中間種屬であつて確かに兩者に關係して居るからと云つて、將來の状態は人間に於ける動物性が喜んで信ぜんと欲するが如くに今日の状態からは遠ざかつて居つて全然之に傳へることの出来ぬものであらねばならぬとは考へることが出来ぬ。寧ろ私には吾人人類の歴史に於て多くの歩武と成功とはより高きものの感化なくしては了解し難きものとなるのである。例へば人間が自身で文化の途上に就きより高き指導なくして言語と最初の學問とを創始したと云ふことは私には説明出来ぬやうに思はれる、而して長い粗野な動物の状態が人間に先つて居つたと假定すれば益々説明し難くなるのである。神の管理は確かに人類の上にその起源から支配を行つて居つたので而して人間に取つて最も容易な方法でその途へと指導して居つたのである。併し人間の力自身が多く練習される程一部分このより高い援助を要することが尠くなるので、然らずば益々練習が出来悪くなるのである。勿論後の時代になつては又最大の作用が説明し得られぬ事情に依つて地球上に起り又はかかる事情に伴生したのである。疾病と雖も數々之が利器であつた、蓋し機關が他のものとの釣合を失つてかくて地球生活の普通の範圍に於て役に立たなくなつたならば内部の不休の力が宇宙の他の方面に轉じ行き、而して多分攪亂されて居らぬ組織の出来なかつた而も又要求しなかつた印象を受けると云ふことは當然であると思はれる。併し

又それは魂に角此の世界とその世界とを隔てて居るものは確かに慈悲心ある薄絹である而して死者の墳墓の附近に於て静寂に沈黙して居るのは原因のないことではない。普通の人間はその生活の行程に於て一個人が思想の全體の範圍を攪亂せしめこの世界に取つて役に立たぬものにされるやうな印象から遠ざけられて居る。如何に模倣の巧みな高等な性質の猿猴でも自由に適するやうに造られた人間となることは出来ない、併し指導されれば又自ら行動して居ると云ふ幸福な妄想を懐くことが出来る。その安心の爲に又その本分に基く高尚な自負心の爲により高尚な生物の姿が遠ざけられるのである。蓋し吾人が之を知つたならば多分自分を輕蔑することになるであらう。故に人間は將來の状態を諦視することは出来ない、唯之を信ずるのみである。

(五)人間の力の何れに於ても無限性が存して居ることだけは確實である、之が唯茲に發展させることの出来ないのは他の力即ち動物の官能並びに衝動に因つて壓逼され而して地球生活の關係に對して云はば拘束されて居るからである。記憶、想像力、實に豫言と豫知との若干の實例は人間の心靈に存する潜在寶庫に關して驚くべきものを發見した、實に官能と雖も之が除外例ではない。最も多く病氣と反對の缺陷とがこの寶庫を示したと云ふことは事柄の性質に於て何物をも變化して居らぬ、蓋しこの不權衡も亦實に一方の分銅に自由を與へてその力を示す爲に必要であつたのである。

たのである。心靈は宇宙の鏡であると云ふライブニッツの言葉は世人が普通之を敷衍しつけて居るよりは多分より深い眞理を含んで居るのであらう、蓋し宇宙の力は又心靈に潜在して居るやうに見えるので而して唯一の組織又は一序列の組織さへあれば之を活動せしめ又練習せしめ得るのである。至善の神は心靈にこの組織を吝まぬであらう、而して之を助けて幼兒の如く歩行に慣れしめ増進する享樂を充實して自ら獲得したりと妄想せる力と官能とを徐々に準備せしめるのである。現在の拘束に於て既にその空間と時間とは空しい言葉である、身體の關係を測定し記述するものの内面の能力に就いては之を能くせぬのである、蓋しこの能力は充溢した内面の歡喜に於て働いて居るので空間と時間とを超越して居るのである。故に君の將來の存在の場處と時間とに就いては君に何等の奮勵を起さしめぬのである。君を照らす太陽は君に君の住宅の地球上の職業とを示さずその間すべての星宿をも暗くして置くのである。太陽の歿するや否や世界はより大きな形狀に於て現れるのである。君が曾て包まれて臥し又曾て包まれて居るであらうと思はれる神聖な夜は陰影を以て君の地球を覆うた、而してその代りとして君に天上に於て堂々たる不死の書物を披くのである。そこに住居と世界と空間とが存するのである。

青年は元氣で輝いて居る

既に千年過ぎ去つたのに。
時の變化も決して奪はぬ
その兩頬に輝く光明をば。
併し茲に吾人の眼前にて
萬物みな衰へ亡び消滅す。
地球の壯麗も地球の幸福も
滅亡の時が之を脅かして居る。

君がなほ存在して居つて而して他の組織で神と神の創造物を樂しむとも地球その物は最早存在せぬであらう。君は地球に於て澤山の幸福を受けた。君は地球に於て天の子として左右を高處を眺めることを解するやうな組織に達したのである。故に満足して去らんと求めよ、而して君が不死の小兒として戯れた郷土として君が苦樂相半して成人に教育された學校として之を祝福せよ。君はもはや地球に對して何等の權利がない、地球も君に對して何等の權利もない。自由の帽子を戴き天の帶を締めて欣然として君の杖を運べ。

故に花が直立して眞直な形狀で地中のなほ生氣のない生物の世界を鎖し太陽の領域に於て最初

の生活を歡喜して居るやうに、人間は地球上に於て屈伏して居るすべてのものの上に又直立して居るのである。眉を張り手を舉げて家の子として父の呼ぶのを俟ちつつ直立して居るのである。

歷史哲學

第二編

第六卷

吾人はこれまで地球を大體人類の住地として考察し次に人間が地球上に於ける生物の序列中に占める場處を認めようと試みた。吾人は大體人間の性質に就いての意見を確定したので、今や人間がこの圓い舞臺の上に示して居る種々の現象を観察しよう。

併し誰がこの迷宮に於て道しるべの絲を吾人に授けるか。如何なる安全な足跡を吾人は辿ることが出来るか。少くも最も尊大な博識家の如何に誤麻化し的美裝も人類の歴史家が更に又歴史哲學者が必ず負うて居る缺點を隠くすことは出来ない。蓋し唯人類の天才のみがその全體の歴史を達観するのである。吾人は民族の組織に於ける相違から著手する、但し是は既に博物學の教科書に於てさへもこの相違を認めるからで他に何等の理由もないのである。

一 北極附近に於ける民族の組織

未だ一人の航海者も能く我が地球の軸に立つことの出来たものはない、而して多分北極から地球の全體の構造に就いて若干の詳細な説明を得ることが出来るであらう。而も吾人は既に遠く住

居し得られる地球の彼方まで達したので而して自然の冷く赤裸な氷冠と呼ぶことの出来る地方を記述した。茲には赤道直下の住民の信ぜられぬ我が地球の創造界の驚異すべきことが認められる、即ち美しい色を示す氷塊の雄大な集團があり、壯麗な北光があり、空気に因れる眼の驚くべき官錯があり、而して上は極寒なのに數、暖い地裂があるのである。碎け落ちた峻しい岩石に依つて見れば現れ出て居る花崗岩は南極に於けるよりも又大體大部分に就いて北半球の住居されて居る地球の基礎となつて居るよりも更に遠く蔓延して居るやうである。而して海洋が生物の最初の住處であつたから之に生息して居る生物の充實して居る北方の海洋は今もなほ生命の子宮であつて而してその沿岸は地球の生物の組織が蕚苔や昆蟲や蛆蟲で始まつた縁であると看做すことが出来る。陸地には未だ固有の鳥類を養成することが少いので海鳥が之に敬意を表して居る。海獸と水陸兩棲動物とは陸上の太陽の乏しい光線で暖を取るが爲に這ひ廻つて居る。海水の最も激しい混亂のうちに云はば地球上の生物の生息し得べき限界が示されて居るのである。

而して人間の組織はこの限界に於て如何に維持されて居るのか。寒氣が人間に及ぼし得るすべてのものはその身體を稍、短縮し且つ液の循環を云はば限局することであつた。グリーンランド人は概して五尺以下であるがその同胞たるエスキモ人は更に北方に住むものほど更に小さくなるの

である。併し生活力は内部から働き出すので向上せる身長に於て得難いものを暖く堅忍な肥滿を以て補ふのである。頭顱は身體の割合に大きくなり顔面は廣く且つ扁平になる、是は自然は唯兩極端の中間に於て節制と中庸とを以て美しく働くのであるが、茲に於てはなほ未だ何等愛すべき卵形を完成せず殊に顔面の裝飾にして而して私をして云はしめれば量器の衡たる鼻をなほ未だ突起せしめることが出来ないからである。頬が顔面の大部分を占めて居るから口は小さく圓くなるのである。髪の毛が逆立て居るのは精巧な純化の力ある汗液が缺けて軟い粗のやうな毛を造ることが出来ぬからである。兩眼は生氣がない。同じやうに丈夫な肩と廣い肢體が形成されて居る、胸體は血液が多く肉附がよい、唯手足のみは小さく華奢で云はば生物の最外端の芽のやうな趣がある。外部の形狀に於けるが如く内部に於ても汗液の刺戟と經濟とは相互に關係して居る。血液が緩慢に流れれば心臓は弱く鼓動する、故にこの地方では性慾は頗る弱いが他の地方に於て温度の高まると共にその刺戟は非常に増進するのである。性慾の覺醒するのも晚い、未婚者は貞操を守つて居る、而して女子は殆ど強制されねば面倒な結婚を爲すものがない分娩することも勤い、故に多産の淫蕩な歐羅巴人を犬に比較するのである。その結婚に於ても又その全體の暮し方に於ても靜寂な端正が情慾の牢平たる抑制が行はれて居るのである。より暖い風土に於ては又より

輕快な生活上の思想を形成せしめる刺戟に對しては無神經で靜寂に且つ靄然として無關心に満足しつつ唯窮乏に對してのみ活動して且つ生き且つ死ぬのである。父は人生の美德幸福として尊重するその冷靜の分別を小供に授けんとして教育するので、母は女親の深く執拗なすべての愛情を以て小兒に長く乳を授けるのである。自然は之に纖維の刺戟と彈力とは之を吝んで與へぬがその代り持久的な永續的な體を與へ且つ閉ぢ込められた家屋の内部に於てはその呼吸のみでも息の詰る程の暖氣を生ずる暖い脂肪質と豊富な血液とを以て之を覆うたのである。

すべての事業に於て同様に働いて居る組織的な造物主の同様な手を茲に認めない人は何人もあるまいと思はる。人間の身長が劣つて居るがその地方には植物も未だ澤山はない。少數の小木が生長し蘚苔や灌木が地上に這つて居る。鐵を被せた支距標桿でも嚴寒には短縮するのである。人間の纖維には内在せる有機的な生命はあるが如何して短縮しないで居ることが出来る。併し有機的な生命も唯壓逼されて云はば組織の狭い範圍内に局限されるのである。茲に又すべての組織に於ける作用の類似が存するのである。海獸その他寒帯の生物の外部の肢體は小さくて優しい、自然は出来る丈け多くすべてを内部の體温の領分に糾合して居るのである。鳥は厚い羽毛を以て之を爲し獸類は身體を包んで居る脂肪質を以て人間がこの地方に於て血液の多い温い

皮膚を具へるやうに覆はれて居るのである。外からも亦而して實に地球上に於けるすべての組織の同一の原則に従ひ、自然はこの組織の役に立たぬものは之を吝まねばならぬのである。之に與へられた狂水即ちブランドイは多くの害を來したが薬味は内部の腐敗し易いその身體を害するであらう。故に風土は又之を吝んで與へぬのである。而も反對にその窮乏せる逆旅に於て内部の構造上必要な休息に對する執著心あるが爲、外部から強制して活動し且つ運動せしめるので、その法律制度はすべてこの點を土臺として居る。茲に生長する若干の藥草は血液を清淨ならしめるものでかくて又その必要とするところである。外界の空氣も高緯度に於ては不燃焼となりかくて死體に於ても腐敗に抵抗し而して長生を促すのである。有毒な動物は乾燥した寒氣の容赦せざるところで、煩はしい昆蟲に對しては無感覺と煙と長期の冬とによつて保護されて居る自然はかく補償するのでその働くすべてに於て調和して働いて居るのである。

かく最初の民族に就いて記述した後之に類似した民族に就いて同じく詳細に淹留する必要はないであらう。亞米利加のエスキモ人は風俗・言語に於けるが如く形狀に於ても亦グリーンランド人の同胞である。唯この不幸な民族は鬚ある異人として無鬚の亞米利加から北方に驅逐されたので大部分又且つ放浪し且つ努力して生活せねばならぬのである。實に冬季に於てその穴居に於

て數、自分の血を吸うて榮養を取らねばならぬと云ふに至つては氣の毒な運命である。この地方その他地球上若干の地方では殘醒な必要が至高の玉座を占めかくて人間は殆ど熊の暮らし方を擇ばねばならぬのである。而も人間は到る處に於て人間として己を保つことが出來た、蓋しこの民族の一見甚しく人道に背いたことを示すに拘らず仔細に考慮するならば又人道が認められるのである。自然は人類が如何なる強制的な状態に堪へ得るやを試さんと欲したので而して人類はそ試練に堪へたのである。

ラップ人は比較的既に緩和された地方に住んで居つて又より溫和な民族である。人間の體格に於て身長も増加し顔面の圓く扁平なことも減じ顔も低くなり眼は暗褐色となり黒く眞直な毛髪は黄褐色を帯びて來る。その外部の形成と共に人間の内部の組織も亦溫暖な太陽の光線に従つて聞く蓄のやうに別々に働くことになる。山地のラップ人は既に馴鹿を放牧して居るが是はグリーンランド人も、又エスキモ人も爲すことの出來ぬことである。而し馴鹿に於て食物と衣服、家屋と屋根、便宜と快樂を得て居るのであるが、地球の縁邊にあるグリーンランド人はこれらすべてを多くは海洋に於て求めねばならぬのである。かくて人間は既に獸類を友人とし従僕として之に就いて藝術と家庭の暮らし方を學んだのである。之によりて足は疾走に慣れ腕は技巧的な歩行に慣れ心

情は所有と固定した財産の愛とを覺え、且つ又愛情によつて自由を解し而して耳は小心な注意に慣れたので、吾人は多くの民族に於て此の事情を認めるのである。ラップランドの人はその動物の如くに小膽にも耳を聳てて微細の物音にも飛び上るのである。放牧生活を好んで太陽の戻つて來るや山上を見詰めるのであるが馴鹿も亦之を見詰めるのである。ラップ人は馴鹿に語り馴鹿は之を理解するのである。即ち自分の財産又は家僕に對するが如く馴鹿の爲に配慮するのである。故に自然はこの地方に與へることの出來る最初の家畜を以て人間に又人間の生活方法に對する指導を爲したのである。

廣漠たる露西亞帝國の氷海に濱せる民族に就いては之を記述した澤山の新しい一般に知られた旅行以外に之を寫した圖會さへ存して居、之を一覽すれば旅行記に記述し得るよりも多くを知ることが出來る。これらの民族の多くは如何にも混淆し且つ雜沓して住んで居るが、最も來歴を異にせる民族も亦北方教化の柱石の下に壓迫され且つ云はば北極の一つの鎖に鍛え上げられて居るのである。サモエド人は圓くて廣く扁平な顔面を爲し逆立つた黒い毛髪を有し身長低く血液豊富な北方組織の體格を具へて居る。唯唇は突き出て居り鼻は開いて廣く鬚は少くなつて居る、而して廣漠たる地方を東に行くに従ひ益々少くなつて居るのを認める故にサモエド人は云はば北國の

黒人である、而しその神経の甚しい刺戟性と女子の早くから即ち十一、二歳から情事を解することと、更に報告が眞實であるならば女子の胸に黒い輪の存することとその他の事情とは之をして寒地に住へるにも拘らずなほ黒人に等しからしめるのである。而もサモエド人は微妙で且つ熱烈な天性を且へては居るが是は多分民族性として齎し來つたもので風土も亦之を一變せしめることの出來ぬものであらうと思はれるので、その組織の全體に於てはやはり北人である。ツングウスの人は更に南方に住し既に蒙古民族に類似して居るが、而も言語と云ひ種屬と云ひ之と區別されて居つて、恰もサモエド人並びにオスチャク人がラップ人並びにグリーンランド人と異なつて居ると同じである。ツングウス人の身體は能く發達して居るが瘦身である、眼は蒙古流に小さく唇は薄く毛髪は柔い。而も顔面は猶扁平な北方の組織を示して居る。ヤクット人並びにユカギール人も同じことであるがユカギール人は韃靼人とヤクット人は蒙古人とその組織が大に相接近し實に韃靼人とその種屬に近いやうである。黒海裏の沿岸、カウカッス、ウラルの山麓に於ては即ち世界の温帯の一部に於ては韃靼人の組織がより優麗なものに變化して居る。その形状は細く瘦せて來た、頭は無骨な牛頭からより美しい卵形に變つた、色は清新になつた、鼻は能く整つて且つ乾いて傑出して來た、眼は生氣を添へ毛髪は暗褐色となり歩調は活潑になつた、態度は謙讓に且つ小

膽になつた、故に自然の豊饒が生物に於ても増加する地方に近づけば近づく程又人間の組織も之に相應し且つ益々精巧となるのである。即ち北方に進めば進む程又カルムック人の曠野に入り込めば入り込む程、容貌の特徴は益々北方入式に又カルムック入式に扁平となり又粗野となるのである。勿論この點に於ても多くのことは又民族の暮し方に、土地の地相に、民族の由來に又他民族との混淆に關係するのである。山地の韃靼人は曠野又は平原に住へるものよりもその特徴を純粹に維持して居る。村落並びに都市に接近して居る民族は温和になり、その風俗と特徴も亦益々混同される。民族が壓逼されることが少ければ少い程、その簡單で粗野な暮し方を益々忠實に守らねばならず、随つて又その組織も多く維持されるのである。故にこの大きな海洋から離れた韃靼の高原に於て澤山の確執と變動とが行はれ山脈・砂漠・江河の之を區別し得るよりも相互の混沌があつたのであるから又規則の例外を認めるのである、而もこの例外は規則を證明するのである。蓋し北方人と韃靼人と蒙古人との組織の下にすべてが別たれて居るのである。

二 地球の脊を爲せる亞細亞の民族の組織

この地球の脊に於て人類が最初の住居を見出だしたと思はれる種々の想像が下され得るので茲

に又最も美しい人間の種属を求め得べしと考へるものがある、併し此の期待は全く間違つて居るのである。カルムック人並びに蒙古人の組織は知られて居る、身長は中位で少くも今日残存して居る者は容貌は扁平で鬚は薄く色は褐色で北方風土の特徴を示して居る。併しそれと共に鼻の方に斜に傾き平らたく充たされた背、狭くて黒く弓形になつて居らぬ眉、額の方に餘りに廣い小さい扁平な鼻、離れた大きな耳、曲つた股と脚、白く丈夫な齒列を擧げるならば、全體の容貌と共に是は人間のうちの肉食動物の特徴を示すやうに見えるのである。扱この組織は何の爲であるか。弓状の膝と脚とは第一に民族の暮し方にその理由を見出すのである。小供の時からその脚に於て滑走し又は馬上に垂れて居る。その生活は著座と騎乗とに別たれ、而して人間の足に實にその美しい形状を與へる唯一の態様即ち歩行は散歩を除いては全く無縁のことである。扱多くの生活方法も亦組織に現はれて居らぬであらうか、離れて居る動物のやうな耳は云はば常に聞き耳を立てて聽いて居るのである。小さな鋭い眼は最大の距離に於て最微な烟や塵埃を認めるのである。白く露はれて骨をも咬む齒、太い顎とその上の頭の背へと反つた位置、それらの特徴は云はばその生活方法の要素に化した態度特性ではないであらうか。扱なほ之に加へるにバランスの云へる如くにその小兒は數、十歳まで顔面が不恰好に脹れ上り生長して形の整ふまでは醜い牡丹餅形である

としたならば、その地方の廣い範圍に互つて雨なく水なく少くも純潔な水なく小供の時から殆ど沐浴を全く知らずに居ると云ふことを知つたならば、その住んで居る處が鹹湖か鹽土か鹽澤で随つて食物に於ても亦更に茶用の水に於ても加里の趣味を好みて日々その消化を弱めて居ることを考へたならば、更にその住居せる地球の高處に於て清淨な空氣と乾燥した風と加里性の蒸發氣と雪を眺め小屋の煙に咽ぶ長期の冬と更になほ幾多の些細の事情を添へたならば、數千年前に既にこれらの原因の若干が思ふに猶更に強く働いたであらうから實にその爲に其の組織が生じ遺傳的な體質と變化したと云ふことは尤らしくないであらうか。吾人の身體に元氣を添へ云はば之を澆洩たり且つ強健ならしめるに於ては何物も水中の沐浴洗滌に及ぶものはない、況や之に歩行・疾驅・格闘その他の身體の練習の伴ふに於てをやである。身體の弱めることに於ては何物もその制限なく啜りその上になほ堅めた加里鹽を用ゐて味を添へる暖い飲物に増すものはない。故にバラスの既に述べたやうに蒙古人やアリヤト人の女子の身體が弱いので五六人掛つて全力を盡しても一人の露西亞人の爲し得ることが出来ぬのである。故にその身體が殊に輕快なので隨つて小さな馬に跨つて云はば唯空中を翔翔して居るのである。故に最後に又その小供は又醜い牡丹餅顔となるのである。若干の隣接して居る種属には蒙古人の組織の特徴を以て生れたものもあるが

併し種屬としてはその上に進んで居るのである。故に若干の原因は多分風土的であらねばならぬことと考へられるので之が多少生活の方法と血統とは因つて民族の肢體の組織に於て接枝され遺傳されるのである。露西亞人又は韃靼人が蒙古人と混血したなら美しい小供が生れねばならぬ。更に蒙古人の間に於ても亦勿論蒙古流ではあるが極めて華奢な釣合好い形狀が出来ねばならぬのである。故に茲にも又自然はその組織に於て依然として忠實なのである。遊牧民族はこの蒼天の下にこの地方に於てかかる生活方法にありてはかかる輕快な肉食鳥とならねばならぬのである。而して遙かに遠くこの組織の特徴は蔓延して居るのである、蓋しこの肉食鳥の飛んで行かぬ處が何處にあるのであらうぞ。一度ならずその勝ち誇れる遠征は大陸の上に波及した。故に蒙古人は亞細亞の多くの國土に於て定住しその組織は他の民族の特徴に於て高尚にされた。實にこの戰爭の汎濫よりも早く彼の太古の移住は夙に住居となつた此の地球の最高の背から多くの附近の國土に行はれたのである。故に又既に世界の東部地方は北方カムチアゲール人に至るまで並びに西藏を超えて恒河の彼岸の半島に沿ひて多分蒙古人の組織の特徴を具へて居ることであらう。吾人に多くの不思議を示すこの地方を見渡して見よう。

支那人の身體に於ける多數の技巧は蒙古人の特徴と相關聯して居る。支那民族に於ては吾人は不恰格な足と耳とを認めるのである。多分間違つた文化の影響が之に加はつたのでこの地方の多くの民族に普通に行はれて居る彼の自然に反して纏足したり壓ふべくも耳朶を穿つたりするやうな相似た畸形に機會を興へたのであらう。組織を恥ぢて之を變化せんと欲したが而も變化に讓歩した爲に最も醜怪な美として結局遺傳された機關を生じたのである。支那人は各省毎にその生活方法の甚しい相違をその儘にしてはあるが明かに猶ほ蒙古の高原に於て最も著るしく眼に著く東方人の組織の特徴を具へて居るのである。廣い顔、小さくて黒い眼、低い鼻、薄い鬚は他の國土に於ては風土に因つて優しい圓い顔に變化した。而して支那人の趣味も整頓の悪い機關の結果と思はれるが恰も政體が專制政治を、學問が粗大な思想を伴つて居るやうなものである。日本人は支那文化の民族ではあるが多分蒙古人の素性を傳へて居るのであらう、一般に發育が悪く頭は大きく眼は小さく鼻は低く頬は扁平で殆ど鬚無く概して脚は曲つて居る。その政體と學問とは暴力的な強制多く唯その國土にのみ全然相應しい。第三の專制政治は西藏を支配して居る、その宗教は遠く野蠻な曠野地方に行はれて居る。

東方人の組織は山脈と共に南方恒河彼岸の半島にまで及んで居る、思ふに民族も亦群山と共に南下したのであらう。韃靼に接壤して居るアッサム王國は旅行者の報告にして信すべくんば殊に

北方的な特色を有し水腫が多く鼻が低い。引延した耳に不恰好な裝飾を施し、かかる温帯地方に於て粗末な營養を攝り赤裸で居ることが粗野な民族の野蠻性の特徴である。アラカン人は鼻は廣く開き額は扁平に眼は小さく耳は肩まで引き下げられて居るので實に東方方面の不出來を示して居る。アツアとベグウとの緬甸人は西藏人その他の北方民族の鬚を嫌ふやうに細毛に至るまでも之を嫌つて居る。自然の豊饒な地に於ても又鞭靷風の無鬚主義を棄てることを好まないのである。かくて風土と民族との相違はあるが南方群島までかくの如くである。

更に北方に於ては東方世界の終端なるコレエト人やカムチアゲール人まで相違はない。カムチアゲール人の言語は支那・蒙古の言語となほ若干の類似を示して居るのであるがそれらの民族から分離したのは遠い時代であらねばならぬ、蓋し鐵の使用を未だ解して居らぬのである。但しその組織はなほその地方と没交渉ではない。毛髪は黒く顔面は廣く扁平で鼻と眼とは深く窪んで居る。而してその精神上の性質はこの荒涼たる寒冷の風土に於ては一見破格ではあるが而も之に相應して居るのを認めるのである。最後にコレエト人、チュフチ人、クリル人並びに更に遠く東方の島嶼に於ける住民は蒙古形式から亞米利加形式に次第に變化して居るものと私には思はれるのである。而して吾人にして若し大部分未だ知られて居らぬこの大陸の西北端と蝦夷の内地と

吾人に阿弗利加の内部と同じやうになほ白紙同様である新墨是哥の廣い地域とを知るやうになつたならば、吾人はクックの最近の旅行に従ひ可成り明かに濃淡の差が看取されぬ程に變化してゆくことを見るであらうと思はれるのである。

かかる廣漠たる地方は一部分は不規則になつては居るが併し到る處多少無鬚の東方人の組織を具へて居る。而してその一民族の血統でないことは各國民の種々の言語と風俗とが之を示すのである。扱之が原因は何であるであらうか。例へばかく異なる民族は鬚に對して争ひ又は耳を垂め又は鼻と唇とを穿つ爲に何故に武装したか、私見に従へば元來の不恰好が根柢に存して居らねばならぬ、それが後に野蠻な藝術を輔佐に要めたので最後に之が父祖の習慣となつたのである。動物の變種は形狀の變る以前に髪のと耳とに於て示されるのである。次に下つて足に及び顔面に於ても亦第一に横顔を變える所の十字線に於て示されるのである。民族の系圖がこの遠隔せる地方國土の性質が併し殊に民族性の内部の生理學の相違が一層研究されたならば、吾人も亦この點に就いて詳細の説明を得るであらう。而して學問と民族とに精通したバラスがこの點に就き吾人の爲に人類學の落穂を拾つた最初の人ではなかつたであらうか。

三 地球の美しい形状の民族の組織

最高の山脈の懐のうちに世界の樂園のやうに墜れて迦濕彌羅の王國が存して居る。豊饒で優麗な丘陵は益々高い山脈を以て圍まれその最後のものは永久の雪を以て覆はれ雲際に聳えて居る。茲に美しい小河と溪水とは流れ地上は有用な藥草果實を以て飾られて居る。島嶼と田園は清新な綠色を呈して居る、すべては牧場を以て覆はれて居る。有毒な又兇猛な動物はこの樂園から驅逐されて居る。ベルニエルの云ふ如くに此の地方は牛乳と蜂蜜との流るる無邪氣な山と呼ばれ得るので人類の天性は敢へて之に相應して居らぬのではない。迦濕彌羅人は思想の最も豊富で且つ伶俐な印度人に取つて詩歌と學問とに於て同じく熟練した、手工と藝術とに於て最も能く教化された人間と看做され且つその女子は數々美の模範視されたのである。

若し人間の手が相合して自然の樂園を荒廢せしめ且つ最も無邪氣な人間を迷信と壓迫とで苦しめなかつたならば如何に幸福で溫都斯坦はあり得たであらうぞ。溫都人は人間のうちに最も柔和な種屬である。如何なる生物をも好んで侮辱することはせぬ。人生の齋すものを祟め、「其の母國の提供せる牛乳、米、果實、有用植物等最も簡素な食物を營養とするのである。新たな旅行家

の所言に従へばその形状は實に瘦せて美しくその肢體の鈞合は整ひ、その指は長くて優雅にその顔面は開豁で愛想が好い。その特徴は女性に於ては最も華奢な美の線で男性に於ては男らしい柔和な精神である。その歩調と身體全體の態度とは最高の程度に於て優美で挑發的である。脚と脛とはすべての東北地方に於ては發育あしく又は猿のやうに短くなつて居るが、茲では長められ活氣ある人間の美を示して居る。蒙古人の組織さへもこの種屬と結婚したものは品位と快活とに變化して居る。而して身體の形状の如く精神の本來の形状も亦優秀で、實に迷信又は奴隸制の壓迫のないものとして觀察すればその生活方法もさうである。節制と平靜、柔和な感情と心靈の靜寂な深みとはその勞働とその享樂、その倫理とその神話、その藝術と更に人類の最も極端な極端の下に於ける忍従の示すところである。幸福な羊兒よ、何故に自然の爾の郷に於て妨げられず心配なく放牧して居ることは出来なかつたか。

昔の波斯人はなほその殘黨なるガウル人即ち拜火教徒の示すやうに山間の醜怪な民族であつた。併し亞細亞の國土で波斯のやうに度々侵略に暴されたものは他に存せず、而して實にその側面に能く組織された民族が住んで居つたので之を糾合して茲に一組織を爲し高尚な波斯人に於ては品位と美麗とを該ね備へたのである。一方には美の母なるチルカッシアが位して居つた、裏海

の他方には韃靼種族が住んで居つてその美しい風土に於て既に又優良な形状に組織され數々南方に蔓延したのである。右方には印度があつてかくて同地方並びにチルカッシアから購つた美女は波斯人の血統を美しくした。波斯人の性質は此の人類の教化向上の場所に適したものであつた。蓋し波斯人の敏捷で徹底的な理知、豊富で且つ潑刺たる想像力は温順で鄭重な資質とその虚榮、豪華、並びに歡樂に實に傳奇的な戀愛に感嘆することと共に、多分好悪と特徴とに對して權衡を得る爲の最も選擇した性質であつたのであらう。不恰好な民族が之を以てその身體の不恰好な飾らんと欲して却つて之を増加する彼の野蠻な裝飾の代りに茲には身體の美形を高上せしめる美しい習慣が生じたのである。水に乏しい蒙古人は不潔に生活して居らねばならなかつた、柔弱な印度人は入浴した、淫逸な波斯人は香油を塗つた。蒙古人はその岩山に固著し又は馬上に跨り、柔らかな印度人は休息し、傳奇的な波斯人は歡樂と賭博とにその光陰を分つた。波斯人は眉を染め姿を大きく見せるやうな衣装を纏うた。美しい良い形態で好悪と精神力とが優しく釣合を保つて居た、何故全地球に之を傳へることが出来ぬのか。

若干の韃靼種族は本來地球上の最も美しい組織の民族に屬し而して唯北方地域又は曠野地方に於て粗野になつたと云ふことは既に一言した、裏海の兩方面はこのより美しい組織を示して居

る。ウズベック人の女子は大きく組織整ひ容姿が良いと記述されてある、男子と格闘を辭せぬのである。記述に従へばその眼は大きく黒く生氣あり毛は黒くて細かい。男子の組織も品位が一種の威嚴を具へて居る。蒲花羅人にも同一の賞讃が與へられてある。而してチルカラス人の女子は眉は黒い絹絲の如く眼は黒くして情熱を帯び額は滑かにして口は小さく頰は圓く其の美は遠く附近に知られ且つ稱揚されて居る。この地方に於ては人間組織の量器の支柱が中心を保ちその秤皿は東と西とに希臘と印度とへ向つて居ると信ぜねばならぬ。吾人に取つて幸福なことは歐羅巴が美しい形状のこの中心點に餘り遠からず、且つこの大陸に住んで居る多くの民族は又或は黒海と裏海との間に介在せるこの地方に定住し或は徐々に之を通過したことである。故に少くも吾人は美の國と黠を向けて正反對の地に住んで居るのではない。

此の美しい人間組織の地方に侵入して之に淹留したすべての民族はその特徴を緩和した。土耳其人は本來醜怪な民族であるが高上してより美しい形状となつた、是は廣い地方の征服者として美しい種屬と接近したその効果が現れたのである。コーランの戒律も亦之に洗浴と清潔と節制とを命じて反對に淫蕩的な安逸と戀愛とを許したので多分之に貢獻したことであらう。希伯來人はその祖先は同じく亞細亞の高原から來つて多年或は礎石の埃及に或は亞刺比亞の砂漠に彷徨

したが遊牧的に流浪して居つたのである。又その狹隘な國土に於て法律の壓迫的な桎梏の下に置かれ、爲に生活の自由な活動と多くの幸福とを促進する理想には決して向上することは出来なかつたが、而もその遠方に散在し且つ長く甚しく委棄された今に於て又亞細亞組織の特徴を傳へて居る。剛健な亞刺比亞人も亦徒らに出掛けたのではない、蓋しその半島は自然によつて優美よりも寧ろ自由の國土として形成され而して砂漠も將た又遊牧生活も最も良く美貌を養成するものとなることは出来ないが、而もこの剛健にして勇敢な民族は同時に美しい組織の民族である、その三大陸に廣く影響を及ぼせることは次を以て之を説かうと思ふ。

最後に地中海の海岸に於て人類の美しい形狀は精神と相結婚して而して地上並びに天上の美のすべての刺戟に於て惟り眼にのみならず又心靈に見られることの出来る場處を見出したのである。それは即ち亞細亞並びに群島とグレキア本土と更に遠い夕の國の海岸とに於ける三重の希臘である。生暖い西風は亞細亞の高地から次第に移し植ゑられた植物を靡かして之に生命を吹き込むのである。光陰と天運とは之に加はつてその汁液を高く驅つて之に冠を與へたのであるが、是れ即ち今も猶各自が希臘の藝術と學問とのその理想に於て歡喜を以て驚歎する所である。茲はチルカッシアの美人の情人も印度又は迦濕彌羅の藝術家も考案することの出来ぬ形狀が且つ考へ

られ且つ造られたのである。人間の姿はオリムポス山に登り神の美を以て裝はれたのである。

更に歐羅巴の方へは私は迷ひ込まない。歐羅巴は形狀が豊富で混濁して居る、又その藝術と文化とによつて頗る天性を變化したのでその互に混同し盡した精巧な國民に就いては敢へて何等一般的な事を云はうと思はぬ、寧ろ私は通過し來つた地方の最後の海岸から、も一度振り返つて二の意見を述べた後に黑人の住める阿弗利加に渡らうと思ふ。

第一に何人にも著眼されるのは最も能く組織された民族の地方は美そのものが二つの極端の間に介在して居るやうに地球の中央地帯であることである。そこにはサモエド人の收縮されるやうな寒威もなければ蒙古人の乾燥した鹽風もない而して他方に於ては阿弗利加の砂漠の灼くが如き熱氣も又亞米利加の風土の濕氣を帯びた且つ強烈な變化も共に知らざる所である。又地球の最高頂に位しても居らず極地の側面にもなつて居らぬ。寧ろ一方に於ては韃靼並びに蒙古の山脈の長壁が之を保護し又他方に於ては海洋の風が之を涼しくして居る。一年の時は規則正しく更代してゆくが併し赤道直下に行はれるやうな暴力はないのである。而してヒッポクラテスが既に一年の時の穩かに規則正しいことは又好悪の釣合に大きな影響を及ぼすと云うたやうに之は又少からず吾人の心靈の反映複寫に影響するのである。掠奪をこととするトルクマン人の山間に又は曠

野に放浪するものは最も美しい風土に於ても亦依然として醜怪な民族である。然るに一度平靜に定住して而して其の生活を穩かな享樂と他の教化ある國民と聯絡を生ずるが如き活動とに分つに至れば、その風俗は勿論のこと懸て歲月の經過と共にその組織の特徴にも參加するであらう。世界の美は唯平靜な享樂の爲に造られたのである。之に依つてのみ美は人間に與へられ人間に於て體現されるのである。

第二。人類が此の美貌の地方に於て發詳したのみならず茲から又文化が最も深切に他の國民に影響を及ぼしたことは人類に取つて好都合であつた。神は吾人の全地球を美の本據となすことは出来ないが、少くも人類をして美の門に踏み入らしめ、而して多年印刻した美の特徴を具へた民族を徐ろに先づ他の地方に向はしめたのである。實に組織の整うた民族に對して最も親切な影響を及ぼすものたらしめたのは又自然の同一の原則であつた。即ち自然は之に身體の形狀にも又他の國民に對するこの親切な影響にも必要な精神の活潑と彈力とを與へたのであつた。ツングウス人とエスキモ人とは永久に穴居して居つて苦樂共に遠方の民族に就いては心を勞しないのである。黒人は歌羅巴人の爲に何物をも發明して居らぬ。決して歐羅巴を幸福にしやうとも又之と戦はふともかかる思想は一切起さないのである。美しい組織の民族の地方から吾人は吾人の宗教・

藝術・科學等吾人の有するものは多きにせよ吾人の文化並びに人道の全體を受けたのである。人類の美化の形成し得るすべてのものはこの地方に於て發明され熟考され而して少くも其の初步に於て試験を受けたのである。文化の歴史は之を説明して論争の餘地なからしめるのである、而して吾人の經驗が之を證明すると私には思はれるのである。若し天運の親切な呼吸が少くも吾人にこの民族の精神から精華を吹き掛けて野蠻な幹に美しい小枝を接枝し歲月と共に吾人を高上せしめなかつたならば吾人北方の歐羅巴人はなほ野蠻人であつたであらう。

四 阿弗利加民族の組織

黒人の國に渡つたならば吾人は公正の考で吾人の得意氣な自負心を棄て此の地方に於ける組織を宛も世界に於て獨特のものであるかの如く公平に觀察せねばならぬ。吾人が黒人をハムの逃亡した子孫であり無慈悲の眞像であると看做すと同一の權利を以て黒人は殘忍な強奪者を北極に近く多くの動物が白色に變ずるやうに唯自然の弱さが爲に墮落した白血病患者であり白い惡魔であると説明することが出来る。我輩黒人が原人である、と云ひ得るであらう。我輩は生命の源泉たる太陽に最も強く染められて居る、我輩には到る處我輩の左右には太陽が最も深刻に働いて居る。

見よ我輩の黄金に果實に豊富な嗣土を、我輩の魔天の喬木を我輩の勇猛な動物をすべての原素は我輩の附近に活動して居る、而して我輩はこの生命の活動の中心點である。黒人はかく云ひ得るであらう。故に吾人は謙遜の念を以てその特有の土地に踏み込まんと欲するのである。

地峽に於て直ちに埃及人と云ふ驚くべき國民に邂逅するのである。偉大で強壯で身體は肥えて居る、この肥滿はニル江が授けたのである、更に粗大な骨格で黄褐色である。而も健康で多産で長壽で中庸を失はぬ。今は懶惰であるが曾ては勞働を好み勤勉であつた。明かにこの骨格とこの組織との國民は又昔の埃及人のすべての賞讃された藝術と組織とを成立せしめることが出来たのである。より繊細な國民では之に従事することが困難であつたらう。

ヌビアと更に南方に位する阿弗利加内地の住民に就いては吾人はなほ知る所が少い。而もブルウスの現在の報告にして信すべくばこの全體の高地には黒人種屬は住んで居らない、黒人は唯この大陸の東西兩海岸をのみ即ち最も低く最も熱い地方を占領して居るのである。ブルウスは赤道直下に於てさへも此の極めて溫暖で雨多き高地に於ては唯白人又は黄人のみが居ると云うて居る。この事實は黒人種の起源を説明するに方つて注意すべきことではあるが、この地方の民族の形状の又黒人の組織に次第に推移して居ることは吾人のなほ多く重きを置かねばならぬことであ

る。吾人の知れるが如くアビシニア人は元來亞刺比亞の發祥であつて而して兩帝國は又數々且つ長く聯絡されて居つた。ルッドルフやその他のアビシニア人の畫像に就いて判斷し得るならば、亞刺比亞人その他遠い亞細亞人の形状に於けるよりも如何にもより殘忍な容貌の特徴が茲に認められるのである。なほ遠く隔つては居るが黒人の形状に近づいて居る。而し國土が峻嶺と樂園的な平原との甚しい相違を示し風土が暴風酷暑寒威と最も美しい時季とが相更代しその外更に他に幾多の原因があるのでこの殘忍に組織された特徴が説明されるやうである。異なれる大陸に於ては又異なれる人類の形状が生れ出でねばならぬ、その性質は肉體的な生活力多く永く持續するが而も又組織に於て常に動物的な極端へと推移せんとして居るやうに見える。アビシニア人の文化と政體とはその形状に従ひ又國土の性質に従ひて基督教と邪教との又暢氣な無頓著と野蠻な專制政治との粗雑な混合である。

阿弗利加の他の方面に於ても吾人は同じやうにバルバリ人々に就いて之に批評を下し得る程のことを知つて居らぬ。アトラス山脈に占據し殘忍な活潑な暮し方をして居るので亞刺比亞人も又區別される發育の良好で輕快に且つ敏捷な形状を得て居る。故になほ黒人組織の一民族に外ならぬのであるがヌア人はさうでない蓋しヌア人は他の民族と混同した亞刺比亞種屬である。新し

い観察者の言に従へば秀麗な民族で容貌の特徴は美しく顔は瓜實顔で眼は美しく大きくて燃ゆるが如く、鼻は隆くて廣からず扁平ならず、髪の毛は美しく房々と垂れて黒い。故に阿弗利加に於て又亞細亞式な組織を有するのである。

ガムビア並次にゼネガ江から黒人種族は真に始まるのである。併し茲にも又徐々に變化してゆくのである。ヤロオフ人はウルッフ人は未だ普通の黒人の低い鼻と厚い唇とを具へて居ない。この民族も又或る記述に従へば歡喜舞踊し最も幸福な秩序に於て生活して居る小さくて輕快なフウリ人でもその肢體の構造は美しくその毛皮光澤があるが併し羊毛質ではなく容貌は快活で長みを帯びて居つて、彼のマンデゴウ人や更に南方に住へる黒人種族に對すればなほ美の畫像である。故にゼネガ江の彼岸に於て始めて唇の厚く鼻の低い黒人の形狀が始まるので、是はなほ無數の小民族の變種を爲してギネア、ロアンゴ、コンゴ、アンゴラ等に遠く南方まで蔓延して居るのである。例へばコンゴ並次にアンゴラに於ては黒色は橄欖色に褪せ、縮れ毛は赤色を帯び、瞳子は綠色となり、唇の突出は減じ、身長は短くなるのである。反對の海岸ザンジバルに於ては同じくこの橄欖色が見受けられるが唯身長が高く組織が整つて居るのである。最後にホツテントット人とカプファ人は黒人の他の組織に退歩せるものである。鼻はその壓し潰されたやうな扁平性を

唇はその脹れ上つたやうな肥厚性を失ひ初めるのである。毛は黒人の羊毛性と他の民族の毛との中間に介在して居る。その色は黃褐色で其の體格は多數の歐羅巴の如く唯手と足とが小さいのみである。扱吾人にしてなほ澤山の民族の、阿弗利加の最も深い内地に於て北方アピシニアに至るまでの乾燥した地方に住んで居り、而して多くの報告に従へば邊境に於ては土地の豐饒と優美、強壯、文化並びに藝術とを増進して居るべき筈のものを知つたならば此の雄大な大陸に於ける民族の畫像に就いて濃淡の彩色を完成し而して多分何處にも缺陷を見出さないであらう。

併し乍ら地球の此の方面からの信用するに足るべき報告は大體に於て如何にも乏しいのである。吾人は辛うじて沿海地方を知つて居るのみで而して是も亦數々歐羅巴人の大砲の達するより遠くは及ばない。近頃の歐羅巴人では何人も阿弗利加の内地を通過したものはない。而も亞刺比亞人の商隊は數々之を試みて居るのである。吾人の之に就いて知れる所は黒人の口から得た風説か然らずんば若干の幸運な若しくは不幸な冒險者の可成り古い報告である。加之、吾人が夙に知ることの出来る民族に就いても又歐羅巴人の眼孔は餘りに壓抑的に無分別であつて憐むべき黒奴に就いて民族上の組織の區別を調査するの意志がなかつたやうに思はれるのである。之を見ること宛も家畜の如く賣買に際しては唯その齒に依つて老若を區別したのである。ヘルンフォート出身の

一宜教師は海岸に接觸した多くの阿弗利加の旅行者よりもより詳細な黒人の民族性に就いての差別観を他の大陸から吾人に供給したのである。フォスターの精神とスバアマンの忍耐と更に兩人の知識とを具備した人々の一隊が若しこの未探検の國土を横斷したならば自然界並びに人間界の學問に對して如何に幸福であらうぞ。食人を敢へてせるヤーガ人やアンチイク人に就いて得た報告を、若し内地阿弗利加のすべての民族に適用するならば確かに誇張である。ヤーガ人は一の同盟より成る掠奪國民で云はば人為的に構成された民族であつて、多數民族の混合體並びに排泄物として大陸に於て流賊となりてその極野蠻殘忍な習慣に於て生活して居たもののやうには思はれる。アンチイク人は山地の民族である、思ふにこの地方の蒙古人カルムック人であらう。併し月山山脈の麓には如何に多くの幸福にして平和な國民が住居し得ることぞ。歐羅巴がその幸福を目標とするの價值のないのは、この大陸に於て容赦し難くも罪惡を犯したからであつてなほ常に犯して居るからである。平和に商賣を營む亞刺比亞人は大陸を縦斷し遠く各地に植民地を置いてある。實に私は人類の組織ではなくて黒人の組織を説いて居るのであつたと云ふことを忘れた。而して博物學にして若し黒人に對する程の多くの注意を人類のすべての變種に對して加へて居つたならば如何によいことであつたらう。私はその觀察の若干の結論を述べて置く。

(一) 黒人の黒色は一種類とし他の民族の白色・褐色・黄色・紅色よりも不思議なものではない。黒人の血液も腦も精液も黒くはない、併し吾人がすべて有つて居る表皮の下の網は吾人に於ても亦少くも或る部分に於ては而して多くの事情の下には多少著色されてゐる。カムベルは之を論證した而しその説に従へば吾人はすべて黒人となるの素質を有して居る。寒地のサモエド人に於ても女子の胸の廻りに條が認められる、黒人の黒色の萌芽はその風土に於ては單にそれ以上に發達することが出来ないのみである。

(二) 故に單にその萌芽を茲に發達せしめ得る原因のみに就いて説くべきである。而して茲に又直ちに類推論は空氣と太陽とが之に大きな關係を有せねばならぬと云ふことを示すのである。蓋し何が吾人を褐色ならしめるか殆ど何れの國土に於ても兩性を區別するのは何であるか。何が百年の長きに互つて阿弗利加に住んで居つた葡萄牙種族を色に於て黒人にかくまで類似せしめるか。何が阿弗利加に於て黒人種族その物をかくまで甚しく區別するか。言葉の最も廣い理解に於ての風土と又生活の方法と食物の種類とが之に屬するのである。東風が全大陸の上に酷熱を齎す地方に於て正確に漆黒の黒人種族が住んで居る、熱度の減ずる處又は海風の之を冷却せしめる處に於ては黒色は褪せて又黄色となるのである。涼しい高地に於ては白色の又は白色様の民族が住

んで居る。低い通風の悪い地方に於ては又太陽がより多く油を煮出すので之が表皮の下に於て黒色の外観を呈せしめるのである。僭吾人にして若しこの黒人が數千年來この大陸に住し實にその生活方法に於て全然之に順應したことを考慮したならば、今日まで影響を與へぬ多くの事情も當初の時代に於てはすべての原素がなほ最初の粗暴な力を有して居つたので、又強く影響を及ぼさねばならなかつたことと、數千年間云はば事變の全體の車が廻轉して今日も亦當時も地球上に於て發展され得るすべてのものを發展したことを熟慮したならば、若干の民族の皮膚が黒くなつたと云ふやうな鎖末事は吾人を驚かさぬであらう。自然はその絶えず働く祕密な影響を以てこれよりも更に大きな他の變化を生じたのである。

(三)然らばこの小變化を自然は如何にして生ずるか。事柄が之を示して居ると私には思はれる。自然が之を以て網狀の眞皮を着色するのは油である。黒人の汁は而してこの地方に於ては歐羅巴人にありても數、黄色を帯びて居る。黒人の皮膚は厚くて柔い天鵞絨で白人の皮膚のやうに強くなく乾いて居ない。故に太陽の熱はその内部から油を調製し、出来る丈け廣く之を表面に近づかしめ皮膚を柔にし且つその下の網を着色するのである。この地方の多數の病氣は肝臟に關係したものである。試みにその記事を讀んだならば黄色も亦黒色も吾人には生理上から又病理上か

ら不思議に思はれぬであらう。

(四)黒人の羊毛の如き毛髪も同じやうに説明される。毛髪は唯皮膚の精巧な液汁に依つてのみ養はれ而して自然に反して脂肪のうちさへ生ぜられるので、その營養となる液汁の量に従つて屈曲し而して液汁の缺如する場合に枯死するのである。故に動物のより粗野な組織に於ては、その體質の惱みでかくて流れ注ぐ液汁を調製し得ぬ土地にありて、羊毛が逆立てる毛となるのである。人間のより精巧な組織はすべての風土に順應せねばならぬので、之に反して皮膚を潤すこの油の過剰なるが爲に毛髪が羊毛の如くに變化し得るのである。

(五)併し人體の各部の固有の組織はこれらすべてのことよりも多くを示すであらう。而して是も亦阿弗利加人の組織に於て説明されることと私には思はれる。唇と胸と生殖器とは多くの生理學上の證明に従へば密切な關係を有して居るものである。而して自然はこの民族に高尚な才能を拒まねばならぬので、造物藝術の簡單な原則に従つて肉慾的享樂の益々豊富な量を賦與せねばならなかつた、是は生理學上に示されねばならぬ。突き出た唇は又白人に於ても人相學上極めて肉慾的な徴候と認められるので、薄い紅唇は微妙な冷靜な趣味の特徴となつて居る、勿論異つた經驗が無いではないが、兎に角この民族に於ては性慾が人生の首要な幸福であるので之に就いて又

外部に特徴を示すのに何の不思議があらうぞ。黒人の小兒も生れた時は白い、爪の周りの皮膚と乳房と陰部とが先づ第一に着色する、素質上それらの機關のこの一致は實は他の民族に於ても見出されるのである。百人の子供は黒人には些末事である、老人は子供が僅に七十人ほかないとて涙を流して悲しむのである。

(六)この肉慾的快樂を要める脂肪豊富な組織と共に自然は又横顔と身體の全體の構造とを變化せねばならぬ。口が突き出て來れば随つて又鼻は低く小さくなり額も引つ込み顔面は遠方から見れば猿の頭蓋に構造が類似して來るのである。頭の位置も是に従つて定められ後頭部に變化が起り、身體の弾力性ある全體の構造は鼻や皮膚迄をも動物的な肉慾の享樂に向けられるのである。この大陸に於ては太陽の熱の母國として汁液の最も豊富な喬木が生育するやうに、又最大で最強で最も活潑な動物の群が、而して殊に猿猴の非常な集團が活動を爲し、かくて空中も河中も海中も又砂中もすべて生命と生産とを以て蠢動して居るやうに、組織的な人間の性質もその動物的な機關に従つて到る處に簡單なこの創造力の原則以外のものに従ふことは出來ぬのである。より微妙な智力はこの灼くが如き太陽の下に於ける生物には、熱情を以て煮えるこの胸裡には拒まれねばならぬが、その感情に於て考へしめざる纖維組織を以て補はれて居るのである。故に黒人には

その風土の組織上何等より高尚な天與が降され得ぬのであるから之に同情すべきで之を輕蔑すべきでない、而して之より奪ひつつ又之を補ふことを解して居る慈母を崇むべきである。黒人は溢るるが如き寛大を以て食物を與へられる國土に於て心配なく一生を暮すのである。その細そりした身體は宛も水中向に造られたやうに水中で跳ね廻る、宛も娛樂であるかのやうに木に攀ぢたりする。而して活潑で且つ輕快であるが如くに健康で強壯である、その他の組織に依つて多くの歐羅巴人の之に仆れる風土のすべての變災と病氣とに堪へるのである。より高尚な歡樂が與へられなかつたとて如何して煩悶する必要があらうぞ。之を得る素質は存して居つたのである、併し自然は手を譎へしてそれからその土地にその生活の幸福により多く役に立つものを造つたのである。自然は阿弗利加を造らねばならぬのではなかつたであらう、而も阿弗利加に於ては黒人が住はねばならぬのである。

五 熱帯地方の島嶼に於ける人間の組織

何物も大洋のうちに散在して居る國土ほど或る主要な特徴の下に之を概評するに困難なものはない。蓋しその國土は互に離れて居つて而して多くは或は近く或は遠い地方からの種々の渡來者

に由つて或は晩く或は早く定住され、其の何れもが確かに一の自己の世界を構成して居るので、民族學上に於て精神に雜駁な繪畫を提供すること宛も地圖の上に於て眼に之を示すが如くである。而も茲に於ても亦自然の組織に關して決して主要な特徴を否定せしめぬのである。

(一)亞細亞の島嶼の多數に於ては一種の黑人種屬があるが是は地方の最古の住民であるやうに思はれる。その生活せる地方の相違によつて多少はあるが色は黒く毛は縮れて羊毛のやうである。此處彼處に於て又唇は突き出て居り鼻は低く齒は白く現れて居る、而して驚くべきことには又この組織と共に黑人の氣風が示されて居る。吾人が大陸の黑人に於て認める同一の粗野で健全な強壯、考の無い思想、饒舌な淫蕩心は群島のネグリト人に於ても示される。唯到る處にその風土とその生活方法とに従つて居るのみである。この民族の多くはなほ教化の最低の段階に立つて居るが、是は今日海岸と平原とに住んで居る後の渡來者に驅逐されて山間に入り込んだからで、随つて又之に關しては又忠實にして正確な報告が少いのである。

如何故に黑人の組織はかくの如き遠方の島嶼にこの類似を有するのか。確かに阿弗利加人が特にかかる古代に於て植民地を遠く茲に立てた爲ではない、併し自然が到る處に同一様に影響するからである。是は又最も熱い風土の地方で唯海風によつて冷却されるのみである。されば何故に

群島のネグリト人が大陸の黑人のなつたやうになつてはならぬのか。殊に群島の最初の住民として又この地方の創造的自然の最も深い印象を受けねばならなかつたのである。比律賓列島のイゴロト人その他多くの他の島嶼に於ける類似の黒人も亦之に屬するのである。ダムピヤーが新和蘭の西方に於て最も不幸な人類の一種屬として記述した野人も之に屬するのである。思ふに是は地球の最も荒廢した地方に於けるこの組織の最低の階級であらう。

(二)後世になつて他の民族がこの島嶼に定住したが是は是れ故に又それほど目立たぬ組織を示して居る。フォスターに従へばボルネオのパチュウ人若干のモルッカ列島に於けるアルフウリ人マギンダノのズバド人盜賊群島カロリン群島並びに更に南方太平洋上諸島の住民が之に屬するのである。これらは言語・顔色・教化・風俗に於て大に一致して居らねばならぬ。その毛は長くして光澤あり而して新しい旅行に依つてこの人種の形狀がオタハイチ並びに他の附近の島嶼に於て如何に挑撥的な美貌に完成されたかを知つたのである。而もこの美はなほ全然官能的であつて、而してオタハイチの女子の稍々低い鼻に於ては組織的な風土の最後の壓迫又は印象が看取されるやうに見える。

(三)更に晩れてこれらの島嶼の多くに渡來したのは馬來人・亞刺比亞人・支那人・日本人等で

かくて何れも亦その種屬に就いて猶明瞭な痕跡を存して居る。要するに島嶼のこの海峡をば形状の集合地點と看做すことが出来るので、その形状は民族の有せる性質に従ひその住居せる土地に従ひ、その地に定住して居つた年代と生活方法とに従ひ極めて異つて發達したのである。故に數々極めて接近せる地方に於て最も驚くべき相違に遭遇するのである。ダムピヤーの目撃した新和蘭人とマリコロ列島の住民とは最も粗野な組織であるやうに見える、新ヘブリデス人・新カレドニア人・新西蘭人等はこれから徐々に向上したのである。此の地方のウリセスなるラインホルト、フオスターは吾人の爲にその人類の種類と種屬とを博覽と理解とを以て敘述したが、吾人は地球の他の地方に就いても亦哲學的な地文學に對する相似た貢獻を人類の歴史の基礎として希望せざるを得ぬのである。僭私は最後の最も困難な大陸に向はふと思ふ。

六 亞米利加の組織

世人の知れるが如く亞米利加はすべての地帯に互り而して最高度の寒熱のみならずなほ又最も急激な氣候の變化を示し最高にして最も險阻な高山と最廣にして最も平坦な平原とを該ね有してゐる。更に世人の知れるが如く大きく彎曲せるこの蜿々たる大陸は右方に南から北に走る山脈の

連鎖があるから、それ故にその風土もその生物も舊世界と類似が少いのである。このすべてのことは反對の半球の成立に於けるが如く又その人類の種屬に就いても看取されるのである。

併し他方に於ては又舊世界から遠く隔在したこの老大な地方が實に多くの方面から移住されることが出来ないのは實に亞米利加の地位によるのである。阿弗利加、歐羅巴、並びに南部亞細亞からは廣漠たる海洋と風が之を隔てて居る。舊世界からの唯一の移住線はその西北方に存して居るのみである。故に極めて多様であらうとの從來の期待は之が爲に確かにその力を減じた、蓋し最初の而して多數の住民が同一地方から渡來して而して恐らくは他の渡來者の僅かに少數の混合を來したのみで次第に南下し結局全土を充實したとしたならば、住民の組織と性質とはすべての風土に於ても亦劃一を示し唯少數の例外を示したのみであらう。而して南北亞米利加の多數の報告の示す所は即ち地帯と民族とが大いに異なり更に又數々暴力的な手段に依つて互に離隔されんとして居るが、而も大體人類の組織に於ては黒人の大陸に於ても見出されぬ程の劃一の特徴の存して居ることである。故に亞米利加の組織は確かに他の何れかの混淆された地方の組織よりもより純粹なもので、而して問題の解決は渡來の行はれたと思はれる方面以外に於ては何處からも著手することは出来ぬのである。

クックが亞米利加で接觸した民族は中位の身長で六尺以下であつた。顔色は銅紅色を帯び顔の形状は方形で頬骨は可成り突き出し髪は少い。髪の色は長く黒く、肢體の構造は強壯で、唯足が不恰好である。僭東方亞細亞と之に接近した大島嶼の民族を記憶して居る人は特徴毎に其の徐に變化したものを看取するであらう。私は之を一民族に包括はしない、蓋し多分多くの民族が又異なる種族から移住したのであらう。唯その組織がその不恰好に於てさへも併し最も多くその裝飾とその放縱な風俗とが證明する如くに唯東方の民族のみであつた、他年一日、今日唯若干の船著場のみ知つて居る亞米利加の西北海岸全部を見盡して而してその住民に就いてクックが例へばウンアラスカ等の船著場に就いて述べたやうな忠實な描寫を得たならば多くのことが説明されるであらう。吾人のなほ知らぬ大きな海岸に沿うて日本人と支那人とが又渡來したか、而してこの西方面に端正な有鬚の民族があると云ふ童話に何か事實の存するものがあるかの問題が解決されやう。勿論西班牙人にして若し歐羅巴の二つの最大の海國民即ち英人並びに佛人と學問に對する賞讃すべき征服精神を共にして居るならば墨是哥を本據としてこの貴重な發見に對し最も手近にあるのである。この點に於て少くもラックスマンの北方海岸への旅行と英人のキヤナダからの努力とが多くの斬新有益なことを吾人に教へることを望むのである。

北亞米利加の極西の民族は同時に最も端正なものであらねばならぬと多くの報告が傳へて居るのは不思議なことである。アッシニペル人は大きく強く敏捷な形状の爲に、クリスチノオ人は愛想好く快活な爲に有名である。而も吾人はこれらの民族並びに大體總べてのサウナスの住民を唯童話としてのみ知るのである。ナドヴェシイ人に就いては元來稍々確實な報告がある。この民族並びにチツイベエル人、ウイノバギエル人、に就いてはカアウエアが、チエラキ人、チカザア人、ムスコオゲ人に就いてはアゲイルが、所謂五民族に就いてはコオルヅン、ロオジマス、チムバアレクが、更に北方の民族に就いては佛國の宣教師が之を吾人に知らしめた。而して之に就いてあらゆる異同はあるが誰か主要な一特徴の如き有力な組織の印象を之から受けて保存せぬものがあらうか。この一特徴とは即ち健全にして維持された強壯野蠻的に尊大な自由と戦闘との勇氣で、是があるが爲にその生活方法と家庭生活、教育と政府、戰時並びに平時に於ける職務と習慣を形成するのである。罪惡と美德とに於て圓球上に於ける唯一無二の性質である。

而して如何してこの性質を得たのか。私見に従へば茲に又その北部亞細亞人から次第に變化したこととこの新世界人の特性とが極めて多く説明される。粗野な剛健な民族として渡來し來つて暴風と山嵐との間に於て形成された、扱海岸を去つて大きな開豁なより美しい土地を目前に見出

した、その性質が歳月と共にこの國土に適するやうに形成されてはならぬだらうか。大きな湖水と江河との間に、この森林に於て、この草原に於て、彼の不毛にして寒冷な海洋の涯にあつた時とは異なつた民族が形成されたのである。湖水・山脈・江河が分れてゐるやうに民族も分れた、種屬と種屬とは激烈な戦争に陥り、随つて又爾餘の點に於ては極めて靜穩な民族に於て彼の民族相互の戰鬪的憎惡が主要な特徴となつた。かくて尙武的種屬に形成され、而して土地のすべての事象に順應し之に由つて雄大な精神を得たのである。北部亞細亞人の薩滿教を傳へて居るが併し亞米利加風に變つて居る。その健全な空氣と森林原野の綠色と湖水江河の爽快な清水とはこの國土に於ける自由と財産との呼吸を以て激勵するのである。高尚な露西亞人の如何なる集團に依つてすべての西伯利の民族は堪察伽に至るまで服従せしめられて居ることぞ。亞米利加のより剛毅な野蠻人は勿論退却はするが併し決して服従せぬのである。

その性質の如くその身體裝飾に於ける驚くべき趣味も亦この起源から説明されるのである。亞米利加のすべての民族は鬘を抜いて居る、故に元來鬘の少い地方から渡來したものであらねばならぬ。随つて父祖の習慣を棄てることを欲せぬのである。亞細亞の東部がこの地方である。又豊富な汁液が鬘に附着し得る風土に於ては即ち之を嫌つたのであるが今もなほ之を憎み随つて小兒

の時から之を抜くのである。亞細亞の北部の民族は頭が圓いが東方に進むに随つて形狀は方形に變ずるのである。この父祖の組織を又棄てることを欲せずしてかくてその容貌を形成して居ることよりも一層自然なことがあつたか。多分優しい圓形を女性的組織として恐れたのであらう。故に又強制的な藝術に訴へて父祖の短縮された顔色を保存したのである。北方人の龜狀の頭は高緯度の北人の組織のやうに圓く形成された、他のものは方形に形成され又は双肩の間に頭を壓し著けかくて新風土はその長さをも形狀をも變化することは出来なかつたのである。東方亞細亞の外何れの他の地方もかかる強制的な裝飾の證據を示すものはない、而して吾人の述べたやうに多分又種族の聲望を遠隔せる地方に於て維持しようと云ふ故意の目的に出でたのであらう。故にこの裝飾の精神さへも多分夙に齎されたものであらう。

最後に亞米利加人の銅紅色も毫も吾人をして誤解せしめることは出来ない。蓋し人類の色は既に東部亞細亞に於て赤褐色になつて居る、而して多分この地方に於て色を濃厚にしたのは他の大陸の空氣と香油その他のものである。黒人が黒く亞米利加人が紅色であつたからとて私は之を怪しまない、蓋しかくまで異なつた人類がかくまで異なつた地帯に數千年來住んで居つたのであるから若し渾圓球上に於てすべての人が雪白であり又は褐色であつたならば私は寧ろ之を怪しむで

あらう。吾人は動物の、より粗末な組織に於ても世界の異なる地方にありて固定した機關さへも變化するのを見るではないか。而して身體の肢體のその全體の鈞合並びに態度に於て變化し又は皮膚の下綱が或は多く或は異なつて著色せられることに就いて何を喋々する必要があらうぞ。偕この緒論の後に亞米利加の民族に伴うて而して如何にその本來の性質の劃一性が複雑性に混淆し而も決して没却されぬかを見よう。

最北部の亞米利加人は小さくて強壯であると記述されて居る、大陸の中央に於ては最大にして最美の種族が住んで居る、最南の平坦なフロリダに於ては之は既に強壯と勇氣とに於て譲らねばならぬ。ゲオルヒ・フォスターは「クックの著書に描寫されて居る種々の北亞米利加人は性質上すべての相違あるに拘らず、而も大體に於ては容貌上一般的な性質が行はれて居つて之が私に認められ而して私の記憶にして正しくはテラ・デル・フェゴのベンチュレ人に於て私が看取したと云ふことは顯著なことである」と云うて居る。

新墨是哥に就いては吾人は知る所が少い。西班牙人の發見に従へば此の地方の住民は服裝整ひ勤勉で清潔でその田園は能く耕され、その都市は石造である。哀れな民族は若し慄悍な男兒として山間に残存し得なかつたならば今日如何になつたであらうか。アパラアシユ人は大膽な敏捷な

民族で西班牙人も之を害することが出来ぬと云はれて居る。而してシヤクタ人、アゲイス人並びにテガ人に就いては如何にバアジェが讚辭を述べて居ることぞ。

墨是哥はその國王の支配を受けて居つた時に比すれば今や慘憺たる光景を呈して居る。その住民は十分の一も残存して居らぬ。而して最も不正な壓制に因つて如何にその性質が變化したことぞ。私の所信に従へば全地球上に於て虐待に苦しむ亞米利加人が壓抑を加へる西班牙人に對して懐けるよりもより深刻により執拗な憎惡の念はないのである。蓋しバアジェは今日西班牙人が被壓抑者に對して與へる多くの寛大の處置を頗る賞讃して居るが、而も他の頁に於ては極端に苦しむものの悲惨なものと自田な民族が迫害される野蠻なことを匿すことが出来ないのである。墨是哥人の組織は頗る橄欖色を帯び美麗で愛嬌があると記述されて居る。その眼は大きく勢よく輝き、その官能は清新でその脚は輕快である。唯その精神は隷從によつて倦怠して居るのである。亞米利加の中部に於てはすべてのものが濕氣ある暑さに屈し歐羅巴人も最も慘憺なる生活を遂げるのであるが而も亞米利加人の柔軟な體質は之に屈しない。海賊の手を脱れて暫らくテラ・フィルムマの野蠻人の間に滯留して居たワッフェルは之に款待されたことを敘し且つその形狀と生活方法とを次の如くに記して居る。「男子の身長は五尺乃至六尺で骨格は強壯に胸は廣く美しい、

不具者も不恰好のものもそのうちになかった。器用で活潑に且つ敏捷な疾走者であつた。その眼は生氣ある灰色でその顔は圓く、唇は薄く、口は小さく、頤の形はよかつた。その髪の毛は長くして黒く、之を梳ることは折々の娛樂であつた。その齒は白くて整然と列び、多數の印度人の如く自ら裝飾し且つ彩色して居つた。」是が果して元氣なく不潔な人類の一種として想像せんと欲して居る民族であるか。併し是は地峽の最も神經を害ふ地方に於て住んで居るのである。

忠實な博物學者フェルミンはスリナムの印度人を地球上の何れに於けるよりも組織の整つた純潔な人間として記述して居る。「朝起きるや否や水浴する、而して女子は油を以て身體を摩擦するが一は皮膚を保護する爲一は蚊の刺すのを防ぐのである。肉桂色で鮮紅色を呈したのもあるが併し生れた儘では吾人と同じく白いのである。跛行者も又發育不良のものもそのうちに見受けられぬ。長い漆黒色の髪の毛は高齡になつて初めて白くなる。眼は黒く顔色は鋭く鬚は無いのもあり少いものもあるが少しでも生えれば之を引き抜くのである。この美しい白齒は老年まで健全に保存され而しその女子は又如何にも華奢であるやうに見えるが健康上は強壯である。」バンクロフトの勇敢なカリブ人、怠惰なウオロウ人、熱心なアカウオウ人、社交的なアロウオウ人等の記事を読んだならば、世界の酷地熱方に於けるこれら印度人の形體が虚弱で性質が劣等であると云

ふ僻見は放棄されるであらうと私には思はれるのである。

更に南方ブラジルの無數の民族へと移つていつたならば民族・言語・性質の如何に複雑して居ることを茲に見出すことぞ。之に就いては昔も今も旅行者は可成り同じやうに記述して居る。レリーは「その髪の毛は決して白くならない、その原野の常に綠色を呈して居るやうに常に活潑で暢氣である」と云うてゐる。勇敢なタピナム人は葡萄牙人の權柄を脱するが爲に多くの尙武的な民族の如くに會て足跡の至らぬ際涯のない森林に退却した。バラグアイの傳導師等が能く之を懷柔し得た他のものはその従順な性質はよつて殆ど小供のやうに墮落せざることを得ざるに至つた。併しこれも亦かくあるべきことであつて、而してこの民族も亦附近の勇敢な民族も之が爲に何等人類に恥辱を與へるものではないのである。

併し吾人は自然の玉座に最も残忍な壓制に銀と慘虐とに豊富な祕露に近づくのである。この地に於ては貧乏な印度人は實に最も深刻に壓逼されて居る、坊主である、而して婦人の間に於て女らしく成つた歐羅巴人である。曾てインカ族の下に生息して居つた時には幸福であつたこの優雅な自然の小兒のすべての力は、今や抑制された憎惡心を以て且つ苦しむ且つ忍んで居る若干の性質に壓搾されたのである。ブラジルの知事ピントは「一見した處では南亞米利加人は溫和に且つ

無邪氣に見受けるが、仔細に之を観察すればその容貌に何か粗暴で猜疑を懷き陰鬱で不機嫌な點を發見する」と云つて居る。このすべてのことは民族の盛衰から説明されぬであらうか。その溫和に且つ無邪氣であつたのは宛もその時機に際會して善良な生物に於ける教化の足らぬ野性がその内在せるものへと向上せねばならなかつたからである。今日に於ては猜疑を懷き且つ陰鬱になつて最も深い不機嫌を心裡に消磨し難い程に養成するの外に何を期待することが出来るか。譬へて見れば吾人が脚を擧げて踏みつけたが爲に彎曲した蛆蟲が憎らしくも現れたやうなものである。祕露に於ては土地を所有して居る壓抑に苦しむ貧民よりも黒人の奴隸が立派な生物であるのである。

而も到る處に於て皆奪ひ去られたのではない、而して幸にもコルデラ山脈とチリの曠原とは存して居つて多くの勇敢な民族はなほ自由を有して居るのである。例へば打ち破ることの出来ぬマロオヒ人、プエルヒ人、アラオク人並にバタゴニアのテフェレット人即ち身長六尺で大きくて強い南方の雄大な民族が住んで居る。その形状は不恰なものではない、顔は圓くして稍、平たく眼には活氣あり齒は白く而して髮の毛は長くて黒い。コムメルンは「私は餘り濃くはないが併し長い髯を蓄へた若干のものを見た、皮膚は多くの亞米利加人に於けるが如く青銅色であ

る。妻子と共に常に馬上に跨つて南亞米利加の廣漠たる平原を彷徨し野牛を逐うて居る」と云うて居る。ファルクナーとファイダウレとは之に就いて最も善い報告を吾人に供給して居る。而してその南に方つては地球の礎礎にして寒冷な邊境テラ・デル・フェゴがあるのみで、其處に居るベシエレエ人は思ふに人類の最低の種屬であらう。小さくて醜怪で堪へ難い臭氣がする。貝類を食物とし海豹の皮を衣服とし一年中嚴冬のうちに凍へて居る。而して實に森林が十分にあつても而も密閉された家屋も暖を取る火も缺如して居る。寛仁な自然が南極に向つて陸地を茲に終らしめたのは善いことである。更に南せば如何に貧窮な人類が無感覺を來す程の極寒のうちにその生活を送らんと夢想に耽つたことぞ。

偕以上が亞米利加の民族の主要な若干の特徴であつた、而して是から全國に取つて何が生じて來るか。

第一。各地帯に連互して居る一大陸の諸民族に就いては成る可く稀に概括論を試むべきである。亞米利加は暖い、健全である、濕氣である、低地である、豊饒であると云ふ人は正しい、而して之と正反對のことを云ふ他の人も亦正しい、即ち他の時季と場處とに就いて云うて居るのである。民族に就いても亦同様である。蓋し民族はすべての地帯に互つて全半球の人間であるので

ある。北にも南にも侏儒が居り、而して侏儒の傍に巨人が居る。中間には中間な組織の多少優良な民族が居つて、溫和なものあり尙武的のものあり、緩慢なものもあり活潑なものもあり、様々の生活方法とすべての性質とを具へて居る。

第二。而もこの枝多き人類の幹が澤山の小枝を出して居つて一本の根から生じ得ないからとて、直ちに又その果實に於て一種類を示すことを妨げないのである。而して是は即ち亞米利加人の有力な精神形成並びに形狀に就いて云はんと欲する所である。ウロアは中部地方に於て殊に毛の生えた小さな額と、小さな眼と、上唇の方へと曲つて居る薄い鼻と、廣い顔と、大きな耳と、能く出來た股と、小さな足と太く短い體軀とを認めた而してこの特徴は墨是哥まで及んで居る。ピントは之に添へて、鼻は稍、扁平に、顔は圓く、眼は黒いか又は栗色で小さいが併し鋭く而して耳は極めて顔から遠ざかつて居る、と云つて居る。是は又極めて遠い地方の民族の描寫に於て示されて居るのである。この人相の主要な點は地帯と民族とに従つて些末の點に於ては變化して居るが、家族的特徴の如くに最も異なるものにもなほ且つ認められるやうで而し實に可成り確一の起源を示すのである。若し民族がすべての大陸から極めて異なる時代に於て亞米利加は渡來したであらうならば、混同したにせよ混同せずとその儘に居るにせよ、人間種屬の相違は實に更

に甚しからねばならなかつたのである。碧眼と金髪とは全大陸に於て之を見出さぬのである。チリなる碧眼のチエザール人とフロリダのアカンザ人とは近代に於て亡びたのである。

第三。偕この形狀からして亞米利加人の或る主要な而して中庸な性質を擧げねばならぬとしたならば、親切と小供らしい無邪氣であるやうに見える。是は又その昔の制度、その技巧と若干の藝術、殊に歐羅巴人に對する當初の態度が之を示すのである。或る野蠻の國土から出芽して而して文明世界の何等かの援助をも受けずして自ら生長しかくまでに達したので、茲に又文化の微弱な創始に就いて人類の極めて教訓的な繪畫を提供するのである。

七 結 論

今私が茲に魔術使の杖を揮つて以上に述べた漠然たる文字のすべての記述を繪畫に變化せしめ而して人々に地球上の同胞に就いて描寫した形體容貌の畫堂を提供することが出來たならば結構であらう。併し吾人は未だ此の人類學上の希望を貫徹するにはなほ餘りに遠ざかつて居る。數百年來劍と十字架とを携へ珊瑚とブランディの杯とを携へて地球上を遍歴したが、平和的な畫筆に就いて一考したものはない、而して旅行者の澤山の群にも亦文字では何等の形狀も描かれぬ、少

くもすべての形状のうちで最も微妙な最も異なつた常に變化するものは描かれぬと云ふことが思ひ附かれなかつたのである。多年不思議なことを誇張し且つ想像を加へたのである、後には圖畫を作つた場合にも此處に彼處に美化せんと試み、眞の動物學者が珍しい動物の形状を描く時、之を美化せぬことに思ひ及ばなかつたのである。而して人間の體質のみは例へば動植物を畫く時のその精密な注意を必要とせぬのであるか。而も最近時に於て高尚な觀察の精神が又人類に對しても、實際既に覺醒し、而して單に少數の民族のみに就いてではあるが、往時に於てドブリード・プランは勿論況や宣教師等の企及し難い程の若干の圖書が出来たのであるから、何人か之を爲し得る人が出でて各處に散在して居る人類の相違に就いての忠實な繪畫を蒐集しかく言葉の上には人類の博物學と人相學との基礎を置いたならば、立派な贈物となるであらう。藝術は哲學上から應用を試みることは出来ない、チムマーマンが動物學の地圖を試みたやうに人類の相違の實際以外のことは何物をも想像してはならず、而も又その相違はすべての現象に就いて考慮に就いて之を示し、かくて地球の人類學の地圖を調製したならば、以て博愛事業の冠位に置かれるであらう。

第七卷

以上に敘述した民族の描寫は吾人が更に之に若干の評論をその上に記述する前面の場處に外ならぬのである。描寫の蒐集も亦夫に於ける卜者の觀察區劃、吾人の視方の限界した範圍、吾人の記憶の補助資料以外のものたらしめんと欲して居るのではない。何が吾人人類の哲學に之に於て示されて居るかを見よう。

一 地球上の人類は異なつた形状に於て現れて居るも而も同一の人類の種屬である

自然に於ては一つ木に二つの葉の互に等しいのがないが、二人の人間の容貌に於て二人の人間の組織に於てはなほ更相等しいのがない。吾人の技巧に富んだ構造は如何にも無限の相違を示し得るのである。その確りした部分も精巧な様々に纏れた纖維に分解され肉眼では之を辿ることは出来ぬ。纖維は膠によつて聯結されて居るのでその柔い混合物は打算的なすべての藝術の及ばぬ

ところである。而してこれらの部分もなほ吾人の具へて居る最小のものである。即ち極めて多量に存して居つて之に依つて吾人が享樂し且つ生息する種々様々に靈化さるる液汁の容器、包被、輸管に過ぎないのである。パーラは「如何なる人間も内部の構造に於て他人に全然類似しては居らぬ。神経や動脈の走向に於て百萬の百萬程の場合に區別されるので、この部分の相違からしてその一致して居る點を見出すことは殆ど出来ないのである」と云つて居る。扱既に解剖學者の眼がこの無数の相違を見出したとしたならば、かかる技巧的な組織の目に見えぬ力に於て如何により大きな相違が存せねばならぬことを。かくて何れの人間も結局は一の世界である、實に外觀上からは類似した現象であるが併し内面に於ては獨特の實在で他のものからは測り知ることが出来ぬのである。

而して人間は獨立した實體ではなくて、自然のすべての要素と相聯絡して居るので、空氣の呼吸に依つて生活し地球の最も異なる産物を飲食として生活し、光線を吸入し空氣を腐敗させると共に火を利用し、覺める時又眠る時、休息する時又運動する時、宇宙の變化に貢獻して居る。然らば之に依つて變化されることはないであらうか。人間を吸収する海綿や微光を放つ火絨と比較するのは餘りに甚しい、人間は無数の調和であり生活せる自己で、環境を爲せるすべての調和

の力が之に働くのである。

人間の一生の生活全體は變化である、すべての年齢はその寓意である、而して全體の人類は絶えざる變化を爲して居る。花は落ちて凋み、他のものが出芽し發芽する。喬木は一度にすべての四季をその頭に載く。偕發汗の計算のみに従へば八十歳の老人は少くも二十四回身體全部を新たにしたのであるが、誰か地球上の全人類界を通じて物質とその形状との變遷に就き變化のすべての原因を究めることが出来るか。吾人の圓球は區々になつて何れの地點も他に同じくない、時代の潮流の何れの波も他に等しいものはない。獨逸の住民は數世紀前まではパタゴニア人であつたが最早さうでない。將來の風土の住民は吾人と等しくないであらう。偕吾人にして若し地球上に於ける萬物が異なつて居つたやうに見えるその時代、例へば象が西伯利や北亞米利加に生息し、オハヨオ河畔に遺骨の發見されたやうな巨獸が存在して居つたその時代に遡り、當時この地方に人類が生活したとしたならば今日そこに生活して居つたものとは如何に異なつた人間であつたらうぞ。かくて人類の歴史は要するに變化の舞臺であつて之を達觀するものは唯自らすべてこれらの組織に呼吸を吹き込みそのすべてに於て自ら且つ喜び且つ感ずる造物主のみである。造物主はその環境の世界を變化せる後仕上げては破壊し、形體を美化しては改善を加へて居る。地球上の

遍歴者は、倉皇辭し去る蜚蜚は、狭い一條の線上に於ける此の大精神の奇蹟を驚歎し、他のものと合奏して出来た形狀を滿悦し祈願して而してこの形狀を以て世を謝する外には何事も出来ない。「私も亦アルカデアに居つた」と云ふのが常に變化し復活して居るこの創造界に於けるすべての生物の碑文である。

而も人間の理智はすべてのうちの複雑に劃一を要め、而してその原型たる神の理智は地球上に於ける極めて無數の種々相に於て到る處に結婚して一體を爲さしめたから、吾人は又茲に變化の非常な世界から最も簡單な原則に敢へて立ち戻ることが出来るのである、即ち地球上に於ける人類は唯同一の種屬であると云ふのである。

人類の怪物と畸形とに就いての如何に多くの古人の小説が歴史の光明に照して既に消滅したことをぞ。而して何等かの口碑がかかる逸話を繰返して居る場合にも私は確實に之が又研究の明晰な光線によつて明瞭に美しい真理と化することと信じて居る。猩々は今や世人に知られその人類として又言語に就いて何等の資格のないことは理解された。ホルネオ、スマトラ並びにニコバル島列島に於けるオランダ・タウブブやオランダ・グフに就いての精細の報告に據れば有尾の林間の人間も亦なくなつた。マラッカに於ける足の顛倒した人間とか、マダガスカルに於ける多分尙儂

病であらうと思はれる侏儒民族とか、フロリダの女裝男子とか云ふのは、既に是迄はアルピノ人、ドンド人、バタゴニア人のことかホッテントット人の女子の胸掛に就いて加へられたやうに同様の訂正を要するのがある。瑕疵を生産物から虚偽を吾人の記憶から不自由を吾人の體質から驅逐し得た人々は真理の世界に於ては宛も傳奇上の英雄が當初の世界に占めた地位にあるので、地球上の動物を減ずるのである。

人間が猿猴に接近して居ることも亦私は決して誇張しやうとは望まない、事物の階段をば要める際に於て實際の發芽と間隙とを閑却するが之なくんば段階は出来ぬのである。例へば尙儂のサテールがカムチャダアル人の形狀に於て、小さなシルヴァンがグリーンランド人の身長に於て又はボンゴがバタゴニア人に於て何を實に説明し得るであらうか。蓋しすべてそれらの組織は假りに猿猴が地球上に存して居らぬでも人間の體質から出て來るのである。而して若し更に一步を進めて人類の或る不恰好のことを發生的に猿猴から由來せしめるならば、この想像は眞實らしくないと共に不名譽なことであると私には思はれる。この所謂猿猴類似の多くは猿猴の決して居らぬ地方に存するのである、即ちカルムック人とマリコレエゼ人の後退した頭蓋骨、ベツア人とアマクアン人との離れて居る耳、カロライナの若干の野人の細い手等が之を示すのである。これらの

點も亦眼の最初の誘惑的な幻想を取り去るならば實際は猿猴らしくはないので、實際カルムック人も黒人も又頭の組織上依然として完全な人間で而してマリコレエゼ人は多くの他の民族の有せぬ能力を示すのである。寔に猿猴と人間とは決して同一種属ではないのである。而して私は猿猴が地球上何處かに於て普通の豊富な社會を爲して生活したと云ふ口碑の些末の痕越をも是正したいと希望する。自然は何れの生物にも満足を與へその特有の遺産を授けた。猿猴をば多くの種属と異種とに分ち且つ之を蔓延せしめ得る限り廣く蔓延せしめた。併し人間も爾は自ら尊重せよ。ボンゴもロンギマヌも爾の同胞ではない、併し亞米利加人と黒人とは實に同胞である。故に爾は之を壓抑し虐殺し強奪してはならない、蓋し爾と同じく人間であるからである。猿猴とは爾は同胞の好を結ぶことは出来ない。

最後に私は直觀的な學問に對して熱心な名譽心から人類の間に侵入せしめた區別を限界以上に擴張せざらんことを望むものである。かくて元來地方により又は全然色に従つて立てた若干の例へば四五の人類の區別を敢へて人種と呼んで居る。私はこの名稱に就いて何等の原因を認めない。人種は血族の相違に導くがかかる相違は茲に全然存して居らず、然らずば何れの地方にありてもその何れの色に於ても最も異なれる人種を包容して居るのである。蓋し何れの民族も民族で

ある、其の言語と同じくその民族組織を具へて居る。勿論その地方はすべてに對して懸て特徴を與へ又は唯薄いヴェールを以て之を包むが、併し民族の本來の根本組織をば破壊しない。その組織は家族に至るまで普及され而してその變化は存して居つたも看取され難い。要するに地球上には四五の人種もなければ排他的な變種もない。色も互に區別が立てられなくなる。組織は發生的性質に用立つのである。而して全體に於て要するにすべての時間と空間とを通じて普及して居る同一の大きな繪畫の單に濃淡に過ぎないのである。故に人種は組織的な博物學にも屬せず又地文學的な人類の歴史にも屬しないのである。

二 一種の人類は地球上到る處に於て 風土化された

彼の地球の蝗蟲たるカルムック人と蒙古人とを見よ、その曠野とその山地とに屬すべきもので他の地方には不向である。輕快な人間は小さき馬に跨つて廣漠たる地方と砂漠とを疾驅するのである。乗馬の疲れた時之に元氣を與へるの途を解し而して自ら渴に苦しむや馬の頸部の血管を開いて元氣を恢復せねばならぬ。この地方の多くに於ては雨は降らず唯露が生氣を與へて地球のな

ほ潤渴せざる生産力を新緑を以て獲ふのみである。多くの廣漠たる地方には木もなく甘露の如き清泉もない。扱この粗野な而もその仲間には最も秩序の立つた種族は茲に丈高き雜草の間を放浪して牧飼するのである。その生活状態に於て伍伴たる馬はその聲を解して之と仲好く生息するのである。懶惰なカルムック人は思慮分別なく無頓著に著座して永久に晴朗な蒼天を眺め而して廣漠たる寂寥の地に聽耳を側てるのである。地球の他の地方にありては蒙古人は墮落するに非ざれば向上したのである。その郷土に於ては數千年來その儘であつてその地方自然に因るか又は人工に由つて變ぜざる限り依然としてその儘であらう。

砂漠に於ける亞刺比亞人はその駿馬と共にその堅忍持久な駱駝と共に之に屬するのである。蒙古人がその高原に於てその曠野に於て彷徨して居るやうに、能く組織されたベヅウイン人は廣漠たる亞細亞、阿弗利加に互れる砂漠を放浪して居るので、又單にその地方のみの遊牧民である。亞刺比亞人に於ては簡單な服装も生活の方法も風俗も性格も能く調和し、而して數千年來その天幕はなほ父祖の流儀を持続して居る。自由の愛好者で、財貨と淫樂とを輕蔑し、輕快に疾驅し、乗馬に巧みにして馬を愛護すること己の如く、而も亦巧に槍を使ふのである。その形状は瘠せて神經質にその色は褐色でその骨格は丈夫である。疲勞することなくして艱難に堪へ且つ砂漠あるが

爲に聯絡を取つてすべて一神の爲に立ち、大膽にして敢爲であり能く言を守り客人を款待し高尚である。危険多き生活の方法は注意周到にして小心に警戒せしめ、寂寞たる砂漠は復讐・友愛・熱心・尊大の感情を養成せしめた。亞刺比亞人の居る所に於てはエウフラート江畔でもレバノン山上でもゼネガ河畔でもザンジバルでも印度洋上でも、外國の風土が植民地に於て之を徐々に變化せぬならばなほその原始的の亞刺比亞人の性質を示すのである。

キャリフォルニア人は世界の邊疆に於てその不毛の土地に於てその悲慘な暮し方に於てその變化の甚しい風土に於て、決して寒暑に就いて訴へず、至難の方法ではあるが飢餓を免れその土地に於て幸福に生活して居る。一宣教師の云ふのは「八十歳の高齡になつたキャリフォルニア人がその墳墓を見出すまで一生のうちは何千哩漂泊したかは唯神のみぞ知る。その多くは多分一年に百度その臥所を代へることであらう、蓋し三度續けて同じ場所に且つ同じ地方に眠ることはないのである。夜になつた處で有害な動物や土地の不潔に一切頓著なく其處に臥すのである。その黒褐色の皮膚は下表と上衣との代用になるのである。その家財は弓と矢と小刀に代る石と、草木の根を掘る骨や尖つた木と指籃に代る龜甲と、水を運ぶ爲の腸又は膀胱と而して運好くば蘆薈の絲で漁網のやうに編んだ食物その他雜多のものを運ぶ囊とである。根や様々の小さな種子や努力

して蒐集した乾燥した枯草を食用に供し、飢餓に逼つた時は排泄物をさへ拾ひ集めるのである。肉と名の附くもの並びに之と似て居るものはすべて蝙蝠・蜈蚣・蛆蟲までも饕餮の食物となるので而して或る灌木の葉、若干の若木芽條、皮革・革紐又は軟骨と雖も窺乏の極に陥る時は食料品のうちから排除されぬのである。而してこの貧困な人間は而も健全である、老年に達して強壯でその仲間にありては晩年になつて白髪になつても不思議視されて居る。常に機嫌好くして永久の笑聲と嬉戯とが行はれて居る。體格は整つて活潑で輕快である。二本の前の足指を以て石や他のものを地面から上げ、高踏に至るまで眞直に歩行することが出来る。小兒は滿一歳にならぬ前に立つて且つ歩行する。喋り草臥れると横臥して飢餓か又は食慾に因つて覺醒するまで眠つて居る。眼が覺めるや否や再び笑聲嬉戯が始まる。かくて暢氣にその日を送つて結局老衰したキヤリフォルニア人は冷靜に沈著にその死期を待つのである。」上記の宣教師は更に言葉を續けて「歐羅巴に住んで居るものは實にキヤリフォルニア人の幸福なのを羨むことが出来る。併しキヤリフォルニアに於ては全然無頓著で多少この世界に於て所有し人生のすべての事變に於て神の意志に服従すると云ふ以外には何等の幸福をも享けないのである」と云つて居る。

かくて私は筆を續けてカムチャツカ人からテラ・デル・フエゴに至るまで最も異なれる地

方の多くの民族に就いて風土的な描寫を提供することが出来る。併しそれが爲にこの節略した記述を試みたので、忠實に視察し人道的に同情したすべての旅行家に於てはその記述の些細の特徴を風土的に描寫して居るのである。印度は商業を營む諸民族の大市場であるから亞刺比亞人と支那人、土耳其人と波斯人、基督教徒と猶太教徒、馬來人と黑人、日本人とゲンツ人とが認められるのである。この遠方の海岸に於ても亦各自がその郷土とその生活方法の性質を齎して居るのである。昔の聖書の傳説はすべての四大陸の土からアダムが組織され而して廣い地球の元氣と精神とを之に吹き込んであると云つて居る。その子孫は數千年来何處に赴いて其處に定住したるにせよ其處に木として根づき風土に従つて葉と果實とを生じたのである。之から生じて來る結論の多くは人類の歴史に於てさなくば不思議なことを説明するやうに見えるのでその二三を茲に記して見よう。

第一に何故にその國土に順應して形成されたすべての認知し得られる民族がその郷土に忠實であつて之と不可分に感ずるかが説明されるのである。その身體並びにその生活方法の特徴、その小兒の時代から慣らされて居るすべての歡樂と職務、その精神の全體の視界は風土的である。若しその郷土を奪つたならば即ちそのすべてのものを奪ふのである。

クランツの記事に従へば「丁抹に初めて渡海して連れて来た六人のグリーンランド人の悲惨な運命に就いて観察したのであるが、六人のものはすべての親切な待遇と、干鱈と脂肪との御馳走を意に介せず、而も數々失望した眼孔と可憐な歎息とを以て北方に向つて祖國の空を見詰め、遂に海豹の皮を以て製した漁船に乗つて逃亡したのである。烈風に會つてショウネンの海岸に吹き寄せられコペンハーゲンに連れ戻されたのでそのうち二人は之に失望して死んで仕舞つた。残つたうちで二人は逃亡したが唯一人をのみ連れ戻すことが出来た併し小兒が母の頸を抱いてるのを見る毎に激しく泣いた。(そこで妻子が欲しいのであらうと決めた、蓋し之を談話を交へることは出来ず又洗禮の準備を之に與へることも出来なかつたである。) 他の二人は十年乃至十二年間丁抹に住んで居つてホルデンゲンで眞珠採集に使用された、併し冬になると激しく働くので一人はその爲に死んだ、最後のものは又逃亡した而して陸地から三四十哩の處で初めて追ひ附いたが之が爲に又失望して死んだ。」

苟も人情を解するものは何人たりとも或は買得され或は掠奪された黒人の奴隸がその祖國の海岸を去るに臨み一生のうちを決して再び之を眺めることが出来まいと失望悲哀するその状を寫すことは出来ないのである。レーメルは云つて居る「奴隸が要塞に於ても將た又船中に於ても小刀

を手にせぬやうに嚴重に警戒せねばならぬ。西印度に渡海せしめるに方つてはあらん限りの手段を講じてその機嫌をよくして置かねばならぬ。故に歐羅巴流の七絃琴を備へて置くのである、又笛太鼓を携へて之を踊らしめ之に保證して女人の多く食物の旨くその他之に似たことの多い樂園に行くのだと語るのである。而も船員等がその襲撃を受けて虐殺されそこで奴隸等が船を陸地の方へ返したと云ふ悲惨な實例にも遭遇したのである。」而してこの不幸な掠奪に遭うたものの失望的自殺に就いて如何に多くの悲惨な實例を経験したことぞ。シュパーマンはかかる奴隸の持主の口を藉りて奴隸等は夜分に「種の狂氣に陥り何人にもあれ又自分自身をも殺さんことを望んで止まぬのであると述べて居る。「それは祖國と自由との痛ましき喪失に對する陰鬱な記憶が日中の喧騒によりて之を雲散霧消せしめざる時最も多く夜分に於て旺盛となるからである。」而して人非人等は如何なる權利を以てこの不幸なるものの國土には近づかず、況や強奪・詐謀・暴虐に訴へて之をその國土から奪ひ去るに於てをやである。數千年來不幸なもの此の大陸は之に屬して居つたので、その父祖は最高最大の代價を以て黒人の形狀と黒人の膚色とを以て之を購つたのである。阿弗利加の太陽は之を小兒として受けつつ教化し之に刻印を與へたのである。焉くに之を齋さんとはするぞ、人泥坊として盜賊として之を奪ひ去らんとはするぞ。

第二、故に野蠻人のその國土を争ひその奪はれ又は辱められ苦しめられた子孫その同胞を争ふの戦争は残酷である。故に例へば亞米利加土人の歐羅巴人に對する執拗な憎悪となるので歐羅巴人は實に土人より圍まれて居つても土人は「爾は茲に屬するものでない、國土は我輩のものなり」と斷乎として感ずるのである。故にすべての所謂野人が假令歐羅巴人の郷寧親切なるに全然軟化されて見えても背信の舉に出づるのである。祖先傳來の民族的感情が眼覺めた最初の瞬間に永く努力して灰の下に抑へて置いた火焰は燃え出したのである。その火焰は残忍に荒れ狂ひ數々土人の齒が外人の肉を食ふまでは消え失せぬのである。之が吾人に呪詛すべきことと思はれることに就いては又實に何等の疑も存せぬのである。而も歐羅巴人は即ち野蠻人を驅つてこの暴舉に出でしめた最初のものであつた。蓋し歐羅巴人は何故にその國土に赴いたのか。何故に無理な亂暴な強大な専制君主として之に臨んだのか。數千年來其の住民は宇宙であつた。その父祖から之を繼承し且つ同時に之から残酷な風俗を遺傳した、是れ即ちその土地を奪ひ、又土地から之を奪ひ去り或は最も慘酷な方法で滅亡することを妨げんとする手段である。故に敵人と外人とは之に取つて同一である。地面に根を張つて近づく處の昆蟲を捕へるムスキブラのやうなものである。招待しない又は無禮な客を食ふの權利はその國土の租税である。例へば歐羅巴に於てはキプロープ人

の大權である。

最後に私は猶かくの如く遠ざけられた自然の子が例へばその祖國の海岸を再び眺めその郷土の膝に再び抱かれた時の悦ばしい光景を回想するのである。フリ民族出身の立派な僧侶ジョブ・ベン・サロモンが阿弗利加に歸つた時フリ人は皆兄弟のやうな熱誠を以て「奴隷の境遇から郷土に戻つて來た二度目の人」として之を迎へた。而して如何にサロモンが郷土に憧憬れて居つたことぞ。英國のすべての友誼と尊敬とは開化した思慮ある人物として感謝して之を認めたが併しその心情に溢れたのではない。歸國の船を確めるまでは落著くことが出来なかつたのである。而してこの憧憬は身分に關係があるのでもなければ郷國の便利に因るのでもない。ホツテントット人の一種コアラナ人は金屬製の鎧やすべて歐羅巴風の利器を棄てて自分の難儀な暮し方に戻るのである。殆ど何れの地方からかかざる證據は得られるので、最も不便な國土もその土民を最も強い紐を以て結び附けるのである。打破された不便は即ち青年の時から身體と精神とを之によつて陶冶した所以であるが是れ亦土民をして風土的な愛國心を誘起せしめるので、民族の殺到して居る饑饉な平原の住民は既に之を感ずること尠く、而して歐羅巴の首都の住民は殆ど最早之を感ぜぬのである。

而も今や風土と云ふ言葉を詳細に研究すべき時である。而して人類の歴史哲學に於て或ものは之に重きを置き他のものは之に反して殆ど全然その勢力を争はんとして居るから、吾人は又單に問題を提供せんとするのみである。

三 風土とは何であるか、人類上身體・精神

形成の上に如何なる影響を有するか

我が圓球の最も安定した二點は兩極である。兩極なくんば回轉もなかつた、多分圓球その物も不可能であつたらう。偕吾人にして若し兩極の起源を知り我が地球の磁力の種々の物體に及ぼす法則と作用とを解したならば、之に依つて以て自然が實體の形成に方つて後に他のより高等な力と様々に織り込む基本の絲を發見したのではないであらうか。併し澤山な立派な試みがあるに拘らずこの點に就いては大體に於てなほ知られて居ることが少いから、吾人はすべての風土の基礎を觀察するに於て亦兩極地方に關してはなほ暗黒裡にあるのである。多分他年一日磁石は天然力の世界に於ても曾て海陸共に意外の作用を齎したやうになり得るであらう。

我が圓球の自轉と太陽の周圍の公轉とは吾人に風土の詳細な區別を提供するのである。併し茲

にも又一般に承認された法則でもその適用は困難で尙違ひ易い。古人の地帯は物理上から觀察して他の大陸に就いての無識を土臺として居るのでその新知識に依つて確證されない。之と同じく寒熱に就いても太陽の光線の分量とその直射の角度とに従つて計算された。數學上の任務としてその影響は正確な勤勉を以て決定された。併し數學者自身は若し風土に就いての哲學的な修史家が例外なくしてその上に結論を立てたならば之を規則の濫用と看做すであらう。甲は海洋に接近し乙は風あり丙には陸地の高低あり、丁には附近に山脈あり戊には雨と水蒸氣と多くて一般的な法則に新たな地方的變化を與へるので、數々最も接近せる場所が正反對の風土を感ずるのである。加之何れの生物も溫度を受け入れ而して驅り出すに固有の方法を具へて居ること、實に生物の組織が有機的になればなる程、その固有な生命の活動的な方が表現されればされる程、比較的な冷熱を生ずる能力も亦益々表現されることは新しい經驗から明かである。人間は血液の溫度を越えて居らぬ風土に於てのみ生息することが出來ると云ふ昔の原則は經驗に由つて打破された。之に反して動物の體溫の起源と作用とに就いての新學説は永くなほ完成されぬので、何等かの方法に於て唯人類の組織のみに就いても風土學を考へることは出來ない、況やすべての人類の精神上の能力とその勝手氣儘な使用に就いてをやである。勿論何人も溫度が纖維を延ばし且つ弛め、

汁液を稀薄にして發汗を促し、かくて又鞏固な機關をも歲月と共に海綿質に弛緩になし得ることを知つて居る。法則は全體に於て嚴として動かぬ。又温度とその反對の寒氣から種々の生理上の現象は立派に説明された。併しかかる一原則から又は實に唯その一部分から例へば弛緩發汗から世界各地の全民族に對し實に人間精神の最も微妙な働きに就き社會の最も偶發的な制度に就きて一般的な結論を立てんと欲するならば、この結論を熟慮して相關聯せしめる學者の頭腦が聰明であり組織的であればある程、益々その結論は大膽となるのである。殆ど一步毎に歴史上から又生理上の理由からも實例を擧げて證明されるであらう。蓋し常に益々多くの而して一部は相反抗して居る力が相並んで働いて居るのである。大家モンテスキューに對してさへも、その風土學的な『法律精神論』を愚人の口舌の虚妄な經驗の上に建設したと云ふ非難が加へられた。勿論吾人は風土の掌裡に於ける塑像用の粘土である。併し風土の指は様々に捏ね上げ之に反對して働く法則も雜多なので、多分人類の天才のみがすべてこれらの力の關係を調和せしめることが出来るのであらう。

空中から吾人に影響するのは惟り寒熱のみではない。新しい觀察に従へば空氣は寧ろ有害に而して有利に吾人と相結合する他の力の大倉庫である。電氣の火の流はその動物的な勢力に於てなほ吾人に全く知られて居らぬ而も有力な實體であるが即ち空中に於て働くのである。蓋し吾人はその本性の精神的法則を知らぬのである。如何に人體が之を受け容れて之を利用するかを知らぬのである。吾人は空氣の呼吸に依つて生活する而も吾人の生命の食物なる空氣中の芳香は吾人に取つて祕密である。偕吾人にして若しその地方のすべての物體の發汗に従つて出来る殆ど名狀し得られぬ空氣の要素の様々の地方的性質を加へるならば、醫師が單に瘴癘の氣と云ふ名で呼んで居る目に見えぬ有毒な種子に因つて、如何に數々最も驚くべき數々、恐るべく且つ數千年を経て根絶し難い事物が生じたかの實例を記憶するならば、吾人に梅毒・ペスト・梅毒並びに多くの時代を掃蕩した疾病を齎した祕密な毒素を考へたならば、而して例へばヘルマツタンとかサムミールとかシロッコとか韃靼の北風とかに就いてでなく唯吾人の風の性質と影響とをも如何に知つて居らぬかを記憶するならば、すべての人間の思想力の風土學は勿論のこと生理的病理的な説明を下し得る以前に如何に多くの缺如せる準備を講ぜねばならぬことであらうぞ。而も茲にも亦各々の聰明な研究にはその花冠が授けられるので、而して後世は吾人の時代に立派な花冠を戴かせねばならぬであらう。

最後に土地の高低、土地並びに物産の性質、人面の味ふ食物飲料、その暮し方、その爲し遂げ

る労働、衣服、普通の坐作、娯樂、藝術、その他その生活上の聯絡に多く働く様々の事情はすべて多く變化する風土の繪畫に屬するのである。如何なる人間の手が能くこの原因結果の混沌たる世界に秩序を立て各個々の地方の各個々の事物その權利を許し而も何物も餘りに多く又餘りに少く之を得ること勿らしめるものぞ。唯一最善の方法はヒッポクラテスの方法に従ひ犀利な眼孔を以て赤裸々に個々の地方を風土的に觀察し次いで極めて徐々に一般的な結論を立てることである。博物學者と醫師とが茲に吾人が既に人類にとつて又子孫にとつて氣候とその影響との一般の學問に就き個々の地方の多くの貢獻を感謝せねばならぬ物理學者である自然の研究者である、哲學者の師表である。併し茲には何等特殊の注意を述べることが出来ぬから、吾人は單に若干の一般的な注意を述べて吾人の研究を進めて行かうと思ふ。

(一)我が地球は球體であつて而して大陸は海上の山であから、様々の原因に依つて生物の生命に關係のある風土の共通が地球上に於て促進される。晝夜と四季の更替とは各地方の風土を定期に變化するのみならず元素の争ひ、陸土と海洋との相互の影響、山嶽と平原との地位、球體の運動から四季晝夜の變化からその他多くの小原因から起る定期の風はこの健康を齎す元素の融合を維持するので之なくんば萬物は睡魔と腐敗とに襲はれて沈淪するであらう。吾人を圍むものは大

氣である、吾人は電氣の海のうちに生息するのである。而して二者共に永久に運動して居る、而して多分磁力の流もさうであらう。海洋は蒸發し山脈は引き寄せて雨と河流とを兩面に注下するのである。かくて風は互に交代しかくて年は又は一列の年は風土上の一日の總計を完うするのである。かくて異なる地方と時代とは互に因となり果となるのである。我が球體上に於ける萬物は互に相聯絡して居る。若し地球が平坦であつたならば又は支那人が聯想して居るやうに四角であつたならば、勿論その隅に於ては今日の井然たる組織と感應的な運動との思ひ及びぬ風土上の變態に近づき得るのである。ユピテルの玉座の左右には四季の女神が順番に踵つて居る、而して女神の足の下に形成されるものに實に單に不完全である、是はすべてのものが種々のものの滅亡の上に建設されるからである。併し内面の愛情と相互の融合とに依つて到る處に自然の兒が感覺ある方正優美が生れるのである。

(二)我が地球の住居し居られる土地は最も多數の生物が最も満足な形狀に於て活動して居る地方に集中されて居る。大陸のこの地位はそのすべての風土に影響して居る。何故に南半球に於ては寒氣が既にかくまで赤道に近く始まるか。物理學者は答へて「南半球には陸地が尠く隨つて寒風と南極の氷塊が遠くまで流れて來るからである」と云つて居る。故に若し地球の全陸地が島嶼

になつて散亂して居るならば吾人は運命の極まるを見るのである。今日は相關聯せる三大陸が互に温めて居る。第四の大陸は之から隔在して居るので又この原因から寒い、而して南洋に於ても陸地の缺乏せる爲赤道を越ゆると直ちに又畸形と墮落とが始まるのである。故に完全な獸類の同地方に住んでゐるものは少いのである、南半球は我が球體の大きな貯水池と定められたので随つて北半球がより善い風土を享けて居るのである。地理上並びに風土上からも亦人類は共住接近せる一民族であらねばならぬので、ベストや病氣や風土上の温暖その他の善根を互に贈與するのである。

(三)地球が山地として構造された爲生物の大多數に取つて風土は之を無數に變化したのみならず、なほ又防ぎ得る丈け人類の墮落を防ぐのである。山地は地球に必要であつた、併し地球上に於て唯一の蒙古人と西藏人とが山脈に屬するのみで、コルデラの峻嶺もその他の多くの友峰も住居に適しない。不毛の砂漠も亦地球の山地として構造された爲に、稀である。蓋し山嶺は蒼天の媒介者として存して居るので豊饒を來す河流としてその寶の角を傾けるのである。最後に寂寞たる渚岸、寒く又濕つた海濱は到る處に於て唯後世に出來た土地でかくて人類は又後世になつて既に十分に元氣を養成してから初めて之を占領し得るのである。確かにキートの溪谷はテラ・デ

ル・フェゴよりも早く、迦濕彌羅は新和蘭又はノヴゼムブラよりも早く、住はれて居つた。地球の最も大きな中間の地域は海と山との間なる最も美しい氣候の土地は、人類の學校であつた、而して今もなほ地球の最も住居に適した部分である。

扱風土とは植物も動物も之に貢獻し相互の關係に於てすべての生物に盡す所の力と影響との概念であるから、人間も亦技巧によつて風土を變化して地球の主人となると云ふことに就いては問題はない。人間が火を天から盗んでその腕で鐵を曲げてから、人間が動物や同胞を強制して之と植物とを自分の役に立たしめてから、種々の方法に於て風土の變化に協力したのである。歐羅巴は往時は沮洳地であつた、而して今日耕作されて居る他の地方も之に劣らざるものであつた。それが開墾されてかくて風土と共に住民も亦變化したのである。警察と技術とを缺かば埃及人はニル江の泥土と化したであらう。ニル江が征服されたので北方の廣い亞細亞に於けるが如く生物は人爲的な風土に順應したのである。故に吾人は人類を小さいが大膽な巨人の群で徐々に山から下りて地球を従へその瘦せ腕で風土を變化したものと觀察することが出来るのである。如何なる點まで人類が之を成し遂げ得るかは將來に至つて明瞭となるであらう。

(四)最後にかくの如く全然場所と歴史との個々の場合によつて定まることに就いて何等か概括

的なことを言ひ得るとしたならば私はベェクンがその著革命の歴史に於て述べた若干の章句に訂正を加へて記述して置く。風土の影響は實にあらゆる種類の物體に及ぶのであるが、併し特により多く柔軟な濕氣・空氣並びにエーテルに加へられるのである。影響は個體に對するよりも事物の全國に對してより多く及ぶのであるが、而も又全體に依つて個體に加へられるのである。影響は時刻に起るのではなくて時期の上に行はれるので數々、晩れて且つ多分些細な事情に依つて明かにされるのである。最後に風土は強制するのではなくて傾向を示すのである、その與へる性癖は目立たぬ程のものでその常習となれる民族に於ては風俗並びに暮し方の全體の描寫のうちには實に之を認めるが、併し之を記述することは困難で殊に區別して記述することは出来ない。思ふに他日旅行者は僻見なく誇張なく風土の精神を知らんが爲に旅行するであらう。今や吾人の義務は寧ろ各々の風土が爲に造られ而してその存在に因つて既に風土を種々に變化した活動の力を注意するに在るのである。

四 發生力が地球上のすべての組織の母であつて風土は單に之に對抗し又は之に援助して働くのである

始めて生物創造の奇跡を見たものは如何に驚異することであらう。小球の間に汁液が射出しその小球から生命ある一點が出来、その點から地球の生物が生ぜられるのである。纏て心臓は見えるやうになり如何にもか弱く不完全ではあるが鼓動し始めるのである。心臓の出来る以前から存して居つた血液は紅くなり初める纏て頭が見えて来る、纏て眼、口、官能並びに肢體が判然として来る。なほ未だ胸は出来てゐない而して既にその内部の部分には運動がある。なほ未だ腸は形成されてゐない、而して動物は口を開いて居る。小脳は頭の外に存し心臓はなほ胸の外に存し肋骨と脚は蜘蛛の網のやうである。纏て翼、脚、趾、腰が示され而して偕生物は更に養育されるのである。赤裸々であつたものは彼はれ、胸と脳とは鎖され、胃と腸とはなほ下に垂れて居る。これらも亦物質が益々消化されると共に結局形成される、皮膚は合して上を覆ひ下腹部も閉ざし動物は出来上るのである。今や動物は最早泳がずして横つて居る、或は目覺め或は眠る、動き眠り叫び出口を求め而してすべての部分に於て全然完備して世界の光線に觸れるのである。この奇蹟を初めて見た人は何と之を名けるであらうか。是は活動せる組織力であると云ふであらう。私はその何處より来るかも又その内部に於て何であるのかも知らない。併しその存在して居ることその生活して居ること、その同一様は物質の混沌裏から有機的な部分を占領したことは私の見る

所である、否定し難いことである。

更にこの有機的な部分の各自が云はば實際自己の作用に於て組織されて居ることを注意したならば目撃したならば、心臓は即ち以前から存在して居つた脈管の湊合に由つて生ぜられたに外ならぬ、胃腑は出現するや否や消化の材料を收容して居、その他すべての脈管すべての容器が皆さうで、中身は容器よりも前に液體は固體よりも前に精神はその外装として必然な身體の前に存在して居つたことを認めたらば、目に見えぬ力が勝手氣儘に組織したのではなくてその内部の本性に従つて云はば唯表現されたのであると云はずして何と云はれやうぞ。その力は所屬の集團に於て目に見えるやうになるので如何に何處に存在するにもせよその現象の典型を備へて居らねばならぬのである。新生物は即ち常に唯活動的のみにみ考へて居る創造的な自然の現實となつた觀念に外ならぬのである。

更に繼續してこの生物を促進するものは母體又は太陽の暖か味であり而も母體の卵はすべての物質と體温との存在せるにも拘らず父體の刺激なくば何等生命ある果實を結ばぬことを注意したならば、暖か味の原素はその促進せしめる生命の原素と實に關聯しては居るが、この有機力を活動せしめて物質の混沌たる死體に生命ある形狀を與へる原因は本來之を二つの生命ある實體の結

合に求めねばならぬと想像するの外はなからう。かくの如くにして吾人はすべての生物は形成されるのである、何れもその組織の種類に従つて異なるのであるが而もすべてのもの皆我が地球上のすべての生物に行はれて居る相類似した明かな法則に従つて居るのである。

最後に又この生活力は形成された生物を棄てずして依然としてその内面に活動的に現れて行くのである勿論最早出来上つたので創造的にはないが維持し刺激し養育して行くのである。世の中に生れ出るや否や之が爲に實に一部は之に由つて形成されるすべての生活行爲を營むのである。口は宛も之を開くのが最初の姿態であつたかの如くに開くのでかくて肺は空氣を吸ひ込むのである。聲は叫び胃は消化し唇は吸ふのである。生長し生活しすべての内外の機關は互に助け合ふのである。共同の活動と同情とに於て機關は働き初め動き初め變化し千様の驚くべき研究されたことのない方法に於て艱難に病氣に互に助け合ふのである。これらのことを初めて目撃した人は固有な發生的な生活力が之に由つて形成された生物に於てすべての機關に於てその各自に於てその流儀通りと云ふのは有機的になほ内在して居ると云ふの外何と云ふであらうか何と云ひ得るであらうか。到る處に生活力は様々に現在して居るのである、蓋し是に由つてのみ、生物の全體は維持し生長し且つ働くのである。

而して吾人はすべてこの生活力を具へて居るのである。生活力は健康に於て又病氣に於て吾人を輔佐し同様の機關を同化し異なつたものを分離し敵對するものを排斥し最後に老境になつて疲勞するが若干の機關に於て死後なほ生息するのである。吾人の心靈の理性は生活力ではない、何となれば理性は身體を知らず唯之を思想の不完全な未知な道具としてのみ使用するものであつて確に自ら之を形成したのではないからである。而も自然界のすべての力は相聯絡して居り理性はその生活力と相聯絡して居るのである。蓋し精神的な思辯は又身體の組織と健全とによつて左右されるので而して吾人の心のすべての欲望と衝動とは動物的體温と分離すべからざるものである。これらすべてのことは自然界の事實であり如何なる臆説も之を覆すことは出来ず如何なる學究的な言論も之を根絶することは出来ぬのである。之を是認せるは地球上の最古の哲學で多分又最終のものとなるであらう。私は私が考へて居ると確實に知つては居るが而も私の思辯力を解して居らぬ、私は私が生活して居ると確實に且つ感じ且つ目撃しては居るが併し生活力が何であるかは又私は解して居らぬのである。この力は天授のもので有機的で發生的である、私の自然力の根柢である、私の存在の内的精靈である。人間が地球の生物の最も完全なものとなつたのは吾人の知れる最も微妙な有機力が人間に於て組織の最も精巧な機關に内在して働いたと云ふ外には他の原因はないのである。人間は最も完全な動物的植物である、人間の組織に於ての固有の精靈である。

吾人の原則は實に争ふべからざる經驗に基いて居るのであるから是迄正鵠を得て居つたが、吾人人類の變化も亦本來この有機力によるに非ざれば行はれ得ぬのである。風土は又之に影響するのであるが何れの人類何れの動物も何れの植物もその固有の風土を備へて居る、蓋しすべての外界の影響は各自その流儀に従つて之を受け容れ有機的に之を消化するのである。微細の纖維に於ても亦人間は石のやうには感じない水泡のやうには感じない。偕この變化の若干の段階又は濃淡を注意して見よう。

人類の變化の最初の段階は外部の機關に於て示される。是は外部の機關が自ら感じ又は働くからではなくて吾人に内在せる力が内部から働くからである。最も驚くべき機制によつて内在力は妨礙となり無用となれるものを身體から驅逐せんと努めるのである。故に有機的構造の當初の變化はその領土の限界に於て目撃されねばならぬのでかくて人類の最も著しい變種は皮膚と毛髪とに於て認められるのである。自然は内部の本然の組織を保護し而して爲し得る限り不便な物質を運び出すのである。

變化を生ぜんとする外部の力が更に加はるならばその影響は生活力の自ら働くもの即ち營養生

殖の方法に於けるよりは他の方法に於ては示されぬのである。黒人も生れた時は白い、先づ第一に黒色に變色する機關は即ち外界の空氣のみが生ずる變化の毒素が發生的に働くこと云ふ明白な微證である。青春發動期と病人に對する多數の經驗とは營養生殖の力が如何に廣い領域を人體に於て有して居るか吾人に示すのである。最も隔つて居る機關も之に由つて互に聯絡して居る、而して民族の墮落に於て又共同に苦しむものは實にこれらの機關である。故に皮膚と生殖器との外には耳・頸と聲・鼻・唇・頭等が正に最も多くの變化を示す場所である。

最後に生活力はすべての機關を聯絡して協同せしめ而して組織は本來何處にも始まらなければ終もない極めて錯綜した圓周であるから、内部の力の苦惱せる爲頭の頂邊から足の先まで關係を變へるやうな最も深刻な主要な變化は結局又最も固定した機關に於ても認められねばならぬと云ふことは領會される。この變化は自然に於ても容易に行はれ難い。自然が其の技術に於て甚しく妨礙を受けた不具者に於ても亦驚くべき補償の途があるので宛も敗軍の將が退却の途上に多大の思慮分別を示すやうなものである。而も民族の千差万別の組織は人間組織に於ける最も困難な變化も亦可能であつたと云ふことを示して居る。蓋し吾人の機關の千様の組織と微妙な動作之に影響する名狀し難い様々な力と共に實に變化を亦可能ならしめるのである。併しこの困難な變化

も亦唯内部からのみ實現されるのである。數百年來或る民族はその頭を造り鼻を穿ち足を窄め耳を延ばしたのである。自然は依然としてその途を守つて居るので、永くかかる習慣が行はれて自然は其の欲せざるところの不具の機關に汁液を送らねばならなかつたとしても、一度爲し得るやうになれば自然は再び自由に働き完全な典型を完成するのである。併し畸形が發生的であつて自然の途に由つて働く場合は全然之と異なつて居る。即ち個々の機關に於てさへも畸形が遺傳されるのである。技巧や又は太陽で黒人の鼻を扁平にしたとは云はない。此の機關の組織は全體の頭蓋骨、顎頸、脊の構造と關聯して居るから、而して出芽する脊椎は云はば胸や總べての機關の其の上に形成される木の幹であるから、比較解剖學は十分に變化は全體の形狀の上に行はれ全體が變化せずしてはこれらの固定した機關は一として變化され得ないことを示すのである。故に黒人の形狀は又地方的に變り而して發生的にのみ之を還元し得るのである。ムーア人を歐羅巴に移しても舊態依然として居るが、併し白人と結婚するならば一代にして褐色の力ある風土が數百年を通じて爲し得ざる變化を來すのである。總べての民族の組織も皆かくの如くである。世界の地方は極めて徐々に變化するのみである、然るに他民族と混淆する時は數代にして總べての蒙古人、支那人、亞米利加人の特色は消滅するのである。

讀者にして若しこの途を辿ることを歴はれずばなほ暫し歩を運んで見よう。

(一)人類の形状は無數に異なつて居るが或る形式と關係とは歸來するのみならず猶又絶對的に相從屬して居ることは何れの觀察者にも注意されねばならぬ。藝術家に取つては是は確定の事實で、古人の塑像に於ては此の釣合とか對稱とか呼ばれるものが例へば肢體の長短・廣狹に於てのみならず猶又全體の心靈と肢體との調和的構造に於て示されて居ることを見るのである。古人の男神・女神・青年・英雄の性格は其の全體の姿態に於て一定して居るが爲一部分は既に個々の肢體から之を知るので、而して何れの組織にも他の組織に屬する腕や胸や肩を添へぬのである。個々の生命ある實體の精靈が此の形状の何れに於ても生息して居つて、精靈は此の形状を外裝として之に靈氣を與へ且つ姿態運動の至微の點に至るまで全體と同じやうに特徴を與へるのである。近代人では我が祖國のポリクレトスなるアルブレヒト・デュウラーは人體の種々の釣合の尺度を注意して調査したが、かくて何人の眼にも總べての機關の構造は關係に従つて變化することが明瞭となるのである。扱吾人にして若しデュウラーの正確に加ふるに古人の心靈的な感じを以てして而して人間の主要な形式と性格との相違を其の相調和せる組織に就いて研究したならば如何であらう。私にはかくて人相學が其の名稱の示す通りの昔の自然の途に由るであらうと思はれる、之

に従へば人相學は人種識別又は技藝識別の學ではなく人間の生物としての本性の説明者で云はば目撃せられる心靈の通譯であらねばならぬのである。人相學は此の制限内にあつて容貌に於て又最も多く言明される全體の類似を常に忠實に守るので診斷學は其の姉妹であり生理學と症候學とは其の助手であり友人であらねばならぬ。蓋し人間の形状は實に唯内部の衝動機關の外裝に過ぎぬので各々の文字は實に言葉であるが併し唯全體の言葉のみが意義を有して居る相調和した全體を爲せるのである。故に日常の生活に於て吾人は人相學を利用し實習して居る。熟練した醫師は人間が其の構造・組織上如何なる病氣に罹り易いかを識別する、而して人相家の眼孔は小兒と雖も亦其の組織に於て其の心靈の表現される形状に於て人間の自然の相貌を看破するのである。更に、この形式は相協力する機關のこの調和は之を記述して文字にすれば云はば字母に還元することは出来ないであらうか。これらの文字は決して完成はされない、と云ふのは又或る一國語の字母ではないからである。併し人間の本性の特徴をその主要な形状に於て示すに方つて人類の此の生命ある柱列を注意して研究することにより確かに廣い原野が開かれるのである。而してこの際歐羅巴にのみ局限せず且つ又吾人の慣用の理想をすべての健全優美の模範とせずして、地球上到る處の生物界に就いて相協力せる機關の如何なる調和に於て茲にかしこに様々に且つ常に完

全に示されて居るかを究めたならば、疑もなく人間の構造上生活力の一致と協調とに就いての澤山の発見がこの研究の報酬となることであらう。實に人體に於ける形状の自然の一致に就いてこの研究は多分今日までかくまで數、殆ど常に感謝を受けずに研究されて居る顔色並びに性質に就いての學說よりは一層の進境を見るであらう。最も銘感な観察者も今日までの研究に於て進歩を見なかつたが是は記述されねばならぬことが種々雜多であるのに之を記述する一定の字母が缺如して居つたからである。

(二) 借人類の形成變化のかかる描寫的敘述に於て生命に關する生理學が到る處に於て炬火を先頭に運ばねばならぬのであるが之に於て又一步づつ自然の叡智が認められるのである。而してその叡智と云ふのは千様に補充する慈仁の法則に従つて形式を構成し改善することに外ならぬのである。例へば何故に慈母的な造物主は種屬を區別するかと云ふに、その組織の典型を益々完全になし且つ之を維持したいと云ふ外には何等他の目的はないのである。吾人は今日の種屬の多くが如何に地球の往時の状態に於て互に相接近し得たかを知らない、併し其の限界が今日發生的に分れて居ることを認めるのである。野生の状態に於て如何なる動物も異なつた種屬と交尾するものはない、而して人間の強制的策略か又は安樂な動物の之に與る淫猥な逸樂が、又そのさなくば安

全な本能を粗野に化することがあつても、而も自然は不變の法則を守つて淫猥な策略に依つて打ち負かされないのである。即ち或は交尾は産兒を得ずして了り、或は無理な雜種は單に最も近い種屬の間にのみ殖えて行くのである。實にこの雜種に於ても吾人は組織界の最極端以外に就いては何處にも變種を認めないので、正確に吾人が之を人類の變化に就いて記述した通りである。若し組織の内面の眞の典型が畸形にならねばならなかつたとしたならば如何なる生物も生命を保つことが出来ぬであらう。故に人首馬體のケンタウロスも猿體羊足のサテロスも蛇髮のメヅウサも水怪のスキラも各種屬の創造的な本性と發生的な眞の典型の内的法則とに従つて生れ出ることは出来ぬのである。

(三) 最後に自然が之に由つてその種屬の形式の多様と持續とを聯絡する最も精巧な手段は兩性の創造と交接とである。如何に驚くべくも精巧に且つ精神的に兩親の特徴が兒女の容貌・構造に於て相混淆することぞ。宛も種々の關係にその心霊が兒女に傾注され組織の千様の自然力がその間に分配されたやうである。組織の疾病と特徴とは勿論好悪性癖さへも遺傳されることは熟知されて居る。實に永い昔に死んだ先祖の形状が家系の流から數、驚くべくも再現することがある。又之を説明するのは困難であるが母の氣分並びに身體の状態の感化が胎兒に及びその影響が多く

の悲惨な實例を一生を通じて滲らずに示して居ることは拒むことが出来ぬ、故に自然は生命の二つの流を共に導いて成立せんとする生物に全自然力を授けこの自然力は両親の特色に従つて今やその生物に於て働くのである。多くの沈淪せる種属は健全にして快活な慈母によつて再び高められた、多くの衰弱せる青年は妻女の腕に於て初めて活氣ある自然の生物として蘇生されねばならぬ。故に人類の天才的な組織に於ても亦愛は女神中の最も有力なものである。愛は人類を高尚にし沈淪せるものを再び高めるのである。神性の炬火でその炎によつて人間の生命の光は明滅はあるが輝くのである。之に反して自然の創造的な精靈に對して彼の冷酷な憎惡よりも意地悪き敵意を含める便宜ほど反抗するものは外にない。便宜は互に相和せざる人々を強制して共にあらしめ且つ自ら不和を醸せる不幸な生物を永久に存せんとするのである。如何なる動物もその墮落に於て人間の沈淪するほど甚しく沈淪するものはないのである。

五 發生と風土との争に就いての最後の意見

私が間違つて居らぬならば上文に於て少くも暗示的に云はれたことによつてこの争の梗概に就いての分界線は引き始められたのである。例へば何人も風土を異にしたならば薔薇が百合に犬が

狼になるであらうと望むものはないのである。蓋し自然はその種属に正確な限界を立てて生物の組織を眞に攪亂し若しくは墮落せしめるよりは寧ろ之を滅亡せしめるである。併し薔薇が變種し得ること犬が稍々狼のやうになり得ることは歴史の示現で而して又茲にも變化は之に對抗して働く有機力に及ぼす緩急ある威力によつて行はれるの外はないのである。故に相角逐する二つの力は大きな働を爲すのであるが、唯何れも固有な方法を以て働くのである。風土とは混沌として居る幾多の原因を併せたものでこれら原因は互に極めて異なつて居りかくて又徐々に且つ様々に働くのであるがかくて結局内部に侵入し習慣と發生とによつて之を變化するのである。生活力は永く強く一様に而して唯之に劣らず抵抗するのである。而も生活力は外部の變化から獨立して居るのではないから歲月と共に又之に順應せねばならぬのである。

故に私は更にこの争に就いて概論を續けずして寧ろ地理・歴史の範圍が大收穫を提供して居る細目に就いての有益な研究を望むものである。例へば吾人は何時葡萄牙の植民が阿弗利加に彼の西班牙・和蘭・英吉利・獨逸の植民が東印度並びに亞米利加に移住したか、その或ものには於ては歐羅巴人の依然たる暮し方が如何なる影響を生じたか等のことを知つて居る。これらすべてを仔細に研究したならば次には古い時代の移住がある、例へば馬來人は群島地方に亞刺比亞人は阿弗利加

並びに東印度に土耳其人はその征服した國土に移住して居る、更に次には蒙古人・鞏靼人があり最後に民族の大遷徙に際して歐羅巴に汎濫した民族の群衆がある。何處に於ても如何なる風土から民族が来たか、暮し方を齎し來つたか、如何なる國土を目前に見出したか、如何なる民族と相混淆したか、如何なる革命をその新住地に於て體驗したかを忘れては居らぬ。この研究的計算が若干世紀を通じて繼續されたならば吾人が僅かに古代の學者の報道により又は神話と言語との一致によりて知れる更に古い民族遠征に對して多分その秘鑰を探り得るであらう。蓋し地球上のすべての民族でなくとも而も多數の民族はその根本に於ては早くか晚くか移住したのである。かくて吾人は一目瞭然たる若干の地圖を以て人類の血統並びに風土と時代とに由れる變化に就いて地文學的な歴史を得るであらう、而して是が一步づつ最も重要な結果を與へねばならぬのである。

この仕事に着手するに必要な研究的精神を以て自任するのではないが私は近世史から若干の經驗を擧げて置く、私の豫備的研究の小さな例である。

(一)全く相反した半球並びに風土へと餘りに迅速に急激に移住することは民族の健康に有利なことが稀である、蓋し自然は徒らに最も遠隔せる地方の間に限界を立てたのではない。征服並びに通商會社の歴史は併し殊に傳道布教の歴史は若しこの事件とその結果とを唯に移住者自身の報

告からのみ又公平に摘出したならば悲惨な而して一部は滑稽な畫面を示さねばならぬであらう。多くの歐羅巴の民族が傍若無人な淫樂と無情冷酷な尊大とに沈淪して如何に身體・精神共に墮落して歡樂と憐愍とに對する元氣をも最早備へて居らぬかの報告を讀んでは顛へ上るほど恐いのである。即ち脹れ上つた人面の怪物で高尚活潑な快樂は道れ去りその脈管には復讐的な死が潛行して居るのである。扱更になほ兩印度が折り重つてその墳墓となつた不幸のものを數へたならば、英吉利・佛蘭西・和蘭の醫師が記述した他の大陸の疾病の歴史を讀んだならば、而して更に敬虔な傳道師が數々、その僧派の衣裳を脱し歐羅巴風の暮し方を棄てることを欲せなかつたことを目撃したならば如何に教訓的な結果が吾人に迫り來ることぞ、而して是れ亦惜しむらくは人類の歴史に屬するのである。

(二)歐羅巴の勤勉を備へた植民と雖も他の大陸に於ては最早風土の影響を變化することは出來ぬ。カラムは「北亞米利加に於ては歐羅巴の種屬は歐羅巴に於けるよりも早く成年に達する而も又早く老境に入り死亡する」と述べて居る。その言葉に「小さな兒童が尋ねた問題に對して驚くほど活潑に迅速に答へ而も又歐羅巴人の年齢に達せぬものを見るのは珍しいことではない。亞米利加に生れた歐羅巴人に取つては八千歳又は九十歳は稀な例であるが、而も最初の住民は數々高

齡に達したものがあつたのである。歐羅巴に於て生れたものも亦一般に亞米利加に於て歐羅巴人の兩親から生れたものよりも多く長命である。女子は早くから或者は既に三十歳から兒女を生まぬやうになる。又すべての植民に就いて注意されることは何れに於て生れたものにせよ早く又はその時の來ぬうちに齒を失ふことで、亞米利加人は最後まで美しく白く完全に之を保つて居る」と見えて居る。この事柄を昔の亞米利加が自己の兒女の健康に對して不利であつた爲であると云ふのは正しくない、唯他所者に對してのみこの繼母は残酷であつたのでカルムも亦云つて居るやうに組織と暮し方の異なつたものがその膝に於て生活したのである。

(三)人間の技術は奮然敢行して森林を伐り倒して土地を耕作したならば他の大陸を一舉にして歐羅巴のやうに改造することが出来るとは考へない、蓋し生物の全體は互に相關聯して居るので慎重に變化を來さねばならぬのである。同じカルムは亞米利加在住の老瑞典人の口から、急激に森林を剝絶し土地を耕作すると、さなくば水上に林間に無數群を爲して居つた食用鳥類や、さなくば大河細流に群集して居つた魚類や、湖水・溪流・泉水・河流・雨水・森林に繁茂した丈の高い雜草等が頗る減少するのみか、なほ又森林の根絶は年齢・健康・四季に影響するやうに見える」と報道して居る。カルムの言に従へば「歐羅巴人渡來の頃百歳以上の高齢に達した亞米利加人は

今や數々父祖の年齢の半ばに達せぬものがある。之に對して責任を負はねばならぬのは人類を滅ぼすブランドイと暮し方の變化とのみではない、多分又朝な夕なに宛も花園に居るやうに芳香を放つた澤山な香氣の高い雜草と元氣のよい植物を失つたことも數ふべきであらう。その當時は冬は時が一定し嚴しく健全で且つ變化がなかつた、今や春は晩れて來り而して四季一般に極りがなく變化が激しくなつた」とカルムは述べて居る。而してこの報告は地方的に制限されたものであるとしても而も常に自然は人間の爲し得る善事に於てさへも國土の開墾に於てさへも餘りに亂暴な變化を好まぬことを示し得るのである。墨是哥、祕露、バラグアイ、ブラジルに於ける所謂開化せる亞米利加人の衰弱は、就中又歐羅巴人の性質を與へ得ず又欲せずしてその國土と暮し方を變化したと云ふことに由來するのであるまいか。森林中に於て父祖の流儀で生活して居るすべての民族は大膽で強壯である、その樹木の如く老いてなほ且つ綠色である。耕作された土地に濕氣ある陰地に養成されたものは悲惨にも枯死する、心靈と勇氣とは森林中に停まつて居るのである、例へばドーブリツホーフアーが粗野な状態から引き上げた寂しく榮えて居つた家族の感傷的な話を讀んで見るに、母と娘とは聽て死んだが後に残つた男兒は即ち娘の同胞で永く夢中にも兩人を呼び遂に苦痛も病氣もなく眼を閉づることになつたのである。曾ては勇敢で大膽で熱誠であ

つた民族が如何にして暫時の間にバラグアイの耶蘇僧徒や秘露の旅行家が記述するやうに、讀者をして苦痛を感ぜしめる程弱くなるか出来るかは唯是に依つてのみ理解されるのである。數百年の結果として或る場所に於ける自然のこの峻烈は、その到る處に於て可能であるや否やは私的の又實に疑ふ處であるが、善い影響を生じ得るのである。併し最初の人類に取つては耕作者としても亦教化を受けるものとしても是はさうでないやうである。蓋し自然は到る處に於て生物の全體であつて、穩に追隨して改善することが出来るが併し暴力を以て支配することは出来ない。突然歐羅巴の首都の難路中に齎されたすべての野人は一としてものになつたものはない。その置かれた燦爛たる塔頭にあつて再びその平原に憧憬し、而して多くは見苦しく且つ衰弱して今やまた氣の抜けた昔の暮し方に戻るのである。粗野な風土を歐羅巴人の手に依つて無理に改造することも亦之と同じである。

嗚呼ダイダロスの子等よ、地球上に於ける運命の獨樂よ、人間らしい儉約な方法で民族に幸福を示す爲に如何に多くの才能が爾の掌裡に存することぞ。而して高慢に頑迷な利慾の念が殆ど到る處に如何に爾を他の途に誘はんとはするぞ。すべての外國から渡來したものも能く土民に民族化することを解するものはその愛情と友誼とに溶するのみか結局その地の風土的生活方法が全然

不都合でないと言ふことを認めるのである、併しかかるものは如何に乏しかつたことぞ。歐羅巴人が土著民から「吾人のやうに譯の解つた人間だ」と云ふ譯辭を受けることは如何に珍しかつたことぞ。而して自然は人間の之に加へた何れの罪惡にも復讐しなかつたことがあるか。異種の民族が遠い外國に唯掠奪しつつ又劫掠しつつ接觸するも前代の征服や市場や入寇は焉くに存するか、風土の静寂な呼吸は之を防ぎ又は之を遣ひ果さしめるのである、而して根のない木に最後の壓迫を加へるのは土民に取つて容易なことである。之に反して天則に順應してゆく静寂な植物は長く生くるのみかなほ又好意を以て文化の種子を新たな土地に傳播するのである。吾人の精靈が他の風土に對し又他の風土が吾人の精靈に對し之を利したか又は之を害したかは次の千年間に之を解決することが出来よう。

第八卷

私が今人類の組織や自然力の次にその精神に轉じ而して我が廣い渾圓球上に於ける精神の變化常なき性質を他人の缺陷ある而して一部は不確實な報告から敢てへ研究せんとするのは宛も海洋の波浪を棄てて航空を試みるとすると同じやうなものである。純正哲學者には之は容易なことで先づ心靈の概念を確定して置いて而して何處に且つ如何なる状態の下にあるにしても之から展開せしめ得べきものである。然るに歴史哲學者に於ては根柢に置き得るものは抽象ではなくて歴史のみである。而して無數の事實を聯絡して少くも若干の概括論に満足せぬならば間違つた結論に陥る危険があるのである。而も私は航路を求めて船舶を以て航海せず寧ろ近海を游弋する、換言すれば私は確實な若しくは確實と認められた事實を遵守して私の想像を之と區別し而して之をより能く整理し且つ役立てることは後の學者に一任するのである。

一 人類の官能の働は組織と氣候とに従つて
變化する、併し到る處に於て人間の官能
の使ひ方は人道に歸著せしめるのである

すべての民族は例へば白血病患者を除けば人間の五官又は六官を備へて居る、デオドオロスの無感覺な人間とか又は嚙啞の民族とかは近世の人類の歴史に於ては作り話である。而も又外部の感覺の相違を唯吾人の間に於てのみ注意し次いで地球のすべての風土に生息して居る無數の群衆に就いて考へたならば、吾人は波浪重疊して際涯なき大洋に面したるが如き思を爲すであらう。何人も互に自己の尺度を具へて居る、云はばすべての官能的感情の自己の氣分で、かくて非常の場合に於ては數々最も驚くべき意見が發表されるので或人がこの事件又は彼の事件に就いて爲す通りである。故に醫師と哲學者とは既に特色ある奇怪な感覺即ち個人的好惡の完全な蒐集を試みたがそのうちには數々説明し難い程珍しいものがある。概して吾人は之を唯病氣に際し又は非常な事變に於て認めるので日常生活に於ては注意せぬのである。言語は又之に對して何等の稱呼を有たぬ、何となれば各人は實に唯自己の感覺に従つて且つ語り且つ理解するので隨つて異なつた組織

にはその異なる感情の共同の尺度が缺如して居るのである。最も明晰な官能たる視覚に於てさへもこの相違は遠近に於てのみならずなほ又物の形状色彩に於て現れるのである。故に多くの畫家は各自その特色ある輪廓に於て而して各自殆ど色彩に於て固有の色合を以て畫くのである。人類の歴史哲學はこの大洋を汲み盡すことは到底出来ない、唯若干の著しい相違を擧げて吾人の環境に於ける微妙な相違に對する注意を促すのみである。

最も普遍的な最も必要な官能は感情である。感情は他の官能の基礎で人間にありてはその最大の有機的長所の一である。感情は吾人に安逸と發明と藝術とを贈つた而して吾人の思想の構成に際して多分吾人が想像して居る以上に貢獻して居るのであらう。而もこの機關が又人類の間に於て如何に甚しく異なつて居ることぞ。蓋し生活方法、風土、使用・練習最後に身體の發生的刺激は之を變化せしめるのである。例へば或る亞米利加の民族では無感覺が女子に於ても且つ最も苦しい手術に於ても認められるが是は皮膚の爲であると云はれて居る。この事實が若し眞實であるならば之は身體並びに心靈の状態から説明されるものと私には思はれる。即ち數百年來この大陸の多くの民族はその裸體を峻烈な空氣と激しく刺す昆蟲とに曝したので之を防ぐが爲に強烈な香油を之に塗つたのである。又皮膚の抵抗力を弱くする毛髮は之を抜き取つたのである。辛い粉類と

アルカリ性の根や雜草がその食物であつた。消化機關が如何に感覺ある皮膚と正に相感應して居つたかは熟知されて居る。故にこの官能は全然多くの病氣に罹らぬのである。大食して飽くことを知らず次いで又最も烈しい飢饉に堪へることも又その無感覺によつて證明されるやうに思はれる、この無感覺は又その多くの病氣の兆候であつて又その風土の長所であると共に短所であるのである。自然は次第に無感覺ならしめて難澁に對して之を武装したので若し感覺が鋭敏であるならば難澁に堪へることは出来ない、而してその技術は自然に順應したのである。北亞米利加人は名譽の原則により英雄的な無感覺を以て難澁苦痛を忍ぶのである。即ち青年の時からかく教化されるのでこの點に於ては女子も何等男子に譲る所がなく身體の苦痛に對するストア的な冷淡は又習ひ性となり、而してその淫慾に誘惑すること少きと而もその他に於ては自然力の活潑なると、又多くの桎梏の下に呻吟せる民族が半醒半睡のうち陥るが如き瀕死的な無感覺はこの原因から生じて来るやうに思はれる。故に人間の感情の更に大きな缺陷から自然が緩和的慰安として與へた缺陷を或は亂用し或は慘ましくも試めすいは人道を解せざるものの所爲である。

寒熱共に強度なるに於ては外面の感覺を焦し又は麻痺することは經驗に由つて居る。跣足の儘で砂漠を歩む民族の足の裏は鐵の金具にも堪へるやうになる、而してその或ものは二十分間も燃

える石炭の上に我慢したと云ふ實例もある。腐蝕力ある毒は皮膚を變形することが出来るので手を融解した鉛のうちに浸して置くやうになる。而して麻痺を起す寒氣も又憤怒も又他の感情の運動も又感覺の鈍化を來すのである。之に反して最も微妙な感覺は皮膚の最も優しい緊張と感覺神經の云はば旋律的な傳播とを促すやうな地方と暮し方とに存するが如く思はれる。東印度人は多分官能的機關の利用に於て最も精巧な生物であらう。その舌は決して醜酔した酒や強烈な食物の味で麻痺されることはなく清水の極めて些々たる副味をも味ふのである。その指は最も繊細優麗な作品を模倣して造り人をして原品と模品とを區別し難からしめるのである。その心靈は決活靜寂にして感情の優しい反響で附近のものを唯靜かに動かすのみである。宛も白鳥の周りに波浪が戯れ、春の軟い若葉が風があののぐやうである。

暖く優しい地方以外では何物も清潔・節制・運動ほどこの高尚な感情に大いに貢獻するものはない。これは人生の三美德で吾人が未開であると稱して居る多くの民族も之に於て吾人を凌駕するが、殊に美しい地方の民族に固有のものであるやうに見える。口腔の清潔、度々の入浴、野外運動の實行、身體の健全にして愉快な摩擦伸長は羅馬人にも知られて居つたが印度人・波斯人その他附近の多くの韃靼人によつても猶普通に行はれて居つて、汁液の循環を助け且つ肢體の彈力

性を維持するのである。最も豊富な地方の民族は節制して生活して居る。神經の自然に反した刺戟と汁液の日々の浪費とが快樂となり得るもので人間が之が爲に造られて居ると云ふ概念を有して居らぬ。婆羅門の種性は世界の當初の祖先以來肉をも酒をも味はない。掘動物に於て此の食料が全體の感覺組織に如何なる感化を及ぼすかと云ふことが認められるので、この感化はすべての組織の最も精巧な花たる人類に於ては如何に強く働かねばならぬであらう。官能的享樂の節制は疑もなく千の博學な技巧的抽象論よりは人道哲學のより有力な方法である。野蠻な状態又は苛刻な風土に於けるすべての感覺粗野な民族の大食なのは後になつて數、飢えねばならぬからである。又概して手當り次第のものを食ふのである。より精巧な思想を有する民族は又より精巧な快樂を好むのである。其の食事は簡單であつて而して日毎に同一の食物を喜ぶのである。併しその代り淫蕩的な香油、精巧な芳香、華麗快樂を好むが殊にその娛樂の花は肉慾的な愛情である。單に機關の精巧なることに就いて云ふならば何處に長所の存するやに就いて何等の疑はない。蓋し上品な歐羅巴人は何人もグリーンランド人の獸脂魚油の食物と印度人の藥味とに就いて選擇せぬのである。而も吾人の言葉の上の文化は兎に角吾人は大體から云つて兩者何れに近きやと問ふことは出来るであらう。印度人は感激なき靜寂を以て妨礙を受けずに歡樂愉悅を味ふことを以て幸福

となして居る。印度人は快樂を呼吸し甘い夢と快い芳香の海に泳いで居る。之に反して吾人の豪奢は之がために總べての大陸を攪亂し且つ掠奪して居るが何を望み何を求めるのであるか。鈍くなつた舌に鋭い新香料を一杯混合して數、一度に味ふことの出来ぬ他國の果物と食物とを、吾人の精神と安息とを奪ふ銘酒する飲料を、吾人の天性を刺戟して破壊し得るものを、吾人の生活の日々の大目的として居るのである。之に依つて身分・階級が區別されるのである、之に依つて民族は幸福になるのである。幸福になるのであらうか。何故に貧者は飢えるのか而して額に汗して努力し馬鹿になつて最も不幸な生活を營まねばならぬのか、大官と富豪とが趣味もなく而して多分永久にその野蠻性を養成せんと日々精巧な方法でその官能を鈍くする爲である。印度人は「歐羅巴人はすべてのものを食ふ」と云うて居る、而してその微妙な嗅覺は既に歐羅巴人の汗を嫌ふのである。印度人はその思想に従つて之を最も甚しく輕蔑して何物でも食うても可いと許されて居る排斥された種姓と同階級のものと同認める外はないのである。多くの國に於て又回教徒は歐羅巴人を不潔な動物と呼ぶが必ずしも宗教上の憎惡からのみではない。

自然が舌を吾人に授けたのはその若干の疣狀突起が吾人の努力的な生活の目的となり又は全く他の不幸の苦痛となる爲であるとは思はれない。自然が美味の感覺を以て之を被うたのは一部は

之に依つて猖獗な飢餓を靜めるの義務を甘くしかくて愉快な紐を以て困難な勞働に吾人を引き寄せる爲である。併し又一部はこの機關の感覺は吾人の健康の検査的番人とならねばならぬのである。而してすべての豪華な民族は疾くに之を失つたのである。牛は何が滋養あるかを知り臆病な警戒を以て雜草を選択する。有毒有害なものには觸れぬが間違ふことは稀である。動物に伍して生活して居る人間は動物のやうに食料を區別することが出来る、一度人間に伍することの識別を失ひ彼の印度人の如く、その質素な食物を棄てて純粹の趣味を失ふのである。健全な自由の境界に生活して居る民族はなほ多くのこの官能の指導を受けて居る。その國の果實に就いては決して間違はず、間違つても稀である。實に北亞米利加人は嗅覺によつてその敵をも嗅ぎ出すのである。而してアンチール人は之に依つて異なれる民族の足跡を區別するのである。故に人間の最も官能的な動物的な力と雖もその構成され練習された後に發達し得るのである。而もその最上の構造はすべてが眞に人間の生活方法を全うするやうに釣合を保ち何物も支配せず何物も喪失せられざることである。但しこの釣合は國土風土を異にする毎に變化する。熱帯地方の住民は粗野な趣味を以て吾人につけては甚だしく嘔吐を催すが如き食物を口にすることが蓋しその體質が興奮劑として救治藥として之を要求するのである。

最後に視覚と聴覚とは最も高尚な官能であつて人間は既にその組織的構造上主として之が爲に造られて居るのである。何となれば人間に於てはこれら官能の機關がすべての動物よりも精巧に構成されて居るのである。多くの民族は如何に鋭敏に眼と耳を發達せしめたぞ。カルムック人は歐羅巴人の肉眼では認められぬ處に煙を見るのである。神經質な亞刺比亞人は靜寂な砂漠に於て遠方に物音を聴くのである。扱この鋭敏にして精巧な官能の行使に加ふるに同時に擾亂されぬ注意を以てする時は多くの民族は數々些細な練習に由つて又如何に練習せぬものとの距離を大ならしめ得るやを示すのである。狩獵民族はその地方の一木一草を知つて居る、北亞米利加人は決して森林中に途を失ふことはない。數百哩の長き敵を追跡して自分の小屋に戻るのである。ドープリッホーファーの話に従へば「教養あるクアラ人は驚歎すべき程正確にその目前に置いた精巧な手藝上の作品をすべて模倣するが、併し聴覚から又は記述した言葉からは考へることも出來ず又何物をも工夫することも出來ない。」これはその教育の自然の結果で、蓋し精神を教化するに言葉によらずして目前にある看取される事物を以てするのである。然るに言葉によつて學んだ人は數々餘りに多く聴いたが爲に目前にあるものをも最早見ることが出來ぬのである。自由な自然人の心霊は云はば目と耳との間に分れて居つて、見たものを正確に知り聴いた口碑を正確に語るのでは

る。その矢の外れぬ如くにその舌は吃らぬのである。蓋しその心霊が如何して正確に視且つ聴いたものに於て間違つたり吃つたりすることがあらうぞ。

幸福と悟性との最初の萌芽が實に唯官能的な感覺から出芽する生物に取つては自然は善く整つて居るのである。吾人の身體が健全であるならば吾人の官能が練習されて能く整つてゐるならば歡樂と内面的滿悅との基礎は存して居るので、之を喪失した時如何に思辯的理性を以て努力しても補充は出來ぬのである。人間の官能的幸福の基礎は到る處に存在して居つて、その生活して居る處に生活しその目前にあるものを樂しみ後悔したり取越苦勞をせずともよいのである。この中心點を確守して居るならば完全に活氣を備へることが出来る。併し若し現在のみを考へ之を樂しみつつその思想が彷徨ひ出したならば、如何に煩悶して意氣沮喪し而して自分の幸福のみを狭く考へて居る動物よりも更に不幸な生活を送ることぞ。拘はれざる自然人の眼は自然を諦視して既に知らずにその外貌を見て活氣附くのである。又その業務に辛勞し四季の變化を樂しみつつ高齡なほ且つ老衰せぬのである。不完全な思想によつて擾亂されず文字の符牒によつて迷はされずして耳は其の聴く所のものを完全に聴くのである。談話が一定の事物を示す時精神は幾多の聲の如き抽象語よりは之に満足して吞み込むのである。野蠻人は満足してかくの如く死するので、その

官能の授ける質素な快樂に飽きることはない。

併し自然は更に又人類に有益な贈物を授けた、と云ふのはその思想の最も缺乏して居る機關に精巧な官能の働の最初の芽たる刺戟性の音樂を拒まぬのである。小兒は談話の出来る以前に歌が出来少くも歌の節に誘惑されるのである。かくて未開民族の間に於ても亦音樂は精神を動かす最初の美術である。眼に訴へる自然の繪畫は種々に變化し且つ壯大であるので之を模倣せんとする趣味は長く迂路つき廻り正しい釣合を學ぶ以前に醜怪にして奇怪な野蠻な試を爲さねばならぬのである。併し音樂は如何に簡單で素朴であつてもすべての人間の心に訴へるので舞踊と共に地球上に於ける自然の一般的快樂である。唯遺憾なことには多くの旅行家が餘りに優雅な趣味から外國民族のこの小供らしい音樂を顧みぬことである。音樂家に取つては無用のものであるかも知れぬが人道の研究者に取つては有益な資料である。蓋し一民族の音樂はその最も不完全な調子の俗曲に於ても亦その内面の性質を示すので、この感覺的機關の本來の氣分は外部の偶然の出來事の長文の記事が之を描寫し得るよりは深刻で且つ真相を穿つて居る。

且つ又私が人間の全體の官能の働をその種々の地方に就いて幕し方に就いて調査すればする程私は益々自然が到る處に慈母として現れて居ることを見出すのである。機關が満足され得ない場

合には又之に刺戟を與ふことも尠く數千年間穩に之を眠らしめて居るのである。自然が機關を精巧にし且つ開放する場合には又之を十分に満足せしめる手段を備へたのである。故に全地球は人類の各々の抑制された又は發展された組織を以て調和せる管絃樂の如く響くので之に於てすべての音調が試みられ又試みられるであらう。

二 人類の想像力は到る處に有機的で且つ風土的である、併し到る處に傳統に由つて導かれる

吾人の感覺の範圍外にあるものに就いて吾人は何等の概念もない。暹羅の或る國王が氷と雪とを實物にないと云つたと云ふ話も澤山の場合に於て吾人自身の話である。故に何れの土著の官能を具へた民族もその概念に於ては又その地方に局限されて居る。若し全然外國に就いて述べた言葉を理解したやうな態度に出ても、永くその内面の理解を疑ふべき原因があるのである。

正直なクランツの言に従へば「グリーンランド人は歐羅巴に就いて何か物語るもののある時は喜んで之を聴く併し比較を取つて之を明瞭に爲さねば之に就いて何物をも理解することは出来ぬ。例へば都會も田舎も澤山の住民があつて澤山の鯨も到底一日の食糧と爲すに足りない、併しその

食ふものは鯨ではなくて草の如く地上に生ずる麵包と又角のある動物の肉で、而して大きな強い動物の背に乗つて運ばれ又は木製の臺に坐して之に牽かせると話す。そこでグリーンランド人は麵包を草、牛を馴鹿、而して馬を大きな犬と呼びすべてに感服してかかる美しくして豊饒な國土に住みたいやうな氣になるが、結局歐羅巴には雷鳴が多く海豹が居らぬと云ふことを知るのである。又その迷信的な小説を駁撃さへせねば好んで神と神に關した事柄を喜んで聞くのである。茲にこのクランツに由つて神學の短い教理問答を造り歐羅巴の問題に就いてもその視界と異なつては答へることも考へることも出来ぬことを示して見やう。

問、何人が汝の見る天地萬物を造つたか。

答、私達は知らぬ、その人を知らぬ。極めて有力な人があらねばならぬ、又實に常にかくの如くであつた將來もかくの如くであらう。

問、汝に又靈魂があるか。

答、あります。靈魂は滅かすれば殖えることも出来る。我等のアンゲコックは之を補ふことも繕ふことも出来る。之を失つた時は之を回復し病氣の時は兎・馴鹿・鳥又は小兒の清新にして健全な靈魂と代へることが出来る。吾人が遠い旅に出た時數、吾人の靈魂は家に残つて居

る。夜中眠に就く時靈魂は身體からさ迷ひ出し獵に行き踊りに赴き訪問する、而して身體は健全に存在して居る。

問、然らば靈魂は死んでから何處に居るか。

答、その場合海底の極樂に往く、そこにはトルンガルスクとその母が住んで居る、當夏の國で美しく太陽は輝き夜はない。水は亦上等で鳥や魚や海豹や馴鹿は澤山に住んで居つて骨を折らずに捕へることが出来る然らざれば大きな釜に煮てあるのを見出すのである。

問、それですべての人間がそこに往くか。

答、そこには唯善人のみが往く、善人とは勞働に適し大事業を爲し澤山の鯨と海豹とを捕へ多く艱難に堪へ又は海中に溺死した者生後問もなく死んだもの等である。

問、何うしてそこに往くか。

答、容易でない、鮮血の附著して居る粗い岩の上を五日又はそれ以上這うて降りて往かねばならぬ。

問、併し汝は彼の美しい天體を見ぬのか。吾人の將來の場處は寧ろ彼處にあるのではなからうか。

答、高く虹の上に至高の天にも亦樂園がある、彼處に赴くのは容易に且つ迅速であつて靈魂はなほ同じ晩にグリーンランド人であつた月の世界の自分の家に憩ひ他の靈魂と共に舞踏會を催して踊ることが出来る。靈魂のこの舞踏會が彼の北光である。

問、而して天ではその外に何を爲すか。

答、大きな湖畔の天幕に住んで居る湖には魚類や鳥類が澤山に居る。この湖水が溢れると地球の上に雨が降るのである。一度その堤防が決潰すると一般の罪惡の洪水となるのである。併し大體に於て役に立たぬもの穢れたもののみが天に往き勤勉なものは海底に往く。天に往いた靈魂は數、飢えねばならず、瘦せて元氣が無い、又天が速に廻轉する爲に全然休息することが出来ない。惡黨と魔女とは天に往き鳥に苦しめられるがその髪の毛から之を遠ざけることが出来ない。

問、人間の起りに就いては如何信ずるか。

答、最初の人間はカラクと云ひ地面から出て来た、戀てその母指から妻が出来た。初めにグリーンランドの女子を生み次にカブルネット即ち外國人と犬とを生んだ。故に外國人は犬のやうに淫亂で澤山子を生む。

問、それで世界は永久に續くか。

答、既に一度世界は顛覆されてすべての人が溺死したことがある、ただ一人助つて杖を以て地面を打つたら女子が出て来た、そこで二人は又地球の人口を殖やした。今や世界はなほ支柱に支へられて居るが併し支柱は既に老朽して居るので數、ガタガタする。故に若しアンゲコックが常に之を修理せぬならばとくに倒れたであらう。

問、併し彼の美しい星を何と思ふか。

答、星は皆曾てグリーンランド人であるか又は動物であつて特別の事情によつて彼處に赴いたのである。而してその食物の相違によつて或は蒼白に或は紅く輝くのである。彼の相接近して居るのは二女子の互に訪問したのである。此の飛ぶが如き星は訪問の爲に旅して居る靈魂である。この大きな星(大熊星)は馴鹿である、彼の七星は一匹の熊を驅る犬である。これら(オリオン星座帯)は海豹の獵に出て家に歸ることが出来ず星の方に赴いた失踪者である。月と太陽とは肉親の同胞である。妹のマリナは兄に暗闇に追ひ込まれた、身を以て免れんと出奔し天上して太陽となつたのである。アニングは之を追うて月となつた、月は常になほ處女の太陽を捕へんことを望み之を追跡して止まぬが併し徒勞である。月は疲勞困憊して最後の週間には

海豹の痕に赴き暫く不在するが再び肥満して戻つて満月の姿となるのである。月は女子の死するを喜び太陽は男子の死に於て満足するのである。

私がかく多くの民族の空想を次々に記しても何人も私に感謝せぬであらう。何人にもあれ我が地球を圍んで居る虚榮心の眞の休息所たるこの想像界を踏破しよう云ふ考のものがあるならば、私は之に冷静な觀察の精神を以て先づ符合と血統とに關するすべての臆説を脱却して到る處に於て唯自分の郷里に在るが如くにして且つ又同胞のあらゆる愚な行爲から教訓を得んことを望むものである。私の記述せねばならぬものは空想に富んだ民族のこの活躍せる冥界から得た若干の一般的觀察である。

(一) 到る處に風土と民族とが、之に現れて居る。グリーンランドと印度、ラブラントと日本、祕露と黒人の神話を共に比較して見よ。空想に耽る精神の完全な地理學となるのである。婆羅門はアイスランド人のフォルスバを讀み且つ説明するのを聞いても何等の畫面を考へ出すことは出来ないであらう。アイスランド人は同じく吠陀を理解することは出来ぬ。何れの民族もその考へ方を深く銘記して居るが是は其の固有のものでその天地と關係を有し、その暮し方から出て父祖から遺傳して居るからである。外國人の最も多く驚異するものは最も明瞭に理解して居ると信じて

居るもので、外國人の一笑に附するものは極めて眞面目に考へて居る所である。印度人は人間の運命はその腦に記されてあつてその微妙な文字は運命の書の讀み難い文字を示して居ると云つて居る。民族の最も勝手氣儘な思想・意見は數々かかる腦裏の繪畫である。身體並びに精神と最も鞏固に關聯した空想の織り物である。

(二) 之は何に由來するか。これらの人類の群は何れもその神話を考へ出してその財産なるかの如くに之を愛重するのであるか決して左様ではない、之に於て何物をも考へ出したのではない、之を繼承したのである。若し自己の沈思熟考によつて拙劣なものを改善し得たであらう。併し何處にもさう云ふ實例がない。ドーブリッツホーファーが勇敢にして且つ伶俐なアピボネ人の全體の群に就いて述べたやうに、魔術使が自ら虎に變つて見せるぞと威嚇すると滑稽にも之を怖れ且つその爪を感ずるが如くに想像するのである。ドーブリッツホーファーは之に向つて「爾は日々野外に於て何の怖れることなく眞の虎を平げて居る、何故に實際居らぬ想像の虎に對してかくも卑怯にも色を失ふか」と問うた。勇敢なアピボネ人は答へて「師父は我等のことに就いては毫も眞實な概念を抱かれぬのである。野外の虎を我等の怖れぬのは我等は之を努力なく屈服するからである。併し想像的な虎は實に之を見ることが出来ず隨つて又之を殺すことが出来ぬから我等をして

心配せしめるものである」と云つた。茲に結び目が存して居ると私には思はれる。概念が眼から得る概念のやうに明晰であつたならば、視覚の對象から得て之と比較し得るものの外には何等他の想像を起さなかつたならば、瞞著と誤解との源泉は之を塞ぐことが出来ないまでも少くも忽ちに之を認めるであらう。併し民族の多くの空想は聽官と談話との女兒である。無智な小兒が好奇心を以て聽く物語は母乳の如く、又父親の神酒の如くその心靈のうちに流れて之を養ふのである。物語はその見たものを説明するやうに見えるのである。青年には之に依つて一族の暮し方に關し又父祖の名譽に就いて報道を與へ、壯者を民族的に且つ風土的にその職業に親ましめ、かくて又物語は全生涯と分つべからざるものとなるのである。扱グリーンランド人とツングース人とは一生を通じて實に小兒の時に物語に聞いたもののみを見るので目撃せる眞理として之を信ずるのである。故に月蝕・日蝕に際して多くの最も遠隔せる民族に臆病な習慣があるのである。故に空氣・海洋その他すべての原素の靈に就いて恐怖的な信仰があるのである。空中に何等かの運動がある場合、或る物に生命があるやうに見え且つ變化する場合、眼は變化の法則を認めることをしないで耳が音聲と談話とを聞き目撃せるものの謎を見えざるものに依つて説明せんとするのである。想像力は緊張されその流儀によつて即ち想像によつて満足されるのである。大體から云うて

耳はすべての官能のうちで最も臆病な最も卑怯なものである。耳は敏捷に感ずるが唯漠然として居る。永く保つことは出来ず明晰に比較することは出来ぬ、蓋しその對象は麻醉的な流のうちに過ぎゆくのである。精神覺醒の本分を具へたものであるが彼の官能殊に眼の助力なくんば明瞭に満足するまで教へ得ることは稀である。

(三)故に如何なる民族に於て想像力が最も強く緊張されねばならぬかを見るのである、即ち孤獨を愛し自然の不毛な地方、砂漠岩石多き地方、暴風ある海岸、火山の麓その他驚異すべく又變動ある地方に住んで居る民族を第一とするのである。太古の時代から亞刺比亞の砂漠は高尚な想像の母である、而して之に耽つたものは概して孤獨な感に堪へぬ人物であつた。モハメットは孤獨な境地に於てコーランを得た、その興奮された空想は、身を天上に馳せすべての天使と聖師と世界とを見たのである。モハメットの精神は寂寞の夜の稻妻、大なる應報の日、その他の非常な事件を畫いた時ほど燃え立つたことは決して他にあるまい。何處に且つ何處まで薩滿教の迷信の傳播して居らぬ處があるか。グリーンランド並びに三倍のラブランドから氷海の海岸の常夜の國全部を経て遠く韃靼に至り更に亞米利加に及び殆どこの全大陸に互つて居る。到る處に魔術師は現れ而して行く所としてその生活せる世界は自然の妖怪ならぬはない。かくて地球の四分の三以上

にその信仰が行れて居る。蓋し歐羅巴に於ても又フィン種族並びにスラヴ種族系統の多くの民族はなほ自然崇拜の魔術師を信じ、而して黒人の迷信もその精霊と風土とに應じて改造された薩滿教に外ならぬのである。亞細亞的文化の國土に於ては薩滿教は勿論實際的に且つ技巧的な宗教と國家の制度とによつて驅逐されたが、併しそのなほ窺はれ得る場所には即ち僻地に於て又民衆の間に認められるので、更に南海の若干の島嶼に到る時は大勢力を以て行はれて居る。故に自然崇拜は地球を圍んで居るのでその空想は人間の窮乏の之と相接して居る各地の有力にして恐怖すべきものを利用して居るのである。かくて太古に於ては地球の殆どすべての民族の神事であつたのである。

(四)各民族の暮し方と心霊とがこの點に有力に影響することは殆ど何等の記述を要さない。牧羊者は漁夫や獵師とは別な眼で自然を見る、而して何れの地方に於ても又この職業は民族の性質の如く異なつて居る、例へば北方カムチアゲアル人の神話に於て寧ろ南方の民族に於て求むべき大膽な淫逸を認めて私に驚くのであるが、而もその風土と發生的性質とは又この不合理に就いて説明を與へるのである。その寒冷の地方には火山あり温泉あり、痲痺する程の寒冷と沸騰するが如き火熱とは相争つて居る。その淫蕩な風俗とその粗野な神話の諧謔とは兩者の自然の産物である。

發端も結末もない情熱的で饒舌な黒人の物語も之と同じである。北亞米利加人の簡潔な引き締まつた神話も之と同じである。印度人の華麗な空想も之と同じである、實に是は印度人と同じく極樂の愉快な平和を呼吸するもので、その男神は牛乳と砂糖との湖に俗し、其の女神は涼しい池中にあつて芳香を放つ花の夢に住んで居る。要するに何れの民族の神話も其の自然を目撃する固有の方法の模寫であつて、殊に其の風土と心霊とに従つて之に於て善惡何れを多く認めたりや、而して如何に例へば、一を以て他を説明せんと試みたりやを示して居るのである。故に最も未開な地方に於ても最も不成功な點に於ても人間の精神の覺醒する以前に夢想に耽り喜んでその幼年時代に止つて居つた時の哲學的研究である。

(五)普通にアンゲゴック、幻術士、魔術師、薩滿、僧侶を民族蠱惑の張本と認め之を詐欺師と呼んですべてを説明し得たりと信じて居る。多くの場所に於ては勿論さうであるがそれらのものも併し人民であつてかくまで昔からの口碑に欺かれて居ると云ふことを忘れてはならぬ。種族の想像の聚りうちに養成され教育されたので、その就職には斷食・隱遁・空想の惑溺、身體・精神の疲勞が伴つたのである。故に何人も自分の神霊が現れかくて後になつて一生涯同じやうに反覆思想を緊張せしめ身體を疲勞せしめて他人の爲に行ふ處の神告を先づ自分の精神に於て完成し

た後でなければ魔術師とはならぬのである。最も冷静な旅行家はこの種類の多くの幻術に於て驚歎せねばならぬが、是は出来得られることと信せず而して數々説明することの出来ぬ想像力の結果を見たからである。大體に於て空想はなほすべての人間の精神力の最も研究せられざるもので多分、最も研究し難いものであらう。蓋し多くの驚くべき病氣の示すが如く空想は身體の全構造と殊に腦髓神經と相關聯して居るから、すべての微妙な精神力の紐帶根柢であるのみならず、又精神と身體との關聯の結び目で云はば全體の官能的組織が思惟力を身に用ひて出芽した花の如きものであるやうに思はれる。故に空想は又必然的に父老から小供に傳はる第一のもので、多くの不自然な實例や更に又最も偶然的な事柄に於ける内外組織の争ひ難い類似が數々之を示すのである。生得觀念があるか如何かと云ふことは永く論争された、而して普通理解されるやうな意味では勿論存在して居らぬ。併し或る觀念又は心像を受容し聯絡し傳播するに就いての第一の資性であると解したならば、何物も之に反對せざるのみかすべてのもの皆之を是認するやうに見えらる。小供が六指を遺傳し得るならば英倫の豪猪人の家族がその人間らしからぬ佝僂を遺傳するところが出来たならば、身體容貌の外部の組織が數々明かに傳はるならば、腦の構造が又傳はらないと云ふことは奇蹟にあらずして如何にしてあり得よう。多分その最も精巧な組織上の皺と雖も遺

傳されるのである。多くの民族に於ては吾人に何等の概念がないやうな空想の病氣が行はれて居る。病人の同胞はすべて之に對して自ら發生的に同情を感ずるのでその苦痛を憐むのである。例へば勇敢にして健全なアピボネ人の間にありては間歇的な發狂があつて中間の期間にありては狂人は毫も之を知らぬのである。曾つて健全であつたやうに健全であつて唯精神が留守になつたのみであると云うて居る。多くの民族に於てはこの苦痛を發散せしめる爲に夢祭を舉行し幻想者にはその精神の命ずるすべてのことを爲すことを許して居るのである。大體から云つてすべての空想豊富な民族に於ては夢は驚くべくも有力である、實に多分又夢は最初のミューゼの女神であらう。眞の小説詩歌の母であらう。夢は人間の眼には見えぬが而も人心に於て憧憬して居る人物や事物を齎らすのである。例へば死せる戀人が後に残りしものの夢枕に立ち、永く元氣よく吾人と共に眠食を共にして居つたものが今や少くも幽霊となつて夢に吾人と共に生活せんことを望むのは自然のことではあるまいか。民族の歴史は如何に神意がかくまで強く純潔に且つ自然に人間に働く媒介たる想像の機關を用ゐたかを示すのである。併し若し詐欺や専制が之を利用して而して人間の空想と夢想とのなほ最も制馭し難い全大洋をその目的に利用するならば戰慄すべきことであつた。

地球の大精神よ、如何なる視力を以て我が渾圓球上に角逐して居るすべての幽霊と夢想とを諦視することぞ。吾人は純潔な空氣のうちに呼吸することの出来ぬやうに、塵埃から組成された吾人の外装の組織に今なほ純粹の理性を完全に傳へ得ぬのである。而も亦想像力のすべての迷路に於て人類は理性へと教育されるのである。人類が心像に執著するのは之が事物の印象を與へるからである。この雲霧のうちに又眞理の光線を求め且つ見るのである。狭く局限された生活に於て出来得る限り空想から實體に進み即ち小兒から成人に發達し、而してこの目的に於て又純粹な精神を以て同胞の歴史を涉獵した人は幸福で選人である。精神にして若し風土と教育とが吾人に定めた狹隘な範圍から敢へて穎脱し而して他の民族に就いて少くも缺如し得るものを學んだならば高尚な進歩と云ふべきである。永く必要と認められた如何にも多くのものが彼處に缺如して居り又缺如し得られることぞ。吾人が數々人間理性の最も一般的な原則と認めた思想も恰も航海者に取つて大陸が雲の如くに消え行く如くに或る場處の風土と共に彼處に此處に消え去るのである。この民族がその思想界に於て必要缺くべからずと認めたことも彼の民族は決して考へ及ばず甚しきは之を有害となすのである。かくて吾人は地球上に於て人間の空想の八幡知らずを彷徨して居るのである。併し何處に屈折せる光線の太陽に向ふが如くすべての迷路の湊合する八幡知らずの中心點

があるか、それが問題である。

三 人類の實際の理智は到る處に生活方法の必要の下に起つたのである、併し到る處に於て民族の精靈の花である傳統と習慣との子である

普通に地球上の民族を狩獵民・漁獵民・遊牧民・農民に分類して居る、而してこの分類に従つて文化の段階を定めるのみならずなほ又文化そのものをこれらの生活方法の自然の結果であると定めて居る。これらの生活方法が先づ第一に自然と定められるものであつたならば至極妙とある。併し地方毎に殆ど變化する上に多くは互に相錯綜して居るので純粹な分類の適用は到る處に困難である。グリーンランド人は鯨を狙ひ馴鹿を狩り海豹を殺すので漁夫で且つ獵師である。併し黒人が魚を漁り又はアラオカニア人がアンデス山中の曠野に於て獵するとは全然方法を異にして居る。ベヅウイン人、蒙古人、ラップ人、秘露人は遊牧民であるが併し一は駱駝を二は馬を三は馴鹿を四はアルバカ並びにラマを放牧するので如何に互に異なつて居ることぞ。ヴィゲ人と日本人とが農民として互に等しからぬことは英人と支那人との商業に於けるが如くである。

發展の機會を俟つて居る元氣は十分に民族に存して居るとしても慾望のみが文化を齎し得るものとは又思はれない。蓋し人間の怠惰がその缺望と妥協してこの夫婦が安樂と云ふ子を生むやうになるや否や、人間は現状を固執するやうになり如何に努力するも之を促して改善に向はしめることは出来ぬのである。故に民族の生活方法をかくの如くに定むるものは之を他の勢力ある原因に求めねばならぬ。而も茲には之を一定したものと認め而して活動的な精神力が如何にその相違に従つて示されるかを研究して見よう。

根や雜草や果實を食物として居る人間は自然の特別な刺戟が之に加へられぬならば永く懶惰であつてその元氣は局限された儘である。美しい風土に於て温和な血族から出たのでその生活方法は温和である。蓋し豊富な自然が努力を用ゐずしてすべてを提供する時如何して爭奪の必要があらうぞ。併しその藝術と發明も又唯日用の欲望を豊富にするのみである。自然が果實殊に有益な波羅蜜を食物として美しい蒼天の下に樹皮と樹枝を衣服として授けて居る、島嶼の住民は平和で幸福な生活を營んで居る。旅行記に従へば鳥はマリアナ島人民の肩に憩うて心靜かに歌つて居る。野獸が居ないので之に對して皮膚を護る必要がないから弓矢を知らぬ火も亦その珍しがるものである、その温和の風土は火なくも愉快に暮せるのである。カロリン列島その他南海の幸福な

島嶼の住民も亦同様であつた。唯その或ものに於ては社會の文化が既に向上して種々の原因から幾多の藝術と職業とが相提携するに至つたのである。風土の苛刻な處では人間も亦より多く艱難な多くの生活方法にその救済を求めねばならぬ。新和蘭人はカンガルやオッボスムを逐ひ鳥を射、魚を捕へ芋薯を食ふのである。即ちその粗野な安樂の範圍に於て必要な幾多の生活方法を併せて云はば之を渾成しかくしてその流儀で幸福に生活するのである。新カレドニア人、新西蘭人も亦かくの如くで貧困なテラ・デル・フェゴ人にも變りはない。樹皮の小舟、弓矢、籠と袋、火と小屋、衣服と手斧とを有つて居るので地球上の文明民族が之を以てその文明を完成したすべての藝術の發端は備はつて居るのである。唯最も不毛な岩石の上に於て凜烈な寒氣の桎梏を受けて居るのですべてがなほ最も粗末な發端に止まつて居るのである。キャリフォルニア人はその國土が授けその生活方法が促すほどの理智を示して居る。ラブラドルの住民やその他地球上の窮乏せる僻陬のすべての住民が皆かくの如くである。到る處に缺乏と妥協を遂げ強ひられて活動に甘んじ世襲習慣を守つて幸福に生活して居る。その必要と爲さざるものは之を蔑視するので、例へばエスキモ人は輕快に海上に於て橈を執るが游泳は未だ之を學んで居らぬ。

我が地球の廣大な陸地に於て人間と動物とは益々相密集して居る。故に人間の理智は種々の方

法に於て動物あるが爲に行使されたのである。勿論亞米利加に於ける多くの澤國の住民は又大蛇と蜥蜴、大蜥蜴、帶獸とアリゲートルに對しては避難せねばならぬ。併し多くの民族は高尚な狩獵民族となつたのである。南北亞米利加人にはその生活上の職業能力に何が缺けて居るか。驅る處の動物もその棲所もその暮し方もその策略も熟知して居り之に對して腕力と謀略と實習とを以て武装されて居る。グリーンランド人の海豹獵のやうに狩獵者の名譽を博するには兒童も養成され得る。之に關しては談話をも歌謠をも聞き名譽ある手柄は身振に於て又熱狂せる舞踊に於て眼前に演ぜられるのである。又小兒の時から武器の製造を學びて之を使用し、武器を玩具として女子を輕蔑したのである。蓋し生活の範圍が狭ければ狭き程、而して完成を期する仕事が一一定して居れば居る程益々之は維持されるのである。故に何物も努力して居る青年の前途を妨げるものはなく、同胞の面前に於て父祖の階級・職業に依つて生活して居るのですべてのものは寧ろ之を刺戟し激勵するのである。何人にもあれ各民族の技藝に關して畫譜を編纂したならばその我が地球上に散在して何れもその處を得て光彩を放つのを認めるであらう。茲に黒人は歐羅巴人の敢へて身を投じ得ざる程の激浪中に躍り込み又吾人の眼の及ばぬ程の喬木に攀ち上るのである。彼の漁夫は魚族を迷はず程の技巧を以て漁業を行ふのである。このサモエド人は白熊に出遭つて之を捕

り彼の黒人は元氣と詐謀とを合せ用ゐるならば二頭の獅子にも驚かぬのである。ホッテントット族は犀と河馬とに向つて突進しカナリー群島の住人は羚羊の飛び廻るやうに峻しい巖石の上を歩き、丈夫な男性的な西藏婦人は地球の最も高い山脈の上を外國人を運ぶのである。すべての動物の機關と本能とから構成されたプロメテウスの一族は又藝術と技巧とをこれらすべてから學んだので甲の點に於ては彼に乙の點に於ては是に優り即ちすべてを凌駕して居るのである。

人間の藝術の多くは動物並びに自然から學んだと云ふことは疑ひない。何故にマリアナ人は樹皮を裝ひ而して亞米利加人とバブ人とは羽毛を以て身を飾るのであるか。是はマリアナ人は木と共に生活し之から食料を得るからで、亞米利加人とバブ人とはその國の華麗な鳥が眼に見る最も美しいものである。獵師はその獲物の如く裝ひその海狸の如くに建築するのである、他の民族は鳥の巢の如くに小屋を木上に造るのである。鳥の嘴は人間に取つて槍と矢との原型であつた、宛も魚の形が技巧的に泳ぐ小艇の模型となつたやうなものである。蛇からは武器に毒を産ると云ふ危険な技術を學んだ。而して身體を彩色すると云ふ廣く普及した驚くべき習慣も亦野獸の眞似をしたのである。即ち何故に野獸はかく美しく飾られかく様々に彩色されてゐるのに私は一樣な蒼白色の儘で彷徨せねばならぬのであらうか、私の蒼天と私の惘惘とは何等の裝飾を與へぬので

あらうかと考へたのである。かくて整然と線を引いたり又は彩色し始めたのである。衣服を纏へる民族と雖も牛の角や鳥の冠熊の尾を妬んで之を模倣したのである。北亞米利加人は鳥が玉蜀黍を齧したとて感謝して讃辭を呈して居る、而して多くの地方的薬劑は明かに動物から學んだのである、實にこれら總べてに於ては野獸に伍して生活し猶末だ無限に其の上に超越して居ると信じて居らなかつた自由な自然人の官能的な精神が宛も必要であつたのである。歐羅巴人に取つては他の大陸に於て土著人の日常に利用して居るものを唯發見するさへ困難である。實に長い努力の後に漸く或は哀願によりてその祕密を得ねばならぬのである。

併し人間は動物を誘惑して結局之を羈絆の下に置いてから無限の進歩を來したのである。生活上此の力の代用を得ぬものとの間に存する相違は隣接せる人間の間に於てさへ著しく大きいのである。隔在せる亞米利加が發見の當時舊世界の大部分に猶遙かに後れて居つて、歐羅巴人が無防禦の羊群に對するが如く住民を待遇し得たのは何の爲であつたか。今日なほ總べての數へ盡せぬ森林民族の實例の示す如くには是は體力に於てのみではない、發育に於て疾驅に於て敏捷に於て亞米利加人は一人一人としては其の國に於て輸贏を争つた多くの民族を凌駕して居る。理智の力に於ても一個の人間に於て見れば又相違を認められない。亞米利加人は自ら保護するの術を解し妻

子と共に幸福に生活して居つたのである。故にその理由は藝術に武器に共同の聯絡に、併し殊に家畜に之を求めねばならぬ。若し亞米利加人がその戰鬥力を戦慄して是認した唯一の馬を有つて居つたならば、西班牙人が舊致の國王陛下に同じく奉仕せる從僕として之に使喚した猛犬にして亞米利加人のものであつたならば、征服は更に多くの人命を損じたであらう。而して騎馬の民族は少くも山嶺に曠野に平原に退却するの途が開かれて居つたであらう。すべての旅行家は今日なほ馬が亞米利加の民族の最大の區別を爲して居ると云つて居る。北米殊に南米に於ける乘馬隊は墨是哥並びに祕露に於ける哀むべき隸民に對して威壓の力を有し、土人は之を同一地球上の比隣の同胞と考へることが出来ないものである。墨是哥人はその自由を維持せるのみならず身體並びに精神に於ても又多分亞米利加發見の當時に比すれば勇敢な人間になつたのである。その同胞の壓抑者が運命の無意識の利器として之に齧した馬は多分他年一日全大陸の解放者となることが出来る。之に授けた他の家畜は今や既に一部分その愉快な生活の利器となつたが多分他日眞の兩半球の文化の補助者となり得るであらう。併し是は惟り運命の掌裡に存して居るのであるが、亞米利加人が永く馬をも驢馬をも犬をも牛をも羊をも山羊をも豚をも猫をも駱駝をも知らなかつたのは又運命の掌裡から出たことで大陸の自然に存して居つたのである。その動物の種類は少なかつ

たのは土地が狭く舊世界から隔在して居つて而して大部分は多分他の大陸よりも遅れて海底から隆起した爲であらう、随つて又澤山畜養することが出来なかつたのである。墨是哥、祕露並びにチリの駱駝にして羊なるアルバカとラマとが唯一の畜養されるべき而して畜養された生物であつた、蓋し歐羅巴人の理智を以てするも他のものを之に加へ得ず、キキもブマ（虎）も獺もアリも有用家畜に養育することは出来なつたのである。

之に反して舊世界に於ては如何に畜養されるべき動物の多きことぞ。而して人類の活動的理智が如何に多く之を利用したことぞ。駱駝と馬となくば亞刺比亞や阿弗利加の砂漠は近づき難かつたであらう、羊や山羊は人類の家庭の制度となり、牛や驢馬は民族の農業と商業とを助けた。質朴な状態に於ては人類はこれらの動物と親密に社交的に生活して居つた。親切に之を取扱ひ且つ之に何を感謝せねばならぬかを認めて居つた。亞刺比亞人と蒙古人との馬に對する牧羊者の羊に對する獵師の犬に對する祕露人のラマに對する皆かくの如くであつた。世人の知れるが如くすべての人間生活の補助動物は又人道的な待遇に由つて繁榮するので、人間を理解し人間を愛し、野性の動物も又人間に壓抑されてゐるものも解せぬ能力と好悪とを發達せしめるのである、蓋し愚鈍にして肥滿せるもの又は酷使されて疲癒せるものは種屬本來の元氣と本能とをも失ふのである。

故に或る地方に於ては人間と動物とは互に教化を受けたのである、即ち人間の實際的な理智は動物によつて動物の能力は人間によつて且つ強められ且つ擴大されたのである。カムチアゲール人の犬の記事を讀むものは犬とカムチアゲール人と何れが理智ある生物であるかを疑はざるを得ぬのである。

扱人間の最初の活動的な理智はこの範圍に於て停止して居る。實に之に慣れたすべての民族は之を棄てるのが困難である。殊に何れも農業の人を奴隸化するの支配を恐れるのである。北亞米利加の沃野は如何にも美しいが何れの民族も正にその財産を愛して之を保護するが、實に極めて多くのものは歐羅巴人から貨幣やブランドイや若干の娛樂の價値を學んだが、而も田園の耕作、玉蜀黍その他若干の園藝果實の栽培並びに小屋の全體の世話に任ずるものは女子のみで、尚武的な獵師は園藝家や遊牧人や農夫にならうと云ふ決心を立てることが出来ない。所謂野人には活動的な自由生活が何事よりも第一である、危険を以て圍繞されて居るので之に依つて元氣と決斷とを覺醒し而してその代償として身體は壯健となり小屋は獨立の平和に溶し一族は威望と名譽とを博するのである。それ以上は何物をも慾望せず又要望せぬのである、而してその愉快なことは知らずその困難には堪へられぬ他の事情が如何して新たな幸福となることが出来ようぞ。吾人

が野人と呼べるものに就いては多くの飾なき記事を読むのであるが、健全な理智と自然な公平とは之に於て明白ではないか、人間の形状も亦その状態に於て假令不器用な手で目的とする所は乏しいが而も茲に形成され得る丈け十分に形成されて居るのである、即ち沈著して満足するやうに且つ長く續いて健全であつた後に安心してこの生涯から別れるやうに形成されて居るのである。ベヅウイン人とアビボネ人とは實にこの状態を脱せぬのでベヅウイン人は都市の生涯に對して恐怖しアビボネ人は死後なほ教會裏の埋葬に對して畏縮するのである。その感情から云へば何れも生きながら埋められることと思ふのである。

農業の行はれるやうになつてからも又人間を一の土地に定住せしめ我がものと汝のものとなふ制度を採用するには努力を要した。文化を具へた黒人の小王國の多くの民族は今なほ之に就いて何等の概念をも抱かぬが是はその説く通り土地が共有財産であるからである。毎年田園を互に分配して手易い努力で之を耕作するので、收穫を終つた後は土地は當然又共有となるのである。大體から云つて如何なる生活方法も土地に一定の柵欄を設けた農業ほど人間の思想に多くの變化を及ぼしたものはない。手工と藝術、村落と都市を生じかくて法律と警察とを促進せねばならぬので、必然の結果として又彼の恐怖すべき專制政治に到るの途を開き、かくて各自にその田園を定

めたが結局各自にこの一片の土地に於てのみ爲すべきことを規定したのである。今や土地は最早人間に屬せずして人間が土地に屬するやうになつたのである。之を使用せざる時は使用し來つた力の感じも亦忽ちにして失はれるので、壓抑されたものは小膽となつて奴隸の境涯に沈淪し勞働に幸福を求め難いので柔弱な淫蕩に耽るのである。故に全地球上に於て天幕の住民は小屋の住民を羈軛に苦しむ馱馬の如く又人類の萎縮した變種の如くに看做すやうになるのである。最も辛い缺乏も自決と自由とが味を添へ且つ酬いる限り妙味を失はぬので、之に反してすべての美味も精神を弛緩せしめ無常の生物から果敢ない生活の唯一の慰藉たる威嚴と自由とを奪ふやうになれば毒である。

神意を以て人間を公民社會へと準備する爲この最も主要な手段として用ゐた生活方法に就いて私が何かその價値を奪はんとするものであるとは何人も信じまい、蓋し私も亦地球の麵包を食するのである。唯我が地球の状態に従つて農民の生活と同じく人類の教育を施すべき運命を有つて居る他の生活方法をも亦公平に取扱いたいと云ふのみである。大體から云つて地球の住民の最小の部分が吾人の流儀で田園を耕すので而して自然は他所の生活を又別に定めたのである。根や米や木の實や水中、空中、地上の獲物によつて生活して居る彼の多數の民族は、今や實に若干の隣